

ヒーロー不在

ブラックモノクローム

進めると突き当たたる微温い泥濘。内と外の境界。蜂蜜から飴色、グロテスクな赤への階調を隠す柔らかな曲線。

目の前で揺れる女の後頭に顔を寄せると消えかけのストロベリーの香りと煙草の匂いが鼻腔に流れ込んできた。鼻先で髪を掻き分け覗いた穴から吹き込むように「ねえ、もっとマンコ締めなよ」と囁く。女が「ん」と小さく応じ動きを止める。わずかに圧が増す。

悠木泉（ゆうき いずみ）が女と入った多目的トイレは白黒のツートンだった。胸の辺りで上下に色が分かれた壁を蛍光灯の冷えた灯りが照らしている。上は白、下は黒のモノクローム。黒い方の壁に設けられた水栓設備の縁に、女が両手をついている。洗面台よりも一回り大きく便器よりも位置が高い。その流しの内側に爪先を白く塗った指が滑り落ちているのが目に入った。汚いものを見た気がして思わず顔を背けると、壁に設置された大きな鏡に映る自分と目が合う。鏡面に映る女はゼブラ柄の長い巻きスカートを腰の辺りまでたくし上げ、くしゃくしゃに丸まった黒のパンティを右の太ももに引っ掛けている。その女を背後から抱えている自分も黒いデニムがずり落ち臀部が覗いている。間抜けそのものだ、と思う。

女の髪に再び顔を埋めて目を閉じる。腰を強く打ち付けるとわざとらしい声上がる。何もかも厭になり始め、首筋に歯をあて強く噛むと短い呻きが漏れた。

セックスまで紛い物になってしまったら真実なんて一体どこにあるんだろう——そんなことを考えている。

肉を絞るように力を込めると瑞々しく滑らかな表皮に指が沈んだ。細やかな肌目は自分の身体を覆うそれと明らかに異なる。浮き彫りになった他人の手触りに少しだけ興奮を覚える。

それでも、射精の瞬間までの時間はひどく長いように思えた。

壁にある大きく丸い開閉ボタンを固く握り込んだ手の側面で乱暴に押し込むと、ごとと小さな音がして自動ドアが開いた。外に足を踏み出した瞬間、眩しい光が視界に飛び込んできた。ぱっぱつと二度、向けられた強い光を遮るよう反射的に片手で目を隠す。女が背中隠れるように身を小さくした。

薄目で確認すると、狭い廊下の先に黒のダウンを着込んだ小柄な男が立っていた。こちらに向かつてデジタル一眼レフを構えている。その姿を確認し「あーあ」と悠木が小さく声を漏らす。

ぱつともう一度、続けてぱっぱつと三度。シャッターが押される度レンズの上のフラッシュライトが光り、大理石を模した人口の壁や天井に光が反射する。廊下の先に広がる連絡通

路から何事かと足を止めたスーツ姿の女がこちらを覗き込んでいた。

「あんた、便所の前にずっと張り付いてたの？ 好きなの？ 便所が」

目の前のカメラマンらしき男に尋ねるとシャッターを押していた指が止まった。ファインダーから顔を離し、向けられた細い目が訝しげに悠木を見上げる。

「そうやって稼いだ糞みたいな金でいつかこの便所みたいの良い部屋に住めるといいね」

背後の個室を顎で指しながら言い捨てると、男の顔が歪んだ。

「ねえ、人生楽しい？」

悠木の問いかけに返事はなかった。

ピンクノイズ

1

「見て、悠木泉のやつ始まるみたい」

ダイニングテーブルを挟んで向かいに座る佳代子（かよこ）が背後のテレビを指差したので振り返る。音を消したまま、つけっぱなしになっていたリビングのテレビに映っているのは昼のワイドショー番組だ。マゼンダを基調とした派手なセットの中央に色黒の中年男性が立っており、後ろのディスプレイを見ながら口をぱくぱくさせている。

「ちょっと、音量上げて」

天板に肘をついた佳代子がグラスに手酌でロゼワインを注ぎながら言った。学生時代からの友人である佳代子は帆波（ほなみ）に対して遠慮がない。「まだ昼だから」という理由で酒を断った帆波を放っておき、さつきから一人でぐいぐい呑んでいる。

椅子に座ったまま上半身を後ろに捻りリモコンの消音ボタンを押すと、暖かい風を送り込んでいたエアコンの音が掻き消され、リビングが一気に騒々しくなった。

△——まもなく謝罪会見が始まる予定です。あ、悠木さんが、今Vスピーカーから聴こえる若い女の声が興奮を抑えきれないように弾んでいる。

画面の中のさらに小さな画面、白い壁が映るワイプの映像が大きくなった。変わりに色黒の司会者が消える。

会場では身を屈めたまま床を埋め尽くしている報道陣が武器のようにカメラやマイクを構えている。その視線が集中する白の扉が手前に開き、中から背の高い男が現れた。

悠木泉。あまりテレビを見ない帆波でも顔を知っている若手俳優だ。

その悠木がまっすぐ前を見たまま室内へと足を踏み入れる。カメラが表情を捉えようとズームインし、美しく整った容貌が大写しにされた。一斉に焚かれるフラッシュ。青白く明滅する光に照らされた顔は凍り付いたように動かず感情が読み取れない。

「やっぱ顔は良いわねえ」と佳代子が呟く。

帆波は椅子の背もたれに腕をかけ上半身だけをテレビに向けたまま、画面の右上に表示された八悠木 泉 謝罪会見 生中継Vの文字を眺め、「写真撮られたの、サンズだけ」と尋ねる。「そうそう、MINATO SUNS（ミナトサンズ）の多目的トイレ。ちょっと奥まって目立たない場所にあるんだよね、仕事で行ったときに見かけたことあるよ。にしても、よくあんな場所でヤルわ」と言う佳代子に「最低よね。女をなんだと思ってるのかしら」帆波は眉を顰める。グラスにワインを注ぐ音を立てながら「顔は良いんだけどねえ」と佳代子が愉快そうに笑う。

ヒーロー俳優の悠木 泉が、港区にある商業施設の多目的トイレに女を連れ込んだ。先週、その記事が週刊誌に掲載された。悠木は6年程前に子供向けの特撮ドラマでデビューした若手俳優だ。芸歴はまだ浅いが子供と一緒に番組を観ていた母親達のハートを掴み、短期間で一気にスターダムにのし上がった。とくに去年の主演ドラマは大ヒットし、放送時間になると街中から女が消える、などと揶揄され、昨今では珍しく社会現象とまで言われるほど人気を博した。今では街を歩けば巨大看板の中の悠木と目が合い、テレビを点ければ清涼飲料水を手に笑う悠木を見る。ちなみに去年の主演ドラマで悠木が演じたのは新米教師で、教え子の母親である年上ヒロインとの純愛を貫く、というなんともあざとい役どころであった。

もともと、一人娘がこの春から高校に通い始めようとしている帆波にとっては特撮番組も恋愛ドラマもあまり興味を惹かれるものではなく、悠木の姿を見かける度に「顔は良いけど目が暗い」などと思うばかりだった。

その悠木が、多目的トイレに女を連れ込んだという報道は、日本ばかりか悠木人気の高かった韓国や台湾などアジア諸国も巻き込み視聴者に大きな衝撃を与えた。その悠木がこれから謝罪会見を行うという。民法はもちろん、国营放送からWeb、ラジオに至るまで、朝からメディアは悠木の話で持ち切りだった。

「見て見て、生意気そうな顔」と佳代子が声を上げる。光沢のない黒いスーツに黒いネクタイを締めた悠木は装いこそいかにも「謝罪スタイル」ではあるものの、その表情には悲哀も、ましてや反省の色も見て取れない。顎をわずかに上げ目の前の報道陣を見下ろし、どちらかと言えば不貞腐れているように見える。

「なにこの男、ちゃんと反省してんのかしら」

「そうよねえ。一応俳優なんだから、申し訳ありませんでしたって顔、作らないとねえ」

「演技じゃ駄目でしょ。心から謝ってもらわないと」

「だけどさ、トイレに女連れ込んでヤツちゃうような男が、たかが一週間ぐらいで心入れ替えると思う？」

「……入れ替えるわけないか」

悠木にマイクが手渡された。会見場が緊張感に包まれ、しんと静まり返る。帆波と佳代子も

なぜか固唾を呑んでじっと見守る。しかし悠木はマイクを握る右手に視線を落としたまま微動だにしない。

不遜な表情を浮かべたままじっと動かない悠木の顔。始めのうちこそ拍手のように焚かれていたフラッシュもまばらになり、ついに止んだが悠木はそれでも動かない。しばらく見入っていた佳代子が「……なんも喋らないわね」と口を開き「放送事故かしら」と帆波も首を捻る。ついに痺れを切らした男性記者が△あの、今回の件について謝罪の言葉を——▽とようやく声を上げた。

男の言葉に悠木がすかさず顔を上げ、

△なんで俺があんたに謝んなきゃいけないの？▽

と逆に言葉を返した。

「え」と驚く佳代子、帆波も思わず「は」と声が出る。会見場のザワめきがスピーカーからさざ波のようにリビングにまで漏れはじめる。

△いや、ですから。今回の騒動についての謝罪会見なんですよね？ 我々は悠木さんの言葉を待ってるわけなんですけど▽と、少し苛ついたような記者の声。

△いや、だから。なんで俺があんたに謝罪しなきゃいけないのかって聞いているの。俺、あんたになんか迷惑かけた？▽

ざわめきから耳障りな喧騒へ。次々と立ち上がった記者達がヒステリックに声を上げ始める。

△世間をこれだけ騒がせておいて謝罪の言葉はなしですか!?▽、△ファンに何か言うことは!?▽、△公衆の場であんな真似をしたのに反省は!?▽、△嫌な思いをした人が大勢いますよ!?▽

スーツの集団が悠木に詰め寄り責め立てる。その声が少しだけ止んだ隙に口を開いた悠木が、さもうんざりした口調で△……だから会見なんかすんの嫌だったのに▽と呟く。その言葉に被さるように画面の外から△悠木いつ、いい加減にしろっ!!▽という男の怒鳴り声。

「……今の、事務所の人かしら」と言う帆波に、「……かもね」と佳代子。

△多目的トイレでなければ用を足せない方もいらっしやるんです。貴方が行った行為はそういった方達に対する侮辱では？▽怒りに満ちた女性記者の声に、一瞬、会場が鎮まる。

△え、じゃあ普通のトイレなら良かったの？▽

△そんなことは言ってますんっ！ そういった方達が貴方の行動のおかげで嫌な思いをしていると言ってるんですっ！▽

△そういう（・・・）人達がそう言ってるの、あんた聞いたの？▽

△それはまだですが……一般論として▽

口籠る女を見下ろしながら悠木が一度、ふっと息を吐いた。

△……まあ言いたいことはわかる。その点については悪かった、謝る▽と言って悠木が軽く

顎を引いて見せた。

そのあまりにもささやかな頭部の動きに「……今ので謝ったつもりかしら」と帆波、「……かもね」と佳代子。

再び黙り込んだ悠木に今度は男性記者から△元ヒーロー俳優としてファンの子供たちに一言お願いします▽という声。その言葉に、ち、と舌打ちを返してから悠木がカメラを真正面に見据えた。射貫くように向けられた眼差しの鋭さに、なぜかこちらが責められているようで帆波はばつが悪くなる。

△いいかがキども、よく聞きやがれ▽

派手な容貌に似合わぬ落ち着いたハスキーボイス、

△ヒーローだってなあ、セックスくらいすんだよっ！▽

と悠木が大口を開け啖呵を切った直後、画面が切り替わりぽかんと口の開いたスタジオの司会者が映し出された。突然モニタに映った自分の姿にはっとしたように顔を上げ△……えー、ただいま、番組内で不適切な発言があったことについてお詫び申し上げます▽と不承不承、頭を下げる。

「今、あいつ、なんて言った!？」と目を剥く帆波に「ヒーローもセックスするって」と佳代子。「信じられないっ!!」テレビの電源を切り佳代子の方に向き直ると背中に痛みが走り「あたた」と思わず声が出る。長い間、無理な体勢で見入っていたせいだ。

「あんなこと言って良いわけっ!？」

「なんかすごいの見ちゃったわねえ」

「信じられない……女を、子供を、なんだと思ってるのかしら」怒りの収まらない帆波に、佳代子は半分程空いたロゼのボトルを片手で持ち上げ「まあまあ、テレビの中の話にそんなムキになったってしょうがないじゃん。冴香(さえか)ちゃん帰ってくる前にあんたも一杯やったら?」と差し出す。「でも……」と呟きながら帆波はボトルを見てしばらく考える。向けられた瓶の口から溢れ出す甘く爽やかな葡萄の芳香に思わず喉が鳴ったが「やっぱ駄目、昼から呑むなんて」と断る。

テーブルの上に伏せてあったスマートフォンが、ぶぶぶと振動して嫌な音を立てた。慌ててひっくり返すと「ベストコート 藤沢」と表示されている。

「ごめん、職場から電話」と断りを入れ手に持つ。休みの日に勤め先から電話がかかってくることなど今までなかったのに、と少しだけ嫌な予感がした。

相手は職場の上司である嶋(しま)だった。180cm以上ある巨体の割に、いつも自信なさげにおどおど話す男だ。それが今、電話越しに聞き取れないほどの早口で何か言っている。

「はい? あ、はい。でも——」

驚いているうちに矢継ぎ早に言葉が続き、一方的に電話は切られた。

沈黙するスマートフォンの画面に呆然と目を落とす。「どしたの」と佳代子の呑気な声。

「……利用者さんが、死んだって」

「え、あなたの働いてるサ高住の？」

佳代子の言葉に帆波が頷く。

帆波が働く「ベストコート 藤沢」は高齢者向けの賃貸マンションだ。その利用者で帆波もよく知る若月妙子（わかつき たえこ）が死んだと嶋は言う。

「お気の毒にね……だけど住んでるのってお年寄りばかりでしょ。そういうこと良くあるんじゃないの？」と尋ねる佳代子に帆波はかぶりを振った。

「違うの、殺されたんだって。訪問介護のヘルパーに」

2

重厚感のあるマホガニー製の天板に置かれた安っぽい質感の電話に受話器を戻し、宇佐美 壮吾（うさみ そうご）は背後に客人の気配を感じながら少しの間、考えを巡らせる。

振り返る。デスクの向こう、執務室の中央に据えられた三脚の二人用ソファが膝丈ほどの四角いローテーブルをコの字に囲んでいる。向かって左側、大きな窓を背にして客人がソファに浅く座っている。

「失礼しました」と宇佐美が向いの席に戻りながら謝罪すると「なにか緊急の御用でしたか」と探るような目が向けられた。ローカルメディアとは言え記者は記者だな、と宇佐美はローテーブルを見下ろしながら「いえ」とだけ答える。置かれた名刺には「月刊かながわ経済 記者 工藤義男（くどうよしお）」と書かれている。

ソファに深く腰掛け工藤を見る。濃い隈で縁取られた目がこちらを向き「では早速始めさせていただきます。録音させていただきますか？」と尋ねながらテーブルのスマホに手が伸びた。宇佐美はゆっくりと一度頷く。

「カメラマンは外で待機させてます。お話を伺った後、撮影もお願いします」

「インタビューストは撮らないのですか」

「ええ、今回は」と答える口の端がわずかに上がった。その笑みに、予測していた面倒事が的中しているのを確信する。地域の経済専門誌による経営者向けのインタビューストという建前だったが、この記者にはおそろしく別の思惑がある。

「どういった話をお聞きになりたいのでしょうか」眼鏡のブリッジを指先で押し上げながら上目で睨む。工藤もこちらの気づきを察してか、今度は隠すことなくやりと口元を歪ませた。

「昨年の衆院選で出馬を急遽取り止められた経緯を」

想定内の質問だった。

「経緯を知っているからこそ、いらしたのではないのですか？」と返すと工藤は「仰る通りだ」と声を上げ笑った。顎の無精髭と落ち窪んだ目のせいで老け込んで見えたが笑うと意外に

も若々しい。自分より少し上、30代半ば程かもしれないと宇佐美は考える。

「では事実の確認をさせてください。宇佐美さんは昨年の中選挙区で出馬を予定されてましたね。現厚労大臣、宇佐美慶一郎（うさみ けいいちろう）の一人息子で御祖父は元内閣総理大臣。伯祖父はあの（・・）ウサミグループの創業者、宇佐美慶吾（うさみ けいご）だ。その貴方が御祖父の地盤だった愛知4区から立候補するというんですから、いくら若く政治経験が皆無だからと言ったって、落選するはずもない。地元での期待も大きかった。なのに——」一息に続けてからまたあの探るような目が向けられる。

「公示直前で出馬を辞退したのは、例の投稿のせいですか？」

宇佐美は表情を変えずに工藤を見返す。口元に浮かんだ笑みはジャーナリストとしての矜持からか、それとも下卑た好奇心からか。

「今日はウサミメディアカルの新執行役員として抱負を語る、という趣旨で取材をお受けしたはずですが」

「お願いです、質問に答えてください。皆、真実を知りたがっています。一族が経営するグループ会社とは言え大物候補がなぜ突然、介護サービス会社の執行役員なんかになったのか。このまま貴方が沈黙を続けければ真実は置き去りにされ、いずれ皆の記憶からも消えてしまう」工藤の口調は意外なほど熱を帯び、「自進党を支える保守系団体が横槍を入れてきたせいなんでしょうか？ ですが宇佐美さんが本当に同性愛者なら、むしろ——」

「申し訳ないのですが」と宇佐美が遮る。

「その質問にお答えする気はありません。お送りいただいた趣旨と異なる取材をされたのならば再度ご依頼ください。もっとも、僕がもう一度貴誌の取材に時間を割くことはないと思いませんが」

「宇佐美さん、時代は移りつつあります、潮目の変わりと言ってもいい。最早LGBTを害となすのは頭の古い連中ばかりです。なのにこの国の中枢にはそんな奴らが腐るほどいるのです。ですが貴方なら——」

「お引取りを」と告げると工藤は目を剥きぐつと身を乗り出した。

「どうして逃げるんですっ!? 貴方は闘うべき人だ、否、闘わなくてはならない! そういう立場の人間でしようっ!？」

自らの信念を疑わない独り善がりな目がきらきらと輝いている。その暑苦しさに、宇佐美は思わず苦笑した。

「今回の件は単なる手違いにすぎません。僕は、いずれまた出馬します」

宇佐美の言葉に工藤の顔面から力みが消えた。

「そういえば、この間の衆院選では性的マイノリティを自称していた候補者が落選しましたね。何故でしょう?」

眉根が寄る。

「国民が彼の当選を望まなかったからですよ。それに工藤さん、貴方は勘違いしてらっしゃる。カードを持っているのは僕じゃない、父です」

そう言い退けると工藤は諦観したように目を閉じた。そのまま身体をソファの背凭れに倒し肘当てについた右手で口元を覆う。

「……お父様似の良い政治家になりそうですね」と苦々しく呟く工藤に、
「どうぞ、お引取りを」と言い捨て宇佐美は立ち上がった。

工藤を追い返した後の執務室に一人きりになった。デスクの抽斗からリモコンを取り出し壁に設置されたテレビの電源を入れる。次々とチャンネルを変えていくが、先程、内線で聞いた件はまだ報道されていないようだった。

「ベストコート 藤沢」で利用者が殺された。それは宇佐美にとって、独りよがりな正義を振り翳す記者を相手にするよりもよっぽど面倒な報せだった。

元は川崎の海苔問屋だった「宇佐美屋」を、子会社約35社、従業員数約60万人を抱える大企業・ウサミグループに発展させたのは七代目当主だった宇佐美の伯祖父・慶吾である。問屋業で得た知見と資金で「宇佐美屋」を総合スーパーへと転換し、地方を拠点とする商店の提携・合併を繰り返しながら、日本を代表する小売業者へと成長させた。日本中、モールやコンビニと大小の差はあれど、ウサミの店を見ない街はない。そのウサミグループの中で医療・介護サービス事業を手掛けているのがウサミメディカルである。宇佐美は昨年の暮れ、その執行役に就任した。高齢者向け賃貸住居からデイサービス、老人ホームなどの介護施設、さらには長期入院が可能な病院までを抱えている。現在、神奈川県を中心に賃貸住宅が8棟、介護施設が6施設、3つの病院がある。この他、全国に展開するウサミの店舗に介護予防を目的とするデイサービスを展開中で、これも着々と数を増やしつつある。

「ベストコート」は比較的支援の必要がない高齢者用の賃貸住居シリーズで、高所得者層向けのハイグレードマンションという位置付けである。その「ベストコート」で利用者が殺された。犯人は訪問介護員、電気ケトルのコードを使った絞殺だったという。

夕方の報道番組が始まった。トップニュース、「ベストコート」の件は報じられない。代わりに司会者が鹿爪らしい顔で紹介したのは若手俳優の謝罪会見の様子だった。「逆ギレ会見」、「多目的トイレ」、「ヒーロー俳優」といった文字が仰々しく並んでいる。

「馬鹿どもはゴシップの方がお好みか」という宇佐美の忌々しげな呟きと共にテレビが消された。

3

梅が終わり、桜が咲いた。帆波は背中にくっすらと汗を感じながら自転車を漕いでいる。幅

の狭い河川に架かる橋を渡っていると、海へと続く流れに沿って両岸にずらりと並んだソメイヨシノが陽の光を浴びて眩しいほどだった。毎年、この桜並木を背景に家族写真を撮るのが習慣になっていたが今年は撮っていない。飼っていた犬が先月死んだせいで娘が嫌がったためだ。

犬を送り出した時、まずほっとしたというのが帆波の正直な思いだった。足腰が弱くなり立ってなくなつてから長い介護の末、犬は18回目の誕生日を迎えた翌週に死んだ。人間で言えば104歳、もう十分だったろうと帆波は思う。テリアの血が混ざった茶色い雑種で名前はトトといった。子供の頃に好きだった映画の主人公が抱えていた犬の名前からとった。名付けたのは帆波だ。

十五年前の二月に冴香を出産し、義母をカメラマンに初めて親子三人でこの桜の下で写真を撮った。それから撮影は毎年続けられ、その中心にはいつも娘とトトがいた。帆波に抱えられていた冴香が何年かするとトトの傍らに立つようになり、やがてトトを抱えるようになった。初めての写真でぼんやりと虚空を見つめるだけだった娘の目は年を追う毎にキラキラと輝いていき、犬の目は逆に濁っていった。

志望校に合格し晴れて女子高生となった娘をなんとしても写真に収めておきたかった。しかし「トトがいらないのに撮るのはヤダ」と言つて聞かない。そうこうしてる間に桜は満開の時を迎え、今まさに目の前で散り始めている。

電動アシスト付きの黒い自転車が川の流れと逆方向に狭い歩道を進む。通学時間が過ぎた午前で人通りもあまりなく、ペダルは軽快にくるくると回る。一瞬、ほんのりと甘く葉を磨り潰したような匂いが鼻をかすめた。桜の香りだろうか、どちらかと言えば桜餅の匂いに似ている。もう何年もこの道を通っているのに初めて嗅いだな、と帆波は思う。

職場の近くにこの時期限定で桜餅を出している和菓子屋があった。花見をしないなら、せめて桜餅でも買って帰ってあげよう。

そんなことを考えていると、わっと強い横風に煽られ、目の前の道も道沿いに並ぶ住宅街も、全てが舞い踊る花びらに掻き消された。

自転車を押し私鉄の線路にかかる跨線橋を登っていくと、上昇する目線の先に職場の建物が見えてきた。線路沿いの広い敷地の中央に五階建ての大きな病院の上階が見える。その向かつて右手には三階建ての介護老人施設、ここからは見えないがデイサービスの入った平屋の事務所もある。左手に見える七階建てのマンションが帆波の働く「ベストコート藤沢」だ。

建物の外壁は全て明るいシャンパン色に統一されており、所々に煉瓦を模した装飾が施されている。洒落た造りで、介護施設というよりは避暑地の宿泊施設といった佇まいである。それらが建ち並ぶ敷地は緑の葉が豊かに茂った櫛で囲まれている。大きなショッピングモールを背後に線路沿いの住宅街のど真ん中にありながら、そこだけが時の流れから切り離されたようで

もあった。

跨線橋を渡り終えると道の先に人だけが見えた。病院の真正面、正門の辺りである。片側一車線の道路に機材車と思われるバンが数台、路上駐車しており、その周りを囲うように立つ人々の背が正門を塞いでいた。自転車を漕ぎながら近づいていくと、風防をつけたマイクやTVカメラを担ぐ男、マイクを握る若い男女の姿が見えてきた。帆波はその人垣を横目で確認しながら通り過ぎ、自転車を降り敷地の端にある雑草の茂った路地を進んでいく。「……また、なんか事件でもあったかな」と考えながら、マスコミ対策用に山茶花の生け垣の一部を切って造られた急掬えの通用門をすり抜け敷地内へ入った。

「莉人（りひと）くん」

エントランスホールに学ラン姿の高槻莉人（たかつきりひと）が一人佇んでいた。

こちらを見て「あ、」と莉人が小さく頭を下げる。天井の高いホールにぽつんと立つ小柄でほっそりとしたその姿はいつものように頼りない。

「学校は？ まさかサボりじゃないよね」尋ねると、困ったように笑いながら「今日、創立記念日で休み」と言う。入学式の翌週に創立記念日を設ける中学校が果たしてあるだろうか、と帆波は疑問に思うが口には出さなかった。

「ねえ、表のマスコミ、またなんかあったのかな。知ってる？」

「わかんない。僕も今来たところだから。っていうか受付にも誰もいないし変な感じ、みんなレストランにいる」

一枚板に「やすらぎ庵」と掘られた重々しい木製看板の下、ガラスの嵌め込まれた両開きの扉の向こうにある食堂に目をやる。朝食の時間はずっと終わっているはずだが莉人の言う通り利用者が集まっている。「イベント入ってたっけ」と焦り頭上に設置されたディスプレイに映る「4月☆おたのしみ会 スケジュール」を確認するが、とくに予定はない。扉に近づき中を覗き込むと50席近く並ぶ椅子の全てが「ベストコート」の住人である高齢の男女で埋まっているばかりか、立っている人までいた。皆、そわそわと何かを待っているように見えるから悪い事が起きたわけでもなさそうだが、かつてない状況に帆波は首を傾げる。

「何が始まるのかしら」と口にする、傍らで同じように中を覗き込んでいた莉人も「さあ」と首を捻った。

背後からポーンと明るいデジタル音が響いた。その少し後に「——こんな所にいらしていただき恐悦至極にございます。仕事は私共で片付けますので、どうぞごゆるりとなさっていただければ」と、もそもそとした話し声が聞こえ振り返る。食堂の入口のちょうど対面にあるエレベータの扉が開き、中から嶋の巨体がのっそり現れた。頭を下げ、すっかり縮こまっているその体躯の影にもう一人誰かいる。嶋ほどではないが背の高い若い男。スニーカーにブルーのデニム、白黒のポーターシャツがチラチラと見え隠れする。「誠に恐縮の限りにございます。

少しだけご挨拶いただけると利用者様も喜ぶ次第にございまして——」大仰で妙ちくりんな嶋の丁寧語に、「貴族でも来たのかな」と呟く莉人と顔を見合わせる。

話し続ける嶋に対し背後の男は無言だ。光沢のある石目模様の床とスニーカーのゴム底がきゅっきゅと擦れる音がする。ホールの中央にオブジェのように置かれたグリーンのソファの横を通り過ぎ、2人がこちらにやって来た。嶋が場所を空けるようにと目線を送ってきたので、莉人の身体を押し端に寄る。ようやく男の顔が見えた。不揃いで重い前髪が両目をほとんど隠している。しかしそこから伸びる鼻梁、不貞腐れたように結ばれた口には見覚えが——

「悠木泉?」、莉人と同時に声が出た。

「はい」

悠木泉と思しき男が立ち止まり帆波と莉人を見下ろす。一方的によく知る顔が突如目の前に現れ、見えてないだけで本当は目の前にテレビがあるんじゃないか、と帆波は疑った。あまりにも現実感を欠いている。ただ思うのは、前髪の隙間から覗く二つの目がやはり暗いということ。

「悠木様、こちらへ」家臣のごとく恭しく頭を下げた嶋が扉を開く。悠木は帆波と莉人を見ながら少し首を横に傾げた後、中に消えた。

「ねえ、今の悠木泉だよ、本物!? 僕、エニグマ大好きだったんだよ!! なんでここにいるの!?!」莉人が珍しく興奮した様子で尋ねてきたが、帆波にだって事情がさっぱり分からない。ガラス扉の向こうから、どっと人の賑わう声。住人達が手を叩いて悠木の訪れを喜んでいる。

「……中に入って見てみようか」

「え、でも帆波さん、まだ制服着てない」

「平気じゃない? みんなあいつに夢中だから」

余興やイベントのために設置された、五人も立てばいっぱい狭いステージに上がった嶋が、「今日からお少しの間、悠木様がこのベストコートでお働きのただけのことになった次第でございます」と左隣の悠木を紹介する。それを聞いた利用者たちから一斉に拍手が沸き起こった。「脚、なっげえなあ」「お人形さんみたいねえ」などと囁し立てながら盛んに手を叩いている。窓際に立つ二名の女性スタッフはステージ上に熱い視線を注いでいる。

後方で身を潜めていた帆波は、口をぽかんと開けその様子を眺めていた。「え、今、何て言ったの? ええっ?」莉人が驚きの声を上げるが答えようがない。

「では悠木様」と手にしていたハンドマイクを渡し、嶋が一步下がる。

ステージ上の悠木は、あの日の会見と同じ様に表情を変えぬまま、顎を上げ気味に住人たちを見下ろす。例の深みのある声音で「えー、只今、ご紹介に与りました悠木です」という挨拶。うえーいと沸く老人達、頬を紅潮させ潤んだ瞳の同僚、跪かんばかりの上司。なんなのこのノリは、結婚式会場? ライブハウス? 演芸場? それとも教祖の講演会? とは、帆波。

「えー、俺はこういう場所で働きたくないから芸能人なんかになった訳なんだけど、社長が行ってこいって言うから仕方なく来た。禊だと」

悠木の言葉に老人達はなぜか爆笑した。お腹を抱えながら苦しそうに笑っている者までいる。

「ねえ、この人達、耳聞こえてんの？ 俺、漫談やってるわけじゃないんだけど」

振り返った悠木がマイクを持ったまま嶋に尋ねる。するとまた会場からゲラゲラと笑い声が起こった。なぜそこで笑えるのだ？ と、帆波の眉間の皺はますます深くなる。

「……楽しそうでいいねえ。まあそんな訳だからしばらくの間、よろしく」と挨拶を終えささとステージを下りた悠木を帆波以外の全員が拍手喝采で迎えた。

即ち、悠木泉は先の「多目的トイレ破廉恥行為発覚事件」および「逆ギレ記者会見騒動」への反省を示すという体で、この「ベストコート」で介護の仕事をするという。なぜ介護の仕事をするのが反省に繋がるのかという点はさっぱり不明だが、マスコミの報道によると「悠木泉は一連の騒ぎの責任をとり芸能活動を一時自粛、社会勉強のため謹慎期間中は介護施設で働く。大変感心なことである」らしい。

例の会見後、SNS上では悠木に対する批判の声が高波のように押し寄せたが、反面、「よく言った」「正論だ」と擁護する声も多かった。言いたいことも言えず弱い毒を飲み込み続けるような世の中にありながら、齒に衣着せぬ悠木に同調する者が多くいたためだ。批判の高波がまさに潮を引くように見えなくなったのに対し称賛の声は根強く残った。方向性こそ変わったが、悠木泉の商品価値ははまだ保たれている。

食堂での挨拶の後、嶋に「何かございましたら、彼女にお尋ねください」と悠木へ紹介された時には、厄介事の予感と多少の好奇心が胸の内で交差し、「よろしくお願いします」と曖昧に笑いながら頭を下げた帆波だった。そんな帆波に悠木は「どうも」とだけ返し、その日は早々に消えた。

よく考えてみれば「働く」なんていうのはあくまで建前で、本当に働くつもりが悠木にあるはずもない。「悠木泉が来たこのサ高住、お母さんの職場!? 明日から一緒に働くの!？」とスマホ片手に興奮した様子で尋ねてくる娘に「もう来ないんじゃないかしら」と答えた帆波だったが、その予想は大きく外れた。翌日から、悠木は毎日来た。

平日の昼前にやって来て夕方頃に帰っていく。そんな日がもう10日間近く続いている。来て何をしているのかと言えば、施設内をブラついたり、住人と碁を打ったり、昼食を食べたりと気ままに過ごしている。そんな悠木を不気味に思いながら遠巻きに眺めていた帆波だったが、ある時、「あ」と大きな声が出た。

レクリエーションルームで悠木が桜色の和菓子を手にしていた。帆波の声に気付き、片頬を膨らませた悠木がもぐもぐ口を動かしながら「あに？」とこちらを見る。

「子供の頃に食べたのが懐かしくなってなあ、買ってきたんだよ。帆波ちゃんも食べたかったか？ これ最後の一つよ、ごめんなあ。今年はどうこれで終わりだってよお」とは、元・海の男を自称する瀬川のお爺ちゃん。

悠木の右手にあったのは食べかけの桜餅だった。娘に買って帰るつもりだったのに、すっかり忘れていた。

4

「そこにいるだけで空気がぱつと明るくなるのだから、芸能人って本当に凄いものね」

2人掛けのソファに深々と腰掛けた智美（さとみ）が悠木に笑いかける。白地にピンクのストライプが入った長袖のパジャマを着て、肩には薄い黄色地に濃紺でアラベスク模様の描かれた大きなストールを巻いている。その智美とローテーブルを挟んで向かいのストールに腰掛けられている悠木が、紅茶のカップに口をつけたままわずかに肩を竦めて見せた。飲んでるのは帆波が淹れた紅茶である。

「人を楽しませるといふのは大変なことよ。それを、ただそこにいるだけで実現してしまうのだから素晴らしいわ。きっと貴方になら何をされても構わないという女の子が沢山いるのでしょう？」悪戯をした後の子供のように笑う智美に、悠木は「どうかな」と苦笑する。

ここは、奥川智美（おくがわさとみ）の個室である。帆波がスタッフルームで休憩していると内線が鳴り「ちょっと頼みがあるの、来ていただけませんか」と不安げな声で呼び出された。そこにふらりとやって来た悠木が「暇だから俺も行くのかな」と言って付いて来た。最初は追っ払おうかとも思ったが、それも面倒に思えて止めた。短い付き合いの中で分かってきたのだが、この男、人の言う事をまるで聞かない。

「こう見えてもね、私、会社の経営者だったのよ。ブライダル会社の社長さん」

「結婚式屋？」

悠木の雑な問いかけに「そうそう、結婚式屋さん」智美がころころと笑い声を上げる。

「式場がいくつかあって、その運営をね。結婚式って多くの人が一生に一度のことと思って挙げるでしょう？ だから皆、一つの汚点も残したくないって頑張っちゃうのよ。その分、クレームも多くて大変だったわ。ある時なんかね、新郎がずいぶんと年上のカップルがいて、その方がうちでプランナーをしていた若い男の子に、俺の妻に色目を使うなーっ！って怒ってらして。もちろん誤解だったのだけれど、困ってしまったわ」そう言って懐かしそうに笑う智美に「ああ、それ俺もある」と悠木。

「友達の結婚式だったんだけど、そいつが突然掴みかかってきたんだよね。白いタキシード着て顔真っ赤にして。お前、俺の嫁と寝たのかって。参ったよ」

それまで黙って話を聞いていた帆波だったが「寝たのっ!？」と思わず声が出た。そんな帆波

をちらと見て、悠木は思わせぶりに口元を歪めるだけで答えない。

「まあ、若いうちは色々あるわよ。そりゃあ私だって、昔はね」智美が悠木に笑いかける。「だけどね、どんなに大変なことがあっても、人生で最も幸せな瞬間を共有させてもらっていたのだから楽しい仕事だったわ。その年上の新郎さんなんか、式が終わる頃にはぐちゃぐちゃに泣いてらして。涙と鼻水でべとべとになったお顔で例の男の子に、ありがとう、ありがとうって握手してね。見ているだけで胸がいっぱいになってしまった」と目を細める。

「だから現役の頃は、一組でも多くの新婚さんに喜んでもらうことが夢だったの。……ねえ、今の私の夢はなんだと思う？」

智美の問いかけに、目線を上げ少し考えてから「自分の結婚式を挙げること」と悠木。

「馬鹿言わないでよ、相手もいないのに」智美がまた楽しそうに声を上げた。

「日本一周旅行よ。私、海外は多く見てきたのだけれど、この年になってから日本のことは全然知らないって気がついたの。だから、この目で日本を見て周りたくてね。本当は妙ちゃんに行くつもりだったのだけど——」智美はそこで言葉を切った。

使い捨てのゴム手袋を両手につけた帆波は、洗面所で白いコットン素材の布を擦り洗いしながら二人の話に耳を傾けている。洗っているのは智美の下着だ。

部屋に到着してから悠木を外で待たせ、呼ばれた理由を尋ねると、真っ青な顔をした智美に「粗相してしまったの」と耳打ちされた。本来、洗濯を依頼するためには別料金を支払ってもらう必要がある。肌着やTシャツなど量の少ないものは有料の洗濯サービスとして帆波たちスタッフが請負い、その他は外部のクリーニング業者へ渡す決まりになっている。しかし不安げに揺れる瞳を見るうちに「お金がかかりますよ」の一言は飲み込んでしまった。

という経緯があり半ばボランティア的に下着の洗濯を引き受けたのだが、「悠木も来ている」と伝えると智美はとたんに元気になり、そそくさと身だしなみを整え笑顔で悠木を迎え入れた。一方の帆波には「お紅茶、淹れて差し上げて」などと言うのだから、どうにも釈然としない。

手洗いを終えたショーツとパジャマのズボン洗濯機に放り込みリビングに戻る。こちらを見上げる智美に、悠木には気づかれぬよう親指と人差し指で丸をつくって見せると、ほっとしたように小さく溜息をついた。

「ほら、美女もいらした。よかつたらお紅茶を一緒にどうぞ」劳いのつもりなのか、お世辞としか思えない言葉に微妙な気持ちになりながら「いえ、私はそろそろ」、断りを入れるが「そう言わないで、戴き物の美味しいお菓子があるの」とソファから立ち上る。身体がふらりとよろめきテーブルに手をついた。慌てて駆け寄った帆波がその身を支える。

悠木をちらりと見た智美が「……情けないわねえ」、寂しそうに笑った。

「あの人、病気なの？」

「病気ってわけじゃないけど。最近急に足腰が弱ってね」

智美の部屋を出て、悠木と一緒にスタッフルームに戻った。手土産に渡されたのは、小ぶりだがふっくらとした生地にした生地にたっぷりの粒餡が挟まったどら焼きだった。会議室と兼用になっているスタッフルームには窓がなく、豪華な共有スペースと比べるとだいぶ殺風景だ。部屋の真ん中にどんと二つ濃茶の長机があり、周りに六脚のパイプ椅子が置かれている。その一番奥の席に悠木が座り、対角線上の手前の席に帆波が腰掛けている。

悠木がやって来てから時折こうして2人きりになることがあった。最初のうちこそどぎまぎしていた帆波だったが、すぐに慣れた。芸能人とは言え、元々興味のなかったこの男と話したことなんてほとんど無い、と気づいたせいだ。

どら焼きを頬張りぼそつと「旨い」、呟いてから悠木が「日本一周旅行、行けるの?」と尋ねてきた。

「……難しいんじゃないかしらね。自力歩行も大変なようだから。このままだと介護認定も上がりそうだし」

「認定? なにそれ資格? 上がるとどうなの?」

「介護サービスを受けるための基準よ。必要な介護レベルに合わせて1から5まで設定されるの。歩行が難しいってレベルだと要介護1、生活全般に助けが必要な場合は要介護5とかね。本当はもっと細かく決まってるんだけど。うちの場合、介護認定が3以上になると別の施設に移ってもらうことになる」

「え、追い出すの? なんで?」

質問の多い男だな、と帆波は顔を顰める。

「仕方ないでしょ、そういう決まりなんだから。うちみたいなサ高住っているのは、自分で生活できる介護度の低い人達向けなのよ。私達ができることも限られてるしね。だから介護度が上がれば病院とか老人ホームとか、目的に合わせて別の施設に移ってもらうの」

元々、要介護1だった奥川智美の元には、ベストコートと同じ敷地内にあるウサミ系列の訪問介護事業所「ベストケア」から週に何度か訪問介護員が派遣されていた。若月妙子を殺したのと同じヘルパーだった。友人だった妙子が自分も担当していたヘルパーによって殺されたという事件への衝撃は凄まじかったようで、塞ぎ込むことの多くなった智美の心身は一気に衰えた。事件後、ヘルパーの派遣をストップしたもののベストコートのサービスだけでは生活が難しくなり、今は別の事務所依頼している。このまま行けば智美がここを去る日も遠くない。そしてそれを食い止めるために自分にできることはない、帆波にはそのことが良く分かっている。

ふうん、とつまらなそうに返事してから、「ねえ、それ食べないの?」と悠木がまた尋ねてきた。指差しているのは手に持ったままの帆波のどら焼きだ。

「いらぬなら、くれよ」

「やだ」

騒ぎが起きたのはその翌日のことだった。大雨の降る午後のことだ。

昼食の時間が終わり、帆波は自室でランチを済ませた利用者の部屋をまわっていた。廊下で汚れた食器類を載せた配膳用のワゴンを押していると後ろから「主任」と声をかけられた。この春に働き始めたばかりの小林真理（こばやし まり）だ。「ちょっと困った事が起きて」と言われ、ワゴンを任せ「やすらぎ庵」に向かう。食堂の真ん中に利用者が集まっていた。その中心には奥川智美がいて、背を丸め力なく椅子に座り込み、真っ青な顔で俯いていた。見開かれた目は潤み、わずかに開いた唇は細かに震えている。

智美の肩に手を置き「どうなさいました？」と帆波が声を掛けると、傍らの椅子に腰掛けていた瀬川のお爺ちゃんが「悠木ちゃんがお、智美ちゃんに酷いこと言ったんだよお」。自称元・海の男は、笑っているようにも見えなくしゃっとした泣き顔でそう言った。

スタッフルームで一人、スマホを弄っていた悠木を見つけた。部屋に足を踏み入れるなり「どういっつもり」と尋ねる。

「なにが」

「あなた、智美さんに言ったんでしょ？ 日本一周なんてもう無理だって！」

思いの外、大声が出てしまい自分でも驚いたが抑えられそうになかった。視線をスマホに戻しただけで何も答えない悠木に、大腿で近づいていく。

「どうしてそんなこと言ったのよっ!？」という帆波の言葉に、ぼそりと「訊かれたから」

両の掌をぐっと握り込む。心臓がばくばくと鳴り吐き気がしそうだった。

「訊かれたら何でも言うの？ それがどんな残酷な答えでも？」

再び、悠木が帆波を見上げる。前髪の下に隠れた暗い両目がこちらに向けられる。

「……ここは、あんたが前にいたみたいに顔が良いってだけで何でも許される場所じゃない」
ただじっと、感情の読み取れない二つの瞳が見上げている。

「もう来ないで」

声も、両拳も、怒りで震えていた。本当は殴ってやろうと思った。けれど自分の手が痛くなるだけと思い、止めた。

5

役員会議という名の責任と義務の押し付け合いを終え、宇佐美は楨枝（まきえだ）の運転する黒いクーペの後部座席に乗り込んだ。病院の車寄せをおおう庇から水のカーテンが流れ落ちている。昨日から大雨が続いていた。車内は湿気を帯び革の匂いに満たされている。

「今日はこのままご実家へ？」と尋ねる楨枝に「うん、父に呼び出された」と返す。「そりゃ

また」という同情的な笑いの後、「あまり根詰めんでくださいよ。身体を壊すといけない」。「別に頑張ってるわけでは。ただ——」考えたくないから言われるまま動いている、という言葉。葉を宇佐美は飲み込む。

車が動き出し、雨が鋼板を打つバチバチという音。窓の外に目を遣ると人影が見えた。病院の隣に建つマンションの正面玄関。青いデニムに黒のスニーカー、白いTシャツの上に灰色のカーディガンを羽織っている。ぽつんと佇み、空を見上げていた。傘を持っていない。いつ雨が止むのだろうかと考えているのかもしれない。

「ベストコートの前に付けてください。あの男を拾っていく」指示すると、槇枝は黙ったままハンドルを切った。

「乗りなさい、ホテルまで送って行こう」という宇佐美の言葉に悠木は黙って従った。槇枝の真後ろに座り頼杖を突いて外を眺めている。車が動き出しても無言のままの悠木を「妙な男だ」と宇佐美は思う。

「意外に律儀なんだな。毎日のように顔を出していると聞いた」、返事はない。

じっと動かないままの横顔に「もう来なくていい」と告げると、ようやくこちらを向いた。

「君の振る舞いについてクレームが出ている。一部の利用者と職員から」表情は変わらず、ただじっと宇佐美を見つめ返す。

「明日からこちらに来る必要はない。謹慎期間が終わるまで好きにしている。ホテルも自由に使っている」

「どうして」雨音をすり抜け、よく通る声。

「……少し前に、うちでちょっとした事件があつてね。我々としてはその事件を世間に忘れてもらう必要があつた。だから君を呼んだんだ。そして君はもう充分に役割を果たしてくれた。ベストコートには悠木泉の名前が上書きされ、皆、事件のことは忘れた」

悠木の視線が鋭くなったように思えた。

「いずれ復帰する君の元にうちから仕事の話が行くだろう。ウサミを後ろ盾に華麗に復帰を果たすといい。良かったな」言葉尻に重ね、「俺、あんたのこと知ってるよ」と悠木が口を開く。

「ゲイなんだろ。男とのデート写真がTwitterで拡散されてた」

顎を引き、眼鏡越しに視線を返す。暗い二つの目がこちらを向いている。

「俺のことは知ってた？」

質問に「世間一般程度には」と宇佐美。

「なら、俺とのセックスを想像したことは？」

悠木の口元に、挑発的な笑みが浮かぶ。

「……ない。が、殺したいと思ったことなら」

「さっ」

「今」

悠木が、ははっと小さく笑い声を上げた。

「いいね、気が合いそうだ」

雨に閉じ込められた車がゆっくりと街を進む。濁る視界に、どこを走っているのか判然としないまま。

6

大手企業の経営者や芸術家など著名人も多く住む「ベストコート」の中で、トップクラスに高名なのが円成寺 勝徳（えんじょうじ かつのり）である。官能小説家としてデビュー後、一般小説へ転向してから国内の文学賞を総嘗めにしてきた作家だ。海外での評価も高く何度かノーベル文学賞の候補として名前が挙がったが、こちらは今のところ受賞に至っていない。純文学から娯楽作と作品の幅が広く、一作ごとに作風をがらっと変えるその手腕に「文体の軽業師」という二つ名がついている。

「円成寺先生にはご迷惑をおかけしました。もう、あの男がここに来ることはありません。今後は静かになりますかと」頭を下げる宇佐美の前に円成寺がいる。腹を突き出し身体をソファに預け胡麻塩の口髭を指先で整えている。

「ああいう軽薄な手合いは視界に入っただけでどうも落ち着かん」と言い、紺色の着流しの袂に手を入れ腕を組む。そのわざとらしいまでに作家然とした様子に宇佐美は内心、苦笑する。

「御父上とは会っているのかね」

「はい、先日も呼び出されたばかりで。先生はお元気か、と気にしておりました」

「元気、か……。まあ、御父上ほどではないがね。生きてはいるよ」

「あれは頑丈な人ですから。憎まれっ子世に憚るといふやつでしょう」

「実の息子にそう言われちゃあ、あの人も立つ瀬がないな」

円成寺の口髭の端がわずかに上がった。

「……ところで。壮吾君は例の件について、聞いているのかな」

円成寺が袂から抜いた右手を持ち上げ自らのこめかみを人差し指で二度、突いた。思わせぶりなその仕草に、何のことかと宇佐美は不思議に思う。意図を尋ねようと口を開きかけたとき、執務室の扉が大きな音を立て、勢い良く開いた。

「おい莉人、こっちの部屋見たか？」

声の主を確認し、宇佐美はぎょっとした。悠木 泉だった。おまけに手には鮮やかなピンクの虫取り網を持っている。

虫取り網？

「まったく、どこ行きやがったんだ。手間かけさせやがって」

網を肩に担ぎ、室内をきよきよと見回している。

虫取りをしてる？ 室内で？

いやそもそも、もう来るなど言ったはずなのになぜいる？

空転する思考を抱えたまま、「何をしているんだ」と宇佐美が声を絞り出す。

「お、ウサちゃんじゃん。ここ、ウサちゃんの部屋？ 贅沢だね。コマちゃん見なかった？」

ウサちゃん？ それはまさか自分のことではあるまいな。それにコマちゃんとは??

訳が分からず宇佐美の混乱はますます深まる。

「壮吾君、彼はもう来ないのではなかったのかね」苛立ちを滲ませた円成寺が呟く。呆気にとられたまま「そのはずだったのですが」小さな声で答えると今度は、

「泉くん、コマちゃんいた？」という幼さの残る声とともに学ラン姿の少年が入って来た。手にはプラスチック製の透明な虫籠を抱えている。宇佐美と円成寺の姿を見つけ、小さく頭を下げる。

なぜ、学生が？

「いないな。だけどこの辺りが怪しい」マホガニー製のデスクの前にいた悠木が急に膝をついた。顔を床に近づけデスクの下を覗き込み「あ、埃だらけ。ウサちゃんさあ、見えるとこぼっかじゃなくて、こういうところちゃんと掃除しなよ」

「……君たちは一体、何を探しているんだ？」という宇佐美の問いに、

「ハムスター」悠木と少年が声を合わせた。

ハムスター。

キヌゲネズミ亜科の齧歯類。ゴールデンハムスターやジャンガリアンハムスター他全24種おり、その総称。寿命は2・3年。

「なぜハムスターが、ここに」

「茂美婆ちゃんがこっそり飼ってたのが逃げたんだって。皆で探してんだよ」

「ペットの飼育は規約違反——いや、そんなことはどうでもいい。それより君だ。なぜここにいる、もう来るなど言っただろ」

「だって暇だし」

立ち上がった悠木がぐるりと見回し、「そこも怪しい」と今度は円成寺の座る客用ソファを指差した。

「おい、もう出て行け。ハムスターなんて放っておけばいいだろう」

「ハムスター馬鹿にすんじゃねえ。一寸のネズミにも五分の魂だろうがよ」

再び這いつくばった悠木を、唾然たる面持ちの宇佐美と赤い顔の円成寺が見ている。

悠木のデビュー作「覆面ウォッチャーエニグマ」は、50年以上続く「覆面ウォッチャー」シ

リーズに連なるTV番組だ。ウォッチャーシリーズは一年毎に新作が登場し、毎年三月になると番組が終わり四月からは新しい主演俳優で新番組が始まる。ウォッチと呼ばれる腕時計型のガジェットや登場するヒーローのフィギュアの売上がシリーズを支えており、毎年、四月になった途端に新作ウォッチが玩具売場にずらりと並び、先週までそこにあった旧作のウォッチは50%OFFなどのシールが貼られ投げ売りされる光景が風物詩となっていた。

今年で32歳になる宇佐美の子供のころにも放送されていたはずだが観た記憶はない。しかしその存在は幼少時代から認識しており、それは制服を着た初等科の級友が、こっそりと鞆に隠し持っていた覆面ウォッチを見せてきたことによる。

その友人は「すごいよ、変身するんだ」と左手首に巻かれたウォッチを見せびらかしてきた。側面についているリ्यूーズのような黄色いボタンを押すと音声で光を放つ。その左手を高く突き上げ「チェンジッ！」と叫ぶ。特に何も起こらない。「すごいだろ」と自慢気な笑顔がこちらに向いた。

初めて目にしたそれは合成樹脂製で安っぽく思えたが、そう言われるとなんだか凄い物のような気がしてきた。だから「僕にも貸して」と頼んだのだが「学校が終わったらな」と勿体ぶられてお預けとなった。

しかし放課後、宇佐美がそのウォッチに触れることはなかった。教師に見つかり取り上げられたせいだ。クラスメイトの誰かが告げ口をしたらしい。友人は肩を落とし半べそで迎えの車に乗り帰っていった。それ以来、宇佐美が「覆面ウォッチャー」について考えることはなかった。先週までは。

金曜日、夕方。仕事を早く切り上げ帰宅するためにエントランスホールで楨枝の車を待っていると、悠木とハムスター取りをしていた詰襟の少年がいた。後から職員に尋ねたところ高槻莉人という名で住人の縁者らしい。何の気なしに見ると目が合い、ペコリと頭を下げてきた。腹の前に分厚い辞書のようなものを4つ重ねて抱えているのを不思議に思い眺めていると、突然、「観ますか？」と声を掛けられた。軽い足取りで駆け寄ってくる。

「エニグマのDVD BOX、僕のです。この間お爺ちゃんたちと一緒に観たんです」そう言いながら箱の重なりを宇佐美に渡そうとする。その気はなかったが、莉人がぐいぐいと押し付けてくるので仕方なく片手で受け取る。予想していたのよりずっと軽く、右手がふっと持ち上がった。

「泉くんが出てたやつです」言われて確認すると、なるほど、パッケージには悠木 泉の顔が印刷されていた。コスチュームを身につけ顔を隠した覆面ウォッチャーの後ろ、髪の毛の短い悠木がこちらを睨んでいる。今よりは顔つきに明るさが見られるのは、若かったせいだろうか。

「絶対面白いから観てくださいね」と言い捨てにして立ち去ろうとするので、宇佐美は突き返そうと声をかけたのだが、少年は振り返らずに行ってしまった。職員に預けて帰ろうかとも考えたが見回しても誰もいない。仕方なく、宇佐美はそのDVD BOXを持ったまま車に乗り

込んだ。

横浜のマンションへの帰途、車載プレイヤーでエニグマを観始めたのは、もう面影を思い出すこともできない幼き日の友人の「すごいだろ」という声が耳に蘇ったせいだ。試しに一話だけ、と観始め、渋滞に巻き込まれ結局四話を車内で観た。その後、週末に空いた時間を潰し8ディスク、計49話。時間になると千百五十七分、実に20時間近くを費やし全DVDを観終えた宇佐美の頭に浮かんだのは「後悔先に立たず」という言葉であった。

面白かった。ハマってしまった。

演じているのがあの（・・）悠木泉だということも忘れて夢中で見入ってしまった。

その翌週。別棟で行われる会議に出席するため、執務室のある七階からエレベータに乗り込む。ゆっくりと扉が閉まると宇佐美は手に持っていたスマホの画面に目を落とした。ショッピングサイトである。「覆面ウォッチャーエニグマ」のフィギュアが映っている。

レビューを辿るとエニグマの特徴でもある「肘から伸びた臍脂色のブレードが折れる」という書き込みが多く「そんなものを売るな」と宇佐美は内心腹立たしい。目が、「残り1点」の文字で止まる。買い逃すともう買えないかもしれない。欲しい。だが、しかし――

悩んでいると、ポーンと明るいデジタル音が響き六階でエレベータの扉が開いた。扉の向こう、「あ」とこちらを見上げた顔は莉人のものだった。今日も学ランを着ている。宇佐美を認めるや否や「観ましたか？」と近づいてくる。子供に嘘を吐くのもどうかと思ひ、仕方なく「……観た」と答えると無邪気に「面白かったでしょ」と笑う。その顔はあまりに幼く、宇佐美は遠い記憶の彼方に消えたはずの誰かと話しているような気持ちになった。

「あ、エニグマ・アルティメットフィギュア!! 買うんですかっ!?!」遠慮なくスマホを覗き込んできた莉人が驚きの声を上げた。気づかれてしまった宇佐美は渋い表情で「いや、少し気になっただけで」と誤魔化すが通用しない。

「いいなあ、僕も欲しかったんですよ。でもこれプレミアついちゃって僕には高くって買えなくて。うわあ、しかも残り1点、絶対買った方がいいですよ。いいなあ、買ったから見せてくださいね」

「……しかしな。中身がアレ（・・）だと思つと、どうにも」小さく溜息をつくつと、再びデジタル音が響き、今度は五階で扉が開く。

「お、珍しい二人組。仲良いの？」莉人と宇佐美を見ながら、ずかずかとアレ（・・）が入ってきた。タイミングの悪さに宇佐美は顔を歪める。

「泉くん、宇佐美さんエニグマのフィギュア買うんだって」

「買うとは言っていない」

「なにウサちゃん、俺のファンだったの？」ニヤつきながら近づいてきて、「言ってくれば優しくしたのに」馴れ馴れしく肩に手を乗せてきたので「誰がファンだ」と、その手を強く払

い除ける。

「照れんなって。サインしてやろうか、サイン」言いながら図々しくスマホを覗き込み「あ、これね。俺、持ってるよ」

「ええ!? いいなあ、僕も欲しい」

「やってもいいけど、肘のブレードが片っぽ折れちゃってんだよね。折れやすいのよ、あそこ」

「何故そんなものを商品化するんだっ」

「知らねえよ、俺がデザインしたわけじゃないし。あ、残り1個じゃん。ウサちゃん買わないの?」

「買わない」

「まーた強がっちゃってえ。いいの? 届いたらサインしてやるよ、サイン。エニグマのサイン、本物よ?」

「誰が、君の、サインなんて——」

などと話していると、三度デジタル音が響き、今度は三階で扉が開いた。着流し姿の円成寺がこちらを見てびたつと足を止める。

「ああ円成寺先生、どうぞお乗りください」宇佐美が慌てて「開」ボタンを押す。

「あ、あんだ小説家なんだってね、瀬川の爺ちゃんに聞いたよ」悠木に声をかけられ、円成寺も宇佐美と同じように顔を歪める。

「その着物、ちょっとわざとらしくすぎんじゃない? 小説家による小説家のコスプレって感じだけど、大丈夫?」という悠木の言葉に宇佐美と莉人が揃って噴き出す。

顔を真っ赤にした円成寺がぷいと横を向いた時「俺、あんだの小説読んだことある」と悠木。驚き、再びこちらを見た円成寺がゆっくりとエレベータに乗り込んできた。

こほん一つ咳払いをしてから、「どの作品を読んだのかな」。宇佐美がボタンから手を離すと扉がゆっくりと閉まる。男達を乗せた箱が下階へと進む。

「映画化するから読んどけって言われたんだけど、結局、企画はポシヤったんだよね。たしか、なんだかの庭ってやつだったような……」

「棕櫚（しゅろ）の庭園」

「ああ、それぞれ」

「棕櫚の庭園」は円成寺の代表作とも言える長編で、何年か前に純文学系の文学賞も受賞している。付き合い上、宇佐美も読んだことがあったが、若い男が主人公だったということ以外、今は内容を思い出すことができない。

「して、どうだったかな。その、感想は」なぜだか不安げに尋ねる円成寺に、悠木は顎に手を当て、うーんと考え込む仕草を見せる。

「あれね、よく覚えてる」

ごくり、と円城寺が唾を飲み込む音。うん、と一つ頷いてから悠木が、「話の内容はよく分かんなかったけど、一生懸命書いてるなって思ったよ」

その言葉にぽかんと口を開け「一生懸命……」と鸚鵡返しに円成寺。「あんな長い、よくがんばって書いたね」感心したように、再び頷く悠木。

「先生、こんな男にまともな感想を求めてはいけません」

「こんな男とはなんだよ。褒めてんだから、嬉しいよなあ？」

「一生懸命……」と繰り返すのは、茫然自失の小説家。

「あ——っ!？」

突然、耳元で莉人の大声が上がった。

「見てっ!」指差す先を宇佐美と悠木が覗き込む。スマホに映っていた「エニグマ・アルティメットフィギュア」の残数が「在庫なし」に変わっていた。

「え」と声を上げる宇佐美に「だから早くポチればよかったのに」と悠木。

「肘んとこの折れたので良かったらやろうか。サイン書いて」

「誰が、君の、サインなど」

「えー、いいなあ。僕欲しい」

「一生懸命……」

エレベーターが止まり、ポーンと四度目のデジタル音が響いた。扉が開いた先、一階のエントランスホールに佇んでいたのは濃紺に縦縞模様のブレザーを着た帆波だった。背筋をしゃんと伸ばし、首に黄色のスカーフを巻いた制服姿はフライト・アテンダントのようだ。その帆波が悠木を見つめるなりムツとした表情で顔を背け、玄関の方に足を踏み出した。と、思うや否や、視線の先になにかを見つけたようで目を見開き蒼白になり「あわわわ」と漫画のような小さな声を上げる。二三步後退りした後くると振り返り、大慌てでスタッフルームに消えた。

その様子を見ていた四人が顔を顰め、一斉に首を傾げる。

「なんだ今の」

エレベーターから出た悠木の見先、ベストコートの玄関に小さな人影があった。

イエロードッグス

1

あれは、あの人の——。

夜勤明けの早朝、顔を出したばかりの太陽に照らされたアスファルトが黄金色に染まり、埋め込まれたガラス屑がキラキラと輝いている。まだ暖まりきらない空気を鼻の頭で裂きながら

自転車を進め、昼間に見た人物を脳裏に思い描く。白髪の老婦人。背が低くふっくらとした身体を黄色いサマーニットに包んでいた。もう記憶の彼方に沈めてしまったはずなのに、遠目から一目見ただけでそれが彼女（・・・）だと分かった。分かってしまった。

鍵を回して扉を引き、家に入ると冴香がいた。木目の見える化粧合板の壁を背にハーフパンツにTシャツ姿、手には愛用のマグカップを持っている。

「起きてたんだ」

「うん」

「お父さんは」

「寝てる」

短く答え、冴香は階段に向かう。高校に入ってから極端に口数が減った娘を「どうして」と一時は心配でならなかったが、今ではその理由になんとなく察しがついている。階段を昇る娘の手の中、マグカップに描かれた茶色い犬の絵を見送り帆波は上がり框を跨いだ。

廊下の左手にはリビングに続く硝子の嵌め込まれた扉がある。その向かい、階段の下に造られた納戸の方の扉を開く。小さな窓のついた二畳ほどの空間、右の壁に設置されたスチール製の棚に目を遣る。足元に放り出された掃除機や犬のトイレシートを越えながら奥へと進み、棚の最下段に乱雑に積まれている書類束を見る。バケツと脚立の間にスペースを作ってしゃがみ込み、一番下にあるポリプロピレン製のファイルを山を崩さないよう引っ張り出した。A4サイズのフォトアルバムだ。真っ白だったはずの表紙は変色し端の方が黄ばんでいる。はあっと小さく溜息をつき、一度目を閉じてからアルバムを開く。

一ページ目。並ぶ六枚の写真、映っているのは十六年前の帆波だ。大学時代の友人との旅の思い出、海辺のキャンプ場の一夜、炭火で焼かれ丸焦げになったソーセージ、日に焼けて顔の赤い帆波と佳代子が笑っている。その次のページには成人式の朝、晴れ着姿で照れ笑いを浮かべる一枚もあった。ページをめくっていく。透明フィルムで保護された若き日の思い出は、ちようどアルバムの半分あたりで急に終わった。最後の一枚はゼミ合宿での集合写真だ。山荘の前に男女八人のゼミ生が並び、真中にあの人が、その隣に小柄な女性がいる。まだ頭髪は黒々としているし背中に肉もついていないが、細い目をさらに細めた柔和な眼差しに今朝見たのと同じ人物だと確信する。帆波は向かって左、集団の端で不機嫌そうにカメラを睨んでいた。

若き日の熱情が胸に蘇り、今の自分を責める。

「それ違う、シールついてない」

調理スタッフがデシャツに並べたトレイをステンレス製の配膳用ワゴンに移していると、上から声がした。振り返り見上げると、すぐ後ろに悠木が立っている。人差し指で帆波の目の

前に貼られた小さなメモ紙を差され、読むと「通・5、糖・3」と書かれている。通は普通食、糖は糖尿病で制限のある住人用の食事を指す。食堂か自室か、ベストコートでは食事の場所を好きに選ぶことができるため毎回この数字が変わる。事前申請した住人に個室へ配膳するためのメモ書きだ。制限食の方には、食事を覆う半透明のプラスチック蓋の端に黄色の丸いシールが貼られている。いま、ワゴンには「通・5、糖・2」、帆波の手には「通」。

「どうも」とぶつきらぼうに礼を言いワゴンの持ち手を握ろうとすると、「俺が押してく」と言う悠木に取られた。

厨房から荷物用のエレベーターがある職員用通路に出ると、くすくすと男女の忍び笑いが聞こえてきた。住人の益子（ますこ）と保谷（ほうや）だった。帆波と悠木の姿を見つけると会話ばかりと止み、笑顔を消した後、益子夫人の方が「やだわあ、スタッフってこんな場所にまで来るのね。なんだか監視されてみたい」と、非難がましく言った。二人揃って責めるような視線を送ってきた後、連れ立ってエントランスホールへと消える。

「なんだあれ、感じ悪。ここスタッフ用の通路じゃん。あいつらこそ何でこんなところにいんのよ」と、ワゴンを押す悠木が振り向いて口を尖らせる。

「人目忍んで不倫デート」

「は？」

「益子さんには旦那さんがいるし、保谷さんにも奥さんが」

「マジっ!?」驚き顔を歪める悠木が再び振り返り二人の消えた扉を見る。

「じゃあヤッてるってこと!? すごいな……あの人らいくつ? 人間って何歳までやれんだ?」2人とも80歳を越えていたはずだが質問には答えずにおく。

「肉体関係はないわよ。どこも人の目があるから、できる場所なんてないでしょ」

「いや、わかんないぞ。こんだけ広いんだから、探せばどっかに良い場所が——」

「トイレとか?」ちらと顔を見てやると、さすがの悠木も一瞬、言葉を詰まらせた。

「まあ、こっそり楽しむ分には良いでしょ。とくにルールを犯してるとってわけでもないし。お元氣な証拠よ。残りの人生楽しんでまん勝ちなんだから」長めの廊下をワゴンが進み、二人がその後続く。

「だけどさ、ただヤッっちゃったって話よりよっぽど酷くない? お互いの相手を裏切り続けるわけだろ」悠木の言葉に、後頭部を殴られたような衝撃が走った。

「……何の話よ」

「セックスした瞬間から浮気だ、なんて言う奴も多いけど。じゃあ心の中で別の奴を好きでいるのは良いのかって話だよ。ヤってすぐ関係終わらせるより、やらないけど別の奴をずっと好きでいる方が残酷だよ。なのに純愛だとかプラトニックだとかエア不倫だとかいう言葉で濁してんの、なんか変だなんて——」

「気持ちは止められない」と遮る。心臓が波打ち、胸が疼く。

悠木は少し間をおいてから「……まあね」と同意した。

エレベーターの前にたどり着き、上階へのボタンに帆波が手を伸ばす。その指先は小さく震えていた。

「帆波さん、なんか元気ないんだよね」と窓際の客用ソファに腰掛けた莉人が呟く。テーブルの上には、組み立て途中の覆面ウォッチャー エニグマのプラモデルの箱とパーツ、それにペンを転がっている。

「泉くん、また帆波さん怒らせたんでしょ」顔を上げ、向かいのソファに座る男を見る。

「なんもしてねえよ」と嫌そうに答えるのは、肘掛けに片脚を乗せ大股開き、さながら我が家のように寛いでいる悠木だ。誰に貰ったのか季節外れの温州蜜柑を剥いている。鼻を衝く瑞々しい香りが室内に漂う。

剥かれた蜜柑を一房外し、ぽんと口の中に放り込んでから、莉人が持つ組みかけのエニグマを指し「よくそんなの作ってられるな」。すると莉人が、きつと悠木を睨み付けた。

「いくら泉くんでも、エニグマの悪口は許さないよ」と、強い口調。

悠木は気圧されたように「いや、そういうつもりじゃ」と口籠る。聞いてないふりをしつつ、しっかりと耳を傾けていた宇佐美が「悠木劣勢、ざまみろ」と内心、嘲る。

「しっかし暇だな。ウサちゃん、今日呑みに行かない？」突然、話を振られて宇佐美はぎよつとする。

「えー、いいなあ僕も行きたい」

「お子様は宿題やって寝てろ。ちん毛生え揃った頃に誘ってやるよ」

「僕、もうちゃんと生えてるけど」

「え、まだ中二のくせに」

「うん、ボーボー。まさか泉くん、中二の頃生えてなかったの？」という莉人の質問に、

「あー……どうだったかなあ」と恍けて残りの蜜柑を一気に頬張る。二人のやり取りに「自分の時はどうだったかな」と、宇佐美も思わず考える。

「ねえ、行こうよウサちゃん。この辺に良い店ない？」

「なぜ、君なんかと。前から思っていたがな、君は人との距離の詰め方が少しおかしいぞ」

「いいじゃん、遊んでよ」

「だいたい何故ここにいる。役員室だぞ、遊ぶなら別の場所へ」

「あ、そうそう、ウサちゃんに用があって来たんだよね。俺、あのコスプレ爺に喧嘩売られて困ってるの。なんとかしてよ」

コスプレ爺とは、おそらく着流し姿の円成寺のことだろう。

「採め事か」

「一方的に絡まれてんだよ。俺の顔見るなり、アレを隠したのはお前かー、とか言ってる。泥棒

呼ばわりしてくんだけ、酷くない？」

「アレとは」

「知らねえ」と返事する悠木が嘘を吐いているようにも見えず、宇佐美も首を捻る。

とん、とん、扉を叩く音が聞こえ、続けて「失礼します」と声がした。見ると槇枝が頭を下げながら執務室に入ってくる。「坊っちゃん、そろそろお時間が」呼びかけてきた槇枝の言葉に、「坊っちゃんっ!?」夏目漱石かつつの」と悠木が噴き出す。宇佐美は心底嫌そうな表情で悠木を一瞥した後、「いま行く」と立ち上がる。

「え、呑み行かないの? どこ行くの?」

悠木の問いに、よりにもよって「お見合いです」と槇枝。

「お見合い!」悠木と莉人が声を合わせて驚くのを聞き、革製の茶色いビジネスバッグを手にした宇佐美が溜息をつく。

「見合いつて、男同士で?」

「相手は女性だ」

「でも、あんた——」不思議そうに見上げる顔を睨み付けると、悠木は続く言葉を飲み込んだ。「呑みに行かれるのでしたら、明日の夜の方が都合が良いかと。夕方にはこちらで山中専務との打ち合わせが入ってますし」教える槇枝に、宇佐美は「黙って」と首を横に振る。

「お、いいこと聞いた。じゃあ俺、打ち合わせ終わるまで待つてようかな。見合いの話も聞きたいし」

「無駄だ、用が済んだらすぐに帰る。さあ鍵をかけるから君達も出る」

莉人が慌ててテーブルに散らばったエニグマのパーツを仕舞い始める。

「だけどウサちゃん、見合いなんで、」

呼びかけに振り返らず槇枝の元へ向かう。

「……いいの?」

質問の多い男だな、と宇佐美は内心苦笑する。

「美しいお嬢様じゃないか。それにまだお若い。十も年下の女房とは羨ましいぞ、壮吾」

芋焼酎を舐めながら笑っているのは宇佐美 慶一郎、壮吾の父である。宇佐美の見合いはホテルにある中華レストランの個室で行われた。父の行きつけの店である。宇佐美と慶一郎、見合い相手の両親である春日夫妻、そしてその娘の依子（よりこ）が円卓を囲んでおり、目の前にはピータンやくらげの酢の物などが並んでいるが食べる気にはなれなかった。依子も全く手を付けていない。食欲不振の「本日の主役達」は置き去りにされ、慶一郎と依子の父は大いに盛り上がっている。春日は大手製薬会社の社長であり、慶一郎とは仕事を通じ知り合った間柄だと聞いている。

右隣に座る依子は、赤地に黄色で貝桶柄が描かれた友禅の振り袖姿だった。まっすぐの黒髪

を背中まで伸ばしたおろし髪がモダンな印象を与えている。そのいかにもな姿に「社長令嬢による社長令嬢のコスプレ」という言葉が頭を過ったが、すぐに振り払う。悠木に毒されてきたのだろうか、と我ながら呆れる宇佐美であった。

「それじゃあ、この後は若い二人で」という、もはや創作物でも見ないであろう使い古された定形台詞で体よく追い払われた宇佐美と依子は、ホテルの敷地内にある日本庭園にやって来た。これまた使い古されたシチュエーションに宇佐美はうんざりしながら、黒松の根本、玉砂利に埋まる飛石を踏んで行く。依子は黙ったまま宇佐美の後ろから付いてきた。

ここはやはり「ご趣味は？」などと声を掛けるのが適切なのだろうか。などとぼんやり考えていると、鹿威しの鳴る音が聞こえた。かっぼん、である。溜息が出た。

「依子さん」立ち止まり、背中越しに声を掛けると依子も足を止める。

「この話、断っていただけじゃないでしょうか」

振り返り、顔を見る。見上げる大きな目の中、虹彩も髪と同様に黒い。

「僕は貴女の望むような全うな結婚生活を送れる男ではないのです」

「承知しております」依子が声を上げた。意外な程、しっかりと落ち着いた声色だった。

「壮吾さんに関するお噂は、父より全て聞いております」

「では、どうして」

「壮吾さんはこれから、この国の形を作っていくお人だ、と。そう父から聞いております。であれば、性的指向の問題など些細な事柄に過ぎないのではないのでしょうか」

強い意思を感じさせる眼差しに気づき、宇佐美は驚く。

「いつの世も、大事を成すのは選ばれた一部の人間のみです。その力は一方的に与えられるもので、どんなに望んだところで簡単に得る事ができるものではありません。しかし壮吾さんは、生まれながらにその権利を手になさっている。ならば私は、その壮吾さんの支えとなる、そういう人生も悪くないのではと思えるのです」

「しかし——」

「後継ぎのご心配でしたら無用です。子供ならいくらでも作りようがあります」

依子の言葉に宇佐美は動揺していた。これほどまでに揺るぎない決意が、この小さな身体はどこから生まれたのかと。

「力を持つ者には、その力を正しく使う責務があります。たとえ——」
自分を犠牲にしても。

依子は口にしなかったが、宇佐美の耳にははっきりとその声が聞こえた。

2

とにかくいつも怒っている人、というのが堀内（ほりうち）助教授に対する帆波の印象

だった。

生徒やその親はもとより教員同士でもよく揉め事を起こす人で、帆波がゼミに入った当時、もうすでに五十近くだったが出世コースから完全に外れていた。最終的に六十五歳で退職した際にも准教授止まりだったと聞いている。学校教育法の改正で名称こそ変わったが、実際のところは助教授のままだったわけだ。それでも帆波は、教育者として堀内が劣等だったとは思っていない。火の点きやすい性格のおかげで、単に人気がなかっただけだろう。

本当は、学部内で「ヌルい」と噂され人気が高かった別のゼミを取るつもりでいたのだが、まんまと抽選に漏れ、堀内のゼミに入るようになった。

初めての顔合わせの際、堀内がゼミ生に放った最初の一言を今でもよく覚えている。

「お前達は、どうしてそんなにヘラヘラ笑ってられるんだっ！」
誰も笑ってなんていなかった。

一年上のゼミ先によると、堀内というのは怒りの連鎖反応を動力とする原子炉からのエネルギーを糧に生きているような男で、四六時中、何かに対して怒っている。怒っていないと、おそらく死ぬのだと言う。

ある日、帆波はゼミ生から集めたアンケート用紙を抱え、教授室の前にいた。ノックをしようと手を持ち上げた瞬間、中から「くそ——っ」という叫びが聞こえ、驚きのあまり用紙を落としてしまった。慌てて拾い集め、こっそり扉を引き中を覗く。左右の壁には天井まで届く背の高い本棚が一面に設置されていて、そこにはびっしりと本や資料が詰め込まれていた。さらにそこから溢れだした書類が、正面に位置するデスクの上に山を作っている。そのデスクに向かい、ひよろりと背の高い堀内が一人佇んでいた。腕を組み背中を丸めているようだが、照明の点いていない部屋は薄暗く、窓からの逆行が堀内の姿をシルエット化していた。再び「くそっ！」という怒鳴り声とともに、堀内が自分のデスクを蹴り上げた。と同時に「痛ったあっ！」と叫び、右の爪先を抱え上げ左足でびよんびよんと飛び跳ねている。その一連の流れを見守っていた帆波は、「自分の担当教員が「馬鹿なのでは」と本気で心配になった。」

父親が亡くなったのは帆波が堀内のゼミ生になった年、大学三年生のことだった。

和食をメインに扱う大手のレストランチェーンで雇われ店長として働いていた父は、ある夏の朝、まさに眠るように亡くなった。医者の診断では原因不明の心肺停止、まだ48歳だった。

蒸し暑い日だった。母に頼まれ、いつまで経っても目を覚まさない父を起こすため、リビングと和室を隔てる襖を開けると、中にはむっとした空気と父の汗の匂いが立ち込めていた。父は布団の上でうつ伏せになっていた。白いランニングにトランクス、帆波がいつも「お父さん、ちゃんと服着てよ」と笑っていたお馴染みの格好で、手脚をだらりと伸ばしている。クリーム色の肌掛けが腹の脇に丸まっていた。

「朝ごはん、できたよ」

返事が無い。近づくとも見えてきた横顔、両目が薄く開いていた。瞼の間から覗く眼球は白目部分が奇妙なまでに黄色く微動だにしない。

「お父さん？」

返事はない。しゃがみ込んでその背中を強い力で揺すった。冷たくはない、しかし体温も感じられない。

「お父さん、お父さんっ!？」

帆波の手の動きに合わせて、でっぷりと肥えた父の身体が揺さぶられる。頭部もゆさゆさと左右に動き、顎が落ち、開いた唇の間から紫の舌がだらりと出てきた。そこで初めて、父が死んでいることに気が付いた。帆波の胸を最初に押し潰したのは、悲しみよりも恐怖の感情だった。

「やだあっ!」

父の遺体を残したまま、叫びと共に部屋を飛び出した。

人手不足による激務が続き、早朝から深夜まで働き詰めの父だったが、過労死による労災認定を受けることはできなかった。元々、肥満体型だった父は生活習慣病を抱えており、死因は高血圧性心疾患とされた。しかし父が太り始めたのは今の職場に転職してから酒量が増えたためである。長時間勤務によるストレスが原因だったと帆波は考えている。なのにその死が「自己責任」とされたことに納得がいかなかった。

しかし、父の死により母の心は折れていた。大手企業を相手に裁判を起こす気力もなく、わずかばかりの慶弔見舞金を受け取り沈黙した。将来を悲観し、帆波には「大学を辞めて働いてほしい」とまで言うようになった。

承認印をもらうため、教授室にいた堀内に退学届を手渡すと、中を読まずに帆波の顔を見上げ「理由は」と尋ねてきた。

「父が亡くなりました」

「それは知ってる。そのことと君が大学を辞めることに何の関係がある」

「母が、辞めろと」

「なぜ」

「先が不安だから、今すぐ働いて欲しいと」

「……会わせろ」

「は？」

「母親に会わせろ、今すぐにだっ!」

それは無理だと説得したが、堀内は頑として聞かない。仁王のような形相を崩さぬまま「いから、今すぐ、お前の家に連れて行け」。帆波は仕方なく、堀内を家まで案内した。

六階建ての公団住宅にある部屋は荒れていた。ゴミ箱からはゴミが溢れ、洗濯物は床に散らばり、汚れたままの食器がシンクに積み上がっている。父が死んでから、母がろくに家事をし

なくなつたせいだ。そんな部屋に人を上げるのは恥ずかしかったが、堀内は洗濯物を蹴り上げながらずかずかと上がり込んだ。その堀内を、母はぼんやりとした眼差しで眺めていた。

「子供の学ぶ権利を奪う馬鹿親はお前かっ!?」

という一言から始まった堀内の叱責は、母が泣き出しても終わらなかつた。父が死んでから半年、未だ立ち直ろうとする気配もなく塞ぎ込みつ放しだった母が、感情を高ぶらせ泣いている様は痛快なほどだった。

二時間に及んだ母への説教がようやく終わり、堀内を見送るために外に出た。すでに日が落ち暗い。去り際、堀内は母を相手にしていた時とは打って変わった穏やかな口調で帆波に言った。

「怒れ。お前の怒りから目を背けるな」

今思えば、その時から帆波は堀内に恋をしていたのだと思う。二十八歳差の純愛だった。

不人気ゆえかゼミ生は十二人と少なく、その内の四人は堀内の気性の荒さを嫌い次第に顔を見せなくなつた。一方、帆波は堀内の恫喝まがいの説得が功を奏し、退学の危機を免れた。少しずつ気力を取り戻した母はパートタイマーとして働きに出ている。

四年に上がると、卒業論文の執筆が進むにつれ堀内との交流は密度を増していった。帆波の抱える想いが一方通行ではない、という予感を抱き始めたのはこの頃である。それは最初、単なる直感に過ぎなかつた。しかし時が経つにつれ、堀内の目線、言葉の端々に現れる何かを感じ取らずにはいられなかつた。不確かな希望は澱のように心に積もり、恋心が今にも溢れ出しそうに苦しかった。

それ（・・・）が起きたのは、帆波が中堅の広告代理店へ就職を決めた秋頃だった。卒業論文の骨子をまとめ堀内に見せていたのだが、何度提出しても「駄目だ」と突っ返される。もう五度目のリテイクだった。さすがに帆波は苛立ちを募らせ「どうしてですか、理由を教えてください」と詰め寄つた。しかし堀内は「自分で考えるんだな」と冷たく返すだけだった。

資料が山積みになつたデスクの上、わずかに空いたスペースにノートパソコンを置き、堀内は右手でマウスを操作している。背後からは夕陽が差し込み、部屋を蜜柑色に染め上げていた。教授室には二人以外に人はいない。腹立たしさと湧き上がってきた悪戯心のまま、デスクの上は無防備に放り出されていた堀内の左手の甲に掌を重ねてみた。かさついた肌が指先に触れる。

堀内は視線をノートパソコンに留めたまま、しばらくの間、動かなかつた。どこかでミーティングでもしているのか、部屋の外からどつと複数人の笑い声が聞こえ、すぐに静まる。このままだと自分の心臓の音が届いてしまいそうで怖くなり、手を引っ込めようとした時、堀内の掌が返り帆波の手を握つた。

視線は変わらずディスプレイにある。マウスに乗せていた右手はいつの間にか顎に添えられ、

口元が隠されている。表情は硬い。指輪の光る左手が柔らかく帆波の手を握り返す。その手が、暖かかった。

ただそれだけで嬉しかった。泣き出してしまいそうな程に。

箱根にある大学所有の山荘にゼミ生が招待されたのは、その三ヶ月ほど後、年明け二月初旬だった。卒業旅行を兼ねた壮行会ということで、堀内が企画した。山荘に着いて帆波が驚いたのは、堀内が年上の妻を伴って来たことだ。目を細めて頭を下げた堀内夫人を指し、「上さんだ」とぶっきらぼうに紹介した堀内をゼミ生達は一斉にからかった。やんやと囃し立てる学生の中で一人、帆波だけは笑うことができなかった。一泊二日の旅行中、何を見て何を聞いたのか、もう思い出すことができない。ただ堀内とは一言も口をきかなかった。

一度だけ、皆がボードゲームに熱中している時に、気配を感じふと見ると堀内と目が合った。たった二秒、一瞬の逢瀬は堀内が顔を背けることで断ち切られた。

苦勞して書き上げた卒論はB+だった。採点の渋い堀内の元では良くやった方だと皆が褒めてくれたが、もうどうでも良いことのように思えた。

評価と共に堀内から論文を返された時、二つ折りにされた用箋を黙ったまま手渡された。

目を閉じ 穏やかな夜に身を任せるな

老いてなお 日暮れ時にあってこそ

激しくその身を燃やせ

怒れ

怒れ

死にゆく太陽を睨み

怒りの声を上げ続けろ

書かれていた詩の一節を読み、用箋はすぐに捨ててしまった。謝恩会も卒業式も出なかった。堀内とはそれきり会っていない。

写真一枚だけを残し、思いは消した。

3

帆波は「HORRIBLY」と書かれた表札を見上げている。名前の横に茶色い子猫のシ

ルが貼られている。そういえば堀内が「猫を飼ってる」と言っていたのを懐かしく思い出す。堀内の妻、布美枝がベストコートに入居してきてから二人きりになるのを避けてきた。あの日、箱根の山荘で会ったきりの帆波に布美枝が気付いているとも思えなかったが、動揺を隠し通せる自信がなかった。配膳用ワゴンの上には夕飯が載っている。スパイシーな香りが漂っていて胃が刺激される。今日のメニューはチキンカレーだった。デザートに小さなアイスクリームもついている。インターフォンのボタンを押し、扉を開け、このカレーを布美枝の元に届ける。何のことはない、それだけのことだ。言い聞かせながらトレイを持ち上げ扉に向き直る。ごくり、と唾を飲み込んでから、右手をインターフォンに伸ばし――

「ちよつと待った」

いつからそこにいたのか、背後から声をかけられ驚く。肩がびくつと大袈裟に動いて、おかげで持っていたトレイを床に落としてしまうところだった。慌てて両手で持ち直す。

「驚かせないでよ」

すぐ後ろ立つ悠木を睨み付ける。

「それ」と人差し指で帆波の持つトレイを指差す。

「この人って、シールありじゃなかった？」

はつとして確認すると、手にしていたトレイに黄丸のシールは付いていなかった。さつと血の気が引く。布美枝はインスリン注射を打つ糖尿病患者だ。

「……悪いんだけど、堀内さんに食事持って行って。シール付きの方」

手にしていたトレイをワゴンに戻し、中段に残っていたシール付きのトレイを指差しながら悠木に言う。

「俺があ？」と不満そうな声。

「ごめん、本当に悪いんだけど……私、無理で。ごめんなさい」

上手く出ない声でなんとかそれだけ伝えてから、帆波は扉を背にし、駆け出した。

心地良い風が吹き、櫛の枝を揺らしいる。気がつけば五月ももう半ばだ。私鉄の線路が横切る南側は見晴らしがよく、ベストコートの三階から繋がる管理棟の屋上を利用したテラスからは夕陽に照らされた住宅街がよく見える。鉄製のフェンスに凭れ掛かり、帆波はかつて自分が通っていた大学の方角に目をやる。ぽつりぽつりと明かりの灯り始めた家々があるだけで遠すぎてここからは見えない。でもきつと、まだそこにある。

静けさを破るように、背後で扉を開ける音がした。

「おい、人に仕事押し付けてサボってんじゃねえ」

悠木の声、怒っているようだ。

「職場放棄はよくねえぞ職場放棄は。ったく、何やってんだよ……あーもう腹減ったあ。ねえ、俺のカレーなかったんだけど――」

喋りながら、すぐ隣までやって来た悠木が帆波を見て息を呑んだ。

「……うわ、泣いてる」

帆波は泣いていた。しゃくりを上げ肩を揺らし、大粒の涙をこぼしている。

「最初はただのおっさんだって思っただのよおおっ」

フェンスに乗せた両腕に顔を伏せると、鼻水がびろーんと糸を引きながら垂れ落ちた。自分で自分の鼻水にドン引きする。だけど涙を止められなかった。

「好ぎで好ぎになっだんじゃないっ！ どうぢでも止めれながっだのよおおっ」

ひっくひっくと肩を動かしながら、夕暮れの街に慟哭する。

「ちょっと……落ち着きなよ」

帆波の尋常ならざる姿に、さすがの悠木も狼狽しているようだった。

「俺でよければ、何でも話聞くからさ。な？」

見ると、にっこりと口角を上げ美しい笑みを浮かべる悠木の顔があった。その表情は街で見かける商品広告のそれのようで、無償に腹立たしくなった帆波は、

「なんで、あんたが、ここにいるのよっ！」

と言って、黒いスニーカーをぎゅうと踏みつける。

「痛あっ！」

顔を歪ませ悠木が叫んだ。

テラスの中央に設置されている木目模様のベンチに腰掛けている。涙は引っ込んだが鼻水はまだ止まらず、一度、すすってからペットボトルの緑茶を飲む。悠木が買ってきてくれたものだ。その悠木は、もう一つ並んでいる隣のベンチに座り涼しい顔で夜景を眺めている。

「年取ると考え方が変わることもあるけどさ、だからって昔の自分を丸ごと責めなくても良いだろ。だってその時は、真剣に考えてたんだから」

勢いに任せ、つい堀内のことを悠木に喋ってしまった。落ち着いた今は大変後悔している。

しかし、黙って長い話に付き合ってくれた悠木には少し驚かされた。

「……悪かったわね、足踏んで」

謝ると悠木が肩を竦めて見せる。

「そういえば、なんでここで働いてんの？ 別の会社に就職したんだろ」

「子供ができて、すぐ辞めたのよ。同僚との間にね、デキ婚。子育てが落ち着いてから再就職したの」

「でも、こういう場所で働くのって資格いるんじゃないかなかったっけ。カウパーとか——」

「ヘルパー」

「それぞれ」

下品な言い間違いに、今は目を瞑っておく。

「持ってたのよ。学生時代に資格取ってたから」

「家族に年寄りでもいた？」

「そうじゃなくて……いつか堀内先生の面倒を見ることになるかもしれないって」

「付き合ってもなかったのっ!？」悠木が驚きこちらを見る。

「あの時は本気でそう思ってたのよ、馬鹿だったから」

「馬鹿じゃないけど……まあ極端だね」

たまたま資格を持っていたから、楽そうだから、という理由で働き始めた。介護の仕事に志があった訳ではない。そのせいで、いつも何処かに罪悪感を抱えていたような気がする。「ありがとう」と礼を言われる度に傷ついていた。だから仕事だけはきっちりとかなそうと思っっているうちに、いつの間にか主任まで出世し現場を任されるようになった。与えられた地位に気が持ちが追いつかないまま、現在に至る。こんなことで良いのかという帆波の自問に終わりは見えない。

「とりあえず、話して来たら」悠木が立ち上がり前に立つ。

「誰と」

「堀内の嫁さんと。だってあんた、このままだと一步も先に進めないだろ」

「どうぞ」と呼ぶ声は思った以上に高く、可愛らしかった。十六年前にもこの声を聞いていたのだろうか、と帆波は考える。

「食器を下げに来ました」

部屋は十一畳ほどの居間に収納と水回りのついた1ルームタイプで、会社経営者だった智美の住むLDKタイプよりずっと狭い。高所得者向けと謳われるベストコートだが、ここにも格差はある。部屋の中央より少し右に寄った辺りに黄色いカーテンがひかれている。その向こうは寝室だろう。カーテンの前に小さなダイニングセットが置かれており、椅子に座った布美枝が腰掛けていた。ここを訪れた日と同じ黄色いサマーニットを着て、銀縁の丸眼鏡をかけた顔が帆波を見ている。その目が細く弓形になり「ありがとう」。地顔が笑っているような人だと十六年前と同じことを思う。

「布美枝さん」呼びかけると「はい?」。声が震えていないかどうか、と心配だった。

「私、堀内先生の教え子です」

見上げる目がほんの少しだけ開かれた。しばらくの間、記憶の中に面影を探すよう、じっと帆波を見てから「もしかして、箱根の?」と呟く。帆波は黙ったまま頷く。

「……お掛けになって」向かいの椅子を手で示した布美枝の表情は、少しだけ強張っているように思えた。

「あの箱根、あれは何年前のことだったでしょう」

「十六年前です」椅子に座り、背を伸ばし真っ直ぐ布美枝の方を向く。

「そうでしたか。もうそんなに……」布美枝がテーブルの上で組んだ両手に視線を落とす。

「あの人が学生を連れて泊まりに行くなんて、あの時、一度きりのことでした。おまけに私を連れて行くなんて言い出したから、なんて珍しいことがあるんでしょうと驚きましたよ。きつと、よっぽどの理由があったんでしょうね」

布美枝の言葉に胸が傷む。

「去年、定年退職で大学を辞めた後、すぐに亡くなりました」

帆波は黙ったまま頷く。ゼミ仲間が教えてくれたが、葬式に顔を出す勇気がなかった。事故だったと聞いている。

「いつும்ぷりぷり怒っている人でしたね。ようやく学校勤めが終わったから、これで怒るのも止めるかと思ったら、あつという間に逝ってしまつて。勝手な人でした」

テーブルの上に伏せられたスマートフォンが目に入った。表札にあったのと同じ子猫のシールが貼られている。堀内夫妻には子供がいなかった。その分、布美枝は猫を我が子のように可愛がっている、という話を耳にしたことがある。しかし過ぎた年数を考えれば、もう寿命を迎えた後だろう。

「でも楽しい生活でしたよ。不器用な人だったから、やきもきさせられることも多かつたんですけどね。嬉しいことも、悲しいことも、驚きも、たくさん与えてくれる。そういう人でした」
布美枝が顔を上げ、帆波の目をじっと見返す。そして、

「あなたも、あの人から何かを貰ったのでしょうか？　どうかそれを大切になさってください。それこそが、あの子の生きた唯一の証なのですから」

話を終え布美枝の部屋を出ると、悠木が立っていた。廊下の壁に凭れ掛かり腕組みをしている。長々と話し込んでたはずだが、待っていたのだろうか。

「どうよ」と悠木。

「うん」とだけ答え、帆波は歩き出す。

二人でエレベーターまで続く廊下に行く。隣に並ぶ悠木に帆波は「ありがと」と小さく礼を言った。

「出すものはしっかり出さないと、すっきりしないからな」にやりと笑う悠木の顔を、帆波は見上げた。

その横顔に「……私、あなたのこと少しわかったかもしれない」

「え、なにそれ」

「子供なのよ、あなた」

言われた悠木がむっとした表情を浮かべる。

「誰が子供だ、ちゃんとちん毛も生え揃ってるっつーの。ボーボーだぞ」
そんなことを話していると廊下の先、曲がり角から円成寺が顔を出した。

「またアレを隠したなっ!? どこにやったっ!?」

円成寺が悠木を見るなり、怒鳴りながら向かってきた。

「うわ、また出た。コスプレいちゃもん爺」

「円成寺先生、そんな大声でなにを——」制止しようとする帆波の手を払い除け、円成寺が悠木の胸元に掴みかかる。

「アレを返せっ!」

胸ぐらを掴まれた悠木が、両掌を顔の横に持ち上げ戦闘放棄の意思を示す。

「だからアレって何のことだよ、意味わかんねえな。もしかして爺さんのハムスターもどっか行ったの?」

「ハムスター? なんの話だ?」円成寺が一瞬、不思議そうに顔を歪める。

「ええい、知らんのならもういい」と言い捨て、円成寺はぶつぶつと何か言いながらテラスの方に去った。

「ちよっと、円成寺先生になにしたのよ」軽く睨むと「知らないって、まじで」と悠木。

エレベータに向かう途中、円成寺が顔を出した曲がり角から続く廊下を、なんとなしに覗いてみる。すると毛足の長いベージュのカーペットの上に何か落ちていた。近づき拾い上げると、掌サイズの小さなジッパー付きの透明なビニール袋で、中には薄青の錠剤が二つ入っていた。

「葉、誰かの落とし物かしら」

「決まってるだろ。これこそ爺さんが探してたアレ(・・)だよ、アレ(・・)」

「まさか、そんなタイミング良く落ちてるわけじゃない」

「尺の都合ってやつだな」

「は?」

「特撮番組って実質二十分くらいで短いだろ。だから話進めるのに都合の良いことがよく起るのよ」

「何の話?」

「ともかく俺はピンときたぞ。爺さんのあの態度に怪しい葉。これはアレだ、アレに間違いない。俺には謎が見通せるっ!」

と言って、びしっと前方を指差しキメ顔の悠木。指した先には何も無い。

これは何だ? 名探偵のつもりか? それとも歌舞伎?

謎である。帆波は不思議でならない。

「どうして、こんな場所に」

厨房から続く食料庫である。ベストコートでは基本的に二十四時間食堂への出入りが自由なので食料庫は別室になっており、盗難防止のため外から鍵が掛かるようになっていて。その食料庫に今、悠木と帆波、それに宇佐美がいる。縦に長い十畳ほどの部屋には、入ってすぐ右側に壁一面の業務用冷蔵庫、その向いに棚が二つあり、調味料やティータイム用のスナック菓子など大量の食料がストックされている。宇佐美の質問を無視し、悠木が開かれた冷蔵庫に頭を突っ込んで「無い、無い」と騒いでいる。

「おい、人を呼び出しておいてさっきから何してるんだ」

「カレーを探してるそうです」と悠木に変わって帆波が答える。

「カレー？」と宇佐美。

「腹減っちゃってさあ、ウサちゃんと呑み行くまで保ちそうにないから、カレー食べに来ただけだ」

「誰が呑みに行くと言った」

「やっぱ無い！ くっそ、楽しみにしてたのに」

「あんた、カレー好きなの」

「それでもないけど、ここのは抜群に旨い」と言って冷蔵庫を閉めた悠木が、肩を落として小さな溜息をついた。

「……それは残念だったな。では、僕は帰る」

「ちょっと待った。話があんだよ、密談。ウサちゃんの友達のこと」

「友達？」

「円成寺先生のことです」

円成寺と友人関係と思われているのが何となく嫌に思え顔を顰める。

「また揉めたのか」

「これ、見てよ」と、悠木が差し出したジッパー付きビニール袋を受け取る。中の二つの錠剤を見て宇佐美が

「何の薬だ」

「ドラッグだよ、ドラッグ。気持ち良くなるやつ。いい大人が隠れて悪いことしてんだよ」と悠木。

ぎょっとして手の中の錠剤をもう一度、確認してみる。ざらついた薄青の表面にIG722という文字が刻印されていた。

「あの爺、絶対ヤッてるよ。だって様子おかしかったもん、目も虚ろだったし。前にキマッてる奴見たけど、やっぱあんな感じで——」

「ちょっと、あんたこそ使ってるんじゃないでしょうね」

「やらないよ、俺は。おまわりに捕まったら嫌だし。それに気持ち良くなる方法なら他にいく

らでもあんじゃん、なあ？」

同意を求められた宇佐美は返答に窮する。

「あんたは本当に下ネタばっかね」と顔を歪める帆波に、「下ネタなんて言ってねえよ、他にもあんたは、サウナとか」とむくれる悠木。

「ドラッグかどうかはわかりませんが、様子がおかしかったのは確かです。常用薬にしてはそんな小袋に入れて持ち歩くのも変な感じですし、違和感がありますね」

宇佐美が再び、手の中の小袋を見る。

「識別コードがある。非合法薬ではないだろう」

「コード？」目を丸くし、悠木が聞き返す。

「刻印されている番号だ。ネットで調べればすぐに何の薬かわかる。……スマホを置いてきたな。誰か、代わりに」と言って帆波を見るが「私のも、スタッフルームに」

「俺が調べる」デニムの尻ポケットから黒い裸のスマートフォンを取り出した悠木が画面に目を落とす。

「薬剤、識別コード、検索、で調べてみる。おそらく医薬品のデータベースを閲覧できるサイトが出てくる。コードはIG722」

悠木がぶつぶつ呟きながらスマホを操作する。やがて、「お」と声を上げた。

「何の薬だったの」

「無い、出て来ない」

「まさか」近づいてスマホを覗き込むと、たしかに「該当する薬品は見つかりませんでした」とある。

「貸してみろ」悠木の手からスマホを取り上げると、「あ、俺のプライバシー」と抗議の声。

「余計なことには触らん」と言い返しブラウザから「IG722 錠剤」、「IG722 medicine」など、あらゆる検索ワードを試してみる。なぜか「恋が叶う待ち受け画像一覧」というページが引っ掛かってきたのが気になったが、薬剤についてそれらしい情報は出てこなかった。

「……確かに、出て来ないな」

「そんなことって、あるんでしょうか」

国内で流通している薬で、識別コードがあるにも関わらずデータベースに情報がないというのはおかしな話である。とすれば、海外から個人輸入した未承認薬かとも思ったが、これに関しても外国の薬剤データを扱うサイトに情報が出てこない。とすると――

「ほら見ろ。やっぱ、いけないお薬だぜ」

「しかし――」

ちゃっつという硬い金属音が聞こえ、見ると、食料庫のドアノブが動いていた。三人は思わず口を閉じ、じつと動かさずノブを見守る。左に半回転し、ドアが少しだけ押し開かれる。どう言い訳するか……と考えているうちにドアは再び閉まり、かちやり、と音が鳴った。

「え」と三人。

帆波が青い顔で飛びつき、がちやがちやとノブを回すが開かない。どん、どんと叩き「開けてくださいっ、人がいますっ！」叫ぶが閉ざされたまま動かなかった。

「あーあ、閉じ込められちゃった」

「調理スタッフか？ 灯りも点いていたのに気づかないとは迂闊だな」

「なに落ち着いてんです、このままじゃ朝まで出れないっ」

「悠木、携帯を持っていたな。助けを呼べ」

「あ、その手が」帆波がほっとした表情を浮かべる。

「近所に助けに来てくれそうなり合い、いないんだけど」

「事務所の人は？ マネージャーとかいるんでしょ」

「やだ、あいつらには二度と借りは作らねえ。それより坊っちゃん、あのヤクザのボディガードみたいなおっさん呼びなよ」

「槇枝か」と言い悠木からスマートフォンを受け取るが、そもそも電話番号を記憶していないことに気づく。他に思い出せる連絡先はないか――

「駄目だ。覚えてる番号が一つもない」

「私も……スマホがないだけで、こんなにも無力だなんて」と項垂れる宇佐美と帆波。

「ああ、莉人がいたな。一応送っとくか。でもあいつ、あんまスマホ見ないんだよな」

「気がついてくれなかったらどうしよう……警察、呼ぶ？」

「それは避けたい」宇佐美としては、できれば大事にしたくなかった。

「ならしゃーない、朝飯当番が来るまでここにいるか」

「はあ!? 冗談言わないでよっ!?!」

「どうして僕が、君達と、こんな場所に」

「出れないから」と言う悠木に、反論できない二人が押し黙る。

悠木がもう一度、冷蔵庫を開け中を探り、

「食えそうなものはあるな……あ、良いもの発見」

扉の影からひょいっ顔を出し、にやりと笑い手に持ったガラス製の瓶をこちらに向けた。ビールだ。

「予定変更、今夜はここで呑み会」

「本気で朝までいるつもり？」

「緊急事態だ、事務所の人間に電話しろ」

「絶対やだ」悠木はぷいと横を向いてスマホを尻ポケットに隠してしまった。

「どうしよう……このままじゃトイレにも行けない」

「バケツにして蓋しとけば平気だろ」と指差す先には、隅に置かれた黄色いバケツ。

「嫌すぎるっ」両手で顔を隠す帆波の横で宇佐美も顔面蒼白である。

一方、涼しい顔の悠木は、まだごそごそと冷蔵庫を漁り続けている。

「あーディケムまであんじゃない、シャトー・ディケム。雑に管理しちゃって」今度は黄金色に輝く白ワインの瓶を取り出した。

「こっそり呑んでんだろ」悠木が非難の眼差しを宇佐美に向ける。

「こっそりというか、会合で出された」

「高いの？」

「一本、十万くらいだったかな。あんた達を安い給料で働かせた金で、偉い奴等はこんな呑んでんだぜ。嫌んなるな」

今度は帆波が眉根に皺を寄せ宇佐美をじとつと見上げる。「いや、その、僕が買ったわけでは」と慌てる宇佐美。おそらく他の役員が購入したものだ。昨年の会合で数本出されたうちの残りだろう、宇佐美も口になっている。

「……ああもう、やってらんない。いいわ、呑みましょう」帆波が羽織っていたブレザーを脱ぎ捨て床にばさりと放り投げた。首に巻いていた黄色のスカーフも外し、背中後ろに一つまとめにしていた髪からゴムをするりと抜き取ると、下りた後ろ髪が肩にかかる。

「いい女風」とからかう悠木をじろりと睨み「うるさい、馬鹿」

悠木の足元に三本、並んだ大瓶を眺め「栓抜きないでしょ。どうやって呑むのよ」と帆波。すると悠木はうーんと考え、ぐるりと周りを見回してから宇佐美の腰元に目を留めた。ぎくり、嫌な予感。

「ウサちゃん、ベルト貸して」

「断る」

「いいから、早く」

迫る悠木から逃げるように後退るがすぐ後ろには食料棚がある。逃げ場はない。眼前に近づいた顔が妖艶な微笑を浮かべ、

「無理やり、さりたいの？」

右手の指先が、撫でるようにバックルに触れる。

「BLね」

「わかったっ、貸すから下がれっ」

慌てて両手で悠木の身体を押し返し、ストラップスからベルトを抜き取る。手を離しても落ちはしなかったが、腰の周りがゆるくなんとも心許ない気分であった。

宇佐美からベルトを受け取った悠木は「だはは、やったぜ」と勝利の声を上げ、ベルトの金具部分を注ぎ口にひっかけ、瓶の蓋を器用に開けていった。

「んじゃ、カンパニー」

冷蔵庫の前で胡座をかき、満足そうに笑いながら瓶ビールを掲げる悠木に、宇佐美と帆波は溜息をつきながら瓶を持ち上げる。宇佐美は壁に凭れ掛かり、帆波は食料棚の前で足を崩して

座り込んでいる。目の前には一本ずつ、633 mlの国産ビールが入った瓶が置かれている。

「冷蔵庫にまだ山ほどある。呑みすぎてひっくり返るなよ」にやにや笑う悠木を帆波がちらと見てから、持ち上げたビール瓶に口をつけ喉を鳴らし呑み始めた。中身が半分ほど無くなった頃、長い一口がようやく終わり「私はね、強いのよ」と一言。その豪快な呑みっぷりに悠木と宇佐美が小さく「おお」と感嘆の声を上げる。

宇佐美も少しだけビールを口に含む。瓶から直接呑むのは始めてのことで、厚ぼったい縁が唇に触れる感じが妙だった。上手く呑むことが出来ず口の端からわずかに零れた雫を手の甲で拭き取る。急に首元が窮屈に感じられネクタイを緩めると、少しだけ楽になった。

「うっわ、このチーズくっせ」冷蔵庫と棚から見繕ったつまみを床に並べ、その中からブルーチーズを摘み上げた。

「臭いがこもるから、そんなの開けないでよ。ねえ、さっきの高いワインは？」

「あれも呑む気か」

「駄目ですか？」とこちらを向いた帆波の目が威嚇しているように見え、宇佐美は黙る。

「コルクはなあ……どうやって抜きゃあいいんだか」言って悠木が立ち上がり、今度は食料棚の方をごそごと漁る。

悠木が棚漁りに夢中になっている間、会話が途切れた。しばらくビールをちびちびと呑んでいたが、不意に「悠木と仲が良いんですね」と、同じく瓶ビールを片手に持った帆波が話しかけてきた。

「いえ、全く」

「そうなんですか？」と不思議そうな帆波。

「仲良しじゃなくて、ウサちゃんは俺のファンなの」

ビールを呷りながら「エニグマを観たというだけで、君のファンになったわけではない」

「エニグマって、悠木の出たやつですか。面白かった？」

「……それなりに」と返事すると、帆波は「へえ」と声を上げまたビールを呑む。早くも空になりそうだ。

「しかし、あのクライマックスにかかる君の歌は酷かったぞ。お経のようだった」

「俺、歌は駄目なんだよねえ」呟いてから、「あ、これで開くかも」とアイスピックを手にした悠木が冷蔵庫に向かう。

「ビール、おかわり。宇佐美さんの分も」

まだ半分以上、中身が残っていたが、帆波に顔をちらと見られ断ることができなかった。

悠木が栓を開けたビール瓶を宇佐美と帆波の前に置き、自分も一口呷ってから、シャトー・ディケムを抱えコルクの部分にアイスピックを突き刺す。「できるかな」と、ぼつり。

「……この子よく見るわね。売れてるの？」床に転がったプレッツェルの箱を開けながら、パッケージに印刷された若い女を帆波が指差す。

「立花サリア（たちばな さりあ）だな。朝の連続ドラマに出ている。最近、デビューしたばかりだが実力のある俳優だ」

「詳しいんですね」

「いや、詳しいというほどでは」

「ウサちゃん、立花サリアのファンなの？ ゲイなのには？」

「好きな芸能人とセクシュアリティは関係がないだろ」

「好きなのね」

「まあ、可憐だとは思う」

「かれん」と声を合わせる悠木と帆波。

「立花サリアか……可愛いよね、声とか」

思わせぶりの悠木に「会ったことあるのか？」と尋ねると「内緒」と意味ありげに笑う。

「そういえば、あんたの名前って芸名？」

「そうだよ、あんま気に入ってないけどね。なんか演歌歌手みたいじゃない？」

「わかる。孫の歌とか歌ってそう」

「そうそう。孫への愛を歌い上げる系の演歌歌手」

悠木泉が歌っていきそうな孫の演歌というのがどんなものか、宇佐美には全く想像がつかない。一本目のビールが空いたので二本目に手を伸ばす。

「本名なんていうのよ」

「そっちの方がもっと気に入ってないから、秘密」

「光雄」

「ちげーよ、なんで」

「私、こういうの当てるの得意なのよ。康平」

「ちがう」アイスピックを動かしながら笑っている。

「陽平、透、良……違うの？ じゃあ、五郎丸」

悠木と宇佐美が声を上げて笑い出した。「誰だっけ、五郎丸」、「それは名字じゃなかったか？」

きゅつきゅつの後に小さく、ぽん、という音。「よっしや、開いた」と悠木が歓声を上げたので見ると、アイスピックの先に抜けたコルクが形を保ったまま突き刺さっていた。器用なものだな、と宇佐美は感心する。

「やったぜ、勝利の美酒」、注ぎ口から直接シャトー・ディケムを呑む。「はい、ウサちゃん」隣に座る宇佐美にボトルを突き出す。回し飲みにも多少抵抗があったが、受け取り、思い切った口をつける。芳香は瓶に閉じ込められたままわずかに漏れるばかりで、舌や喉にやたらと甘みが纏わり付いてきた。でも、悪くはなかった。

「私も」

帆波が手を伸ばしてきたので渡すと、すぐにぐいぐいと呷る。呑み終えたかと思うと表情を曇らせ一言「あつまあ、ジュースみたい」、どうやらお気に召さなかったようだ。

「だー、さすがにちよつと酔ってきたな。ウサちゃん、なんかやってよ。余興、かくし芸。腹芸でもいいよ、親父に教わってんだろ」

「宴会芸なら、むしろ君の十八番だろ」

「じゃあ、歌おうか」

「あのお経は遠慮したい」

「そんなに酷いの？」とシャトー・ディケムを呷る帆波。

「現代技術を持ってしてもカバーしきれぬ耳を疑う酷さだった」

「俺、歌だけは苦手なんだよねえ」悠木が渋い表情で首を傾げる。

「でもあれ、結構売れたんだぜ。ダウンロードランキング、その年の五位。みんな歌なんか聴いちゃいないだろうね」とビール。

「もの好きが多いんだな」宇佐美も口に残った甘味をビールですすぐ。

「かくし芸も歌もなしか……じゃあ、3Pでもすつか」という悠木の眩き。宇佐美と帆波が悠木の方を向き、顔を歪める。

「冗談だって。頭固いね、似た者同士なんじゃない？」

ビール。

「あなたが非常識すぎんのよ」

シャトー・ディケム。

「本当に。よく芸能界でやって来れたものだな」

ビール。

ビール。

「抜群に顔が良かったもんで」

ビール。

「自覚あんのね、感じ悪。せめてもうちよつと可愛げのある言い方しなさいよ。嫌われるわよ」

「俺はもう嘘つかないって決めたんだよ」

「正直なだけで生きていければ、幸せなことはないだろうな」

ディケム、ビール、ビール。

「あらま大人ぶっちゃって。そっちの人だって、言えた立場じゃないと思いますけど」

「僕は常識的な生き方を心掛けている」

「超弩級のお坊ちゃん育ちが、なに言ってんの」

「抜群に実家が太かったもので」

ビール。

「あー、薄給のために身を粉にする日々が虚しくなってきた」

「そんな落ち込むなって。川魚にも生きる権利はある」

「誰が地味な川魚よ」

「鮎のように珍重される川魚もいる。そういえば、もうすぐ時期か。去年食べた炉端焼きは美味かったな。あの独特な香りは西瓜とよく例えられるが、やはり苔を食べているせいだろうか」

「鮎……もう何年も食べてない、おまけに食べたの、養殖。ああもう、なんかあんた、悠木より腹立ってきたわ」

「なぜ」

「ディケム、ビール、再びディケム。」

「おい、喧嘩すんなって。仲良くしろよ。ほら、見ててやつからセックスしなよセックス」

「……………」

「冗談だって」

と、ビール。

「食料庫って言ってたから、たぶんここじゃないかな」

莉人が円成寺と一緒に「やすらぎ庵」から続く厨房にやって来た。朝、悠木からのメッセージに気付き、大慌てでベストコートにやって来た。まだ鍵が閉まっていたので、どうやって中に入ろうかと考えていた時、敷地内を散歩している円成寺を見つけ事情を説明した。

円成寺が警備員に話をつけて鍵を借り、食料庫のドア前までやって来た。莉人が、そつとドアに耳を近づけ中の様子を確かめる。

「なんにも聞こえない」

「殺し合いの果て、中は血の海かもしれん」

「え」と驚き、円成寺を振り返るが、涼しい顔でノブに鍵を刺した。冗談だったのかな、と不思議に思う。

ゆっくりとドアが開き円成寺が中を覗き込む。すぐにまた締める。ドアを背に莉人に一言「子供は見ちゃいかん」、首を横に振る。そんなことを言われると尚更気になるので、円成寺の言葉は無視してノブを回す。「あ、こりゃ」という制止を振り切り、中を覗くと薄暗い室内には、むっと湿り気を帯びた空気と酒の臭いが立ち込めていた。目を凝らしよく見ると、床に人の重なりがある。まるで死体のように力なく放り出された四肢。下からネクタイの男、真ん中にデニムの男、そして一番上にスカートと端が捲れ上がり太ももが顔になった女。みな、仰向けで微動だにしない。莉人はホラー映画のワンシーンを思い出す。

「……怖い」と、感想が漏れ出た。その声に女が気付き顔を上げる。

「開いたあ」

ふらふらと立ち上がり、こちらに近づいてくる。バサバサの髪、よろよろの足取り。ゾンビが来た……と思いきる顔を確認すると、帆波だった。

「莉人くん、ありがとう」言いながら横をすり抜け外に出ていく。「う、気持ち悪い」と手で口を抑える。

そんな帆波に目を奪われていると、今度はスーツの男がばたばたと走ってこちらにやって来た。宇佐美だ。

「ありがとう、すまない、どいてくれ、限界だ」

脂汗を浮かべた宇佐美が、莉人を押し退け走り去る。

最後に残った悠木はのっそりと上半身を起こしてから右手で目をごしごしと擦った。

「あー、吐きそ」と呟きぼんやり天井を見上げる。

「君達は、いったい何をしてたんだ？」莉人の背後から円成寺が尋ねると、

「……日本の未来について、少々議論を」と血の気の失せた顔で答えた。

食料庫から開放された宇佐美はすぐに槓枝を電話で呼んだ。音信不通だったことをどう思っていたのかと尋ねると、「お友達と呑みに行かれたのか」と呑気な答えが返ってきた。今度は悠木と友人関係と言われ、またしても微妙な気持ちになる。

こめかみがガンガンと脈打ち、締め付けられるように痛む。喉が異常に乾いていて、水をいくら飲んでも腹が膨れるばかりで潤うことはない。身体が重い。今すぐ、どこかに身を投げ出して横になりたい。これが二日酔いか——と始めて体験する荒波のような体調不良の渦の中、宇佐美はげんなりする。

食料庫での呑み会は明け方まで続いた。が、正直、最後の方は記憶がない。辛うじて思い出せるのは、悠木も帆波も呂律が回らず目が虚ろだったということだ。宇佐美も同じようなものだったのだろう。

エントランスホールで車を待っていると、「俺も送って」と後ろから悠木に声をかけられた。続けて、「……しんどい」という帆波の声。三人は顔を見合わせ、一斉に溜息をついた。

「悠木」

聞き覚えのない女の声に、宇佐美が振り返る。そこには黒髪のショートヘアにパンツルック、背の高い女が立っていた。少し厚めの唇が驚いたように開かれている。

呼ばれた悠木は答えない。その顔をちらと確認すると、石でも飲み込んだような険しい表情を浮かべていた。

「誰、あの美女」と帆波が宇佐美に耳打ちする。

「悠木の関係者のようだが」謎の女と悠木は見つめ合ったまま微動だにしない。やがて、宇佐美と帆波の視線に気付いた女がこちらに向き直った。

「あ、今日は悠木の様子を見に来ました。お世話になっております」頭を下げる。そのまま

シヨルダーバッグの中をこそごと探り、名刺を二枚取り出すと宇佐美と帆波に手渡した。

「悠木のマネージャーです」と美女は言う。名刺には「有限会社 BEATFAST マネージャー ジメント部 日置凜香（ひおき りんか）」と書かれていた。

「元だろ、もうマネージャーじゃない」そっぽを向いた悠木が不貞腐れたように言う。凜香は黙ったまま悠木に視線を戻してから、その横顔をじっと見つめた。

「なんか、ただならぬ雰囲気ね」と再び帆波の耳打ち。

「興味深いな」

宇佐美はようやく悠木のアキレス腱を見つけたような気がして、にやりと笑った。が、すぐに頭痛が戻ってきて顔を顰めた。

6

翌日。再び父から呼び出され、横浜の実家に戻った。平日の夕方だったが、父・慶一郎は珍しく家にいた。ノックをして慶一郎の自室に入る。天然のウォールナット材でできたL字型のプレジデントデスクの横、ベランダに続くレースカーテンのかかった大きな窓の前に父の背中があった。薄いブルーのワイシャツに、グレーのスラックスとラフな格好だ。

「来たか」、ちらと宇佐美の姿を確認してから、すぐにまた窓の外に目線を戻す。

「春日から話を進めて欲しいと連絡が来た。良いな？」

話とは先日の見合いの件だろう。向こうが進めたいと言うなら宇佐美に断る術はない。「はい」とだけ答える。

「良いお嬢さんだったじゃないか。幸せにしてやれ」

慶一郎がああ短い会食の間に、何度、依子と言葉を交わしただろう。もしかすると、皆無だったかもしれない。その依子の何を以て「良いお嬢さん」と断じているのだろうか。しかしそもそも、良いか悪いかという慶一郎の判断基準は依子にある訳ではないのだ。それは慶一郎にとって「都合が良いか悪いか」という点にある。それが分かっているから、宇佐美には何も言えない。何を言っても無駄なのを知っているから、ただ言うなりになって遣り過ごす他ない。それが、慶一郎との三十年以上の親子生活の中、心穏やかに暮らすために学んだ唯一の方法だった。だから今も、ただ「はい」とだけ答えた。

「たとえ自分を犠牲にしても」と伝えてきた依子の強い眼差しを思い返す。

自分を殺し続けた先に、果たしてどんな未来が待っているというのだろうか。今の宇佐美には分からない。そしてそれを考える気力も残されてはいない。

「……ところで壮吾、円成寺先生はお元気か」

いつの間にか振り返った慶一郎がこちらを見ていた。

「はい、お変わりはないさそうです」

「先生とは、よく話すのか」

「よく、と言う程ではありませんが」

「そうか」

なにか言いたげな慶一郎を不審に思う。

「ところで壮吾、先生から——」と言い、慶一郎が持ち上げた右手の人差し指でこめかみを二度、こつこつと突いた。見覚えがあるその動きに、宇佐美は小さく息を呑む。

「聞いているのか？」

「なんのことでしょう」冷静を装い、返す。

すると慶一郎は興味を失ったようにまた背を向け「もう帰って良いぞ」と告げた。

円成寺のあの葉、そして父の口ぶり。「いい大人が隠れて悪いことしてんだよ」という悠木の悪態が耳に蘇る。

どこかで何かが動いている予感がした。

コールブロー

1

「臭い。お前、やっぱり汗臭いぞ」

夕方。住人たちが夕食をとっている間、レクリエーションルームで莉人と二人、リバーシで遊んでいた。空調の風がこちらに向かう度に、どうも臭う。体臭を濃縮したような、半乾きの下着のような、ともかく不快な臭いに悠木は鼻をつまむ。これまでも時折嗅いだことのある異臭だった。そのせいで、このマンションでは見えない透明な野良犬でも飼っているんだろうか、と不思議に思っていた。けれどそれは、いつも莉人の学生服から漂っていたように思う。「最近お風呂に入ってなくて」と困ったように笑う莉人に、「梅雨だったって、結構汗掻くんだからさ。ちゃんと風呂入れ、制服も洗えよ」。言われても莉人はやっぱり眉を下げ力なく笑うだけだった。どうにも心許ない。

「……風呂、行くか」

「え？」

「銭湯行こうぜ、この近くにあんの見た。その後、飯食おう。たまには外食もいいだろ」

「でも僕、お金ない」

「奢ってやるよ、そのくらい」と言うと、莉人は丸い顔をさらに丸めて嬉しそうに笑った。

やって来た銭湯はベストコートの近所、古い商店街の一角にあった。トタン製の三角屋根が印象的で、古びて傷んではいるものの、どっしりとした店構えは趣がある。客が出入りする門

口にかかった、これまた古臭い藍色の暖簾には「大黒湯」と書かれている。日焼けして薄くなったその字を見ながら「昭和って感じだな」と呟くと、「これが昭和かあ」と莉人は不思議そうだった。とは言っても、平成生まれの悠木にだって本当の昭和のことはよく分らない。

風呂場の天井は高く、蛇口の並ぶ洗い場の壁が男湯と女湯を仕切っていた。先客は禿頭の老人が一人、悠木には気付いてない。三角屋根の天井にある窓から夕陽が差し込んでいる。端から端まで、壁一面に鮮やかな青い空と濃紺の富士山、松の絵が大きく描かれていた。それを見上げる悠木は、素っ裸に青い手ぬぐいを首からぶら下げている。

「昭和だな」

「なんとなく分かるような気がする」同じ色の手ぬぐいを持ち、股間を隠しながら莉人も同意した。

まだ壁画をぼんやり見上げている莉人の身体は、驚くほどに細かった。尻に少し肉が付いているだけで、肋骨はもちろん肩甲骨や腰骨もとにかく浮き出ている。筋肉はほとんどないに等しく、骨も細い。

「お前、飯ちゃんと食ってんのか」悠木が驚きの声を上げると「僕、すぐお腹一杯になっちゃうんだ」というか細かい声。食べ盛りだった自分の中学時代を思うと、こんなことで大丈夫なのかと心配になってくる。

「風呂上がったらなんでも奢ってやる。好きなもの食べ」

「じゃあ僕、ハンバーガーが良い」と嬉しそうな声。しかし悠木は「ハンバーガー？」と気が乗らない。

「焼肉とか、もうちっと栄養のあるものにしろよ」

「だってマック食べたいんだもん」マックにはビール無いよな……と、悠木はがっかりしている。

二人並んで洗い場に向かい、身をかがめて頭を洗う。蛇口を押し込むと、びゅっと勢いよくお湯が出て、三秒ほどですぐ止まる。洗面器に湯を溜めるには、何度も蛇口の頭を押さなければいけない。面倒だな、と思いつつ悠木は力任せに何度も蛇口を押し込む。一方の莉人は使用方法がよく分かってないのか、一度、出たお湯を洗面器に溜め、ちよろりと頭にかけてはまたお湯を出し、ちよろりと頭にかける。そんなことをちまちまと繰り返しているから、ちっとも頭が綺麗にならない。鈍臭いなあと思いつつ横目で見ていると、ついやきもきしてしまい「洗ってる」と泡だらけの自分の頭はそのままに、莉人の頭に湯をぎぶぎぶかけ始めた。

「自分で洗えるよ」とずぶ濡れの顔が笑っている。

「お前はちんこでも洗ってる。ちゃんと剥いて洗うんだぞ、マナーだからな」言いながらお湯をもう一度かけると、目をぎゅっと閉じ、濡れた顔を両手で拭いながら、にかっとなんげも曲がった八重歯を見せた。

「エニグマのファンページやってるんだけど、まだアクセスがたくさんあるんだよ。泉くん、人気者だねえ」湯船に浸かった莉人が、風呂の縁に両腕を乗せて脚を伸ばし、水面からぽっかりと尻を小島のように浮かせている。悠木は富士山を見上げながら「ふうん」と答える。頭の上には手ぬぐいが乗っている。湯は相当に熱い。肌がちくちくと針で刺されるように痛かった。

「お前さ、学校ちゃんも行ってる？」物のついでに、と気になっていたことを尋ねる。

「……あんまり行ってない」

「だよな」

平日の昼間からちよくちよくベストコートに顔を出しているのだから、そりゃそうだろうな、という感想しかない。

「学校、嫌いなのか」

「……うん」

「どして」

「友達いないし、勉強もよく解ないんだもん。泉くんは中学楽しかった？」

「俺は……そうだなあ」と言いながら立ち上がる。熱湯のせいで肌が赤くなっていた。湯から上がり、湯船の縁に腰を下ろす。

「まあ楽しかったと思うよ。何にも考えてなかったんだろな、きつと」

「泉くんは人気者だから」

「それでもなかったぞ」

「そうなの？」と目を丸くする莉人に、黙ったまま笑みを返す。

「……そういえば泉くんって、いつも同じスニーカー履いてるでしょ。あれ、可愛いよね」突然、何を言い出したのかと不思議だったが、悠木の愛用しているジャックパーセルのことだろう。ジャックパーセルはコンバース製のスニーカーで、その名前は昔活躍したバドミントン選手に由来しているそうだが、悠木はそんなことはよく知らない。ただ、爪先を保護する白いゴムの部分に、足の形に沿った黒いラインが刻まれている。それが、にこっと笑う口元のように見えるのが面白くて、学生時代からも長年も買い替えては履き続けていた。歩きながら足に目をやると、二つの靴が笑っているように見えるのが好きだった。

「良いだろ。足元がにこにこだ」

「泉くんってさ——」

「なに」

「……やっぱいいや。なんか怒りそうだし」

「なんだよ途中で止めんなよ。気になる、言えよ」湯船からお湯をすくい上げ、尻にひっかけると腰を振りながら「うわ」と声を上げる。

「そういうの、好きなんでしょ」

「尻に湯をかけることか」

「じゃなくて、皆がにこにこ笑ってるのを見るのが。だから芸能人になったんでしょ？」

それは悠木にとって、あまりにも思いがけない言葉だった。しばらくの間、返答に困り黙り込んでしまう程に。

「……別に、そんな大した理由はない」小さく呟き、顔を背ける。

「あ、当たり前だ」

「うるせえ」と言いもう一度尻に湯をかけると、今度は「あわっ」と声を上げ笑った。

しばらくの間、沈黙が続いた。莉人はまだお湯に浸かったまま、ちゃぶちゃぶと小島を揺らしている。

「熱くないか？」と尋ねると、「ちょっと、熱いかも」

眉を下げ、困ったような笑顔で答えた莉人の頬も尻も真っ赤だった。

2

10時20分 朝食後、図書室にこもり読書。

途中、三度のうたた寝。

11時10分 移動。廊下で奥川智美とすれ違う。

そのまま2人で立ち話、鼻の下を伸ばす。

足を引きずる智美、

その身体を支えようと腰に手を回すが、

智美に拒否される。

12時35分 昼食に出た秋刀魚のつみれ汁定食をぺろっと平らげる。

だし巻き卵を2つおかわり。

13時50分 再び図書室。

本を読むのかと思いきや、文庫本を腹に乗せすぐに居眠り。

いくらなんでも寝すぎでは？

途中、身体がびくつと動き（ジャーキング）

机に置いてあった日本茶をこぼす。

スタッフ（私だ）を呼びつけ片付けさせる。

理不尽。

「なにこれ」

傍らに立ってスマホを覗き込む悠木に「円成寺先生の行動記録よ」と帆波。

錠剤の件で宇佐美から「先生の行動におかしな様子が見られたら知らせて欲しい」と言われた。あの日以来、帆波自身も円成寺については妙なものを感じており、今日一日、様子を観察してその行動を記録することにした。今は図書室の扉の前において、嵌め込まれた青いステンドグラスから中を覗き込んでいる。ステンドグラスにはペールブルーの葡萄があしらわれており、そこから覗き込む景色は青に染まっていた。

「仕事なくて大丈夫なのかよ」

「休みよ」

「は？」

「休日返上でミッション遂行中」

「……暇だねえ」

腰の辺りまでの高さの本棚が壁に四つ並ぶ小さな図書室だ。本棚の向かい、壁際に円成寺が眠る白い一人がけソファがある。今日はスウェット姿の円成寺が、そのソファの上で小さく丸まり、ゆっくりと肩で息をしている。

「爺さんの寝顔、覗き見して楽しい？ あ、そういや、あんた年上好きなんだもんな。趣味か」「人を変態みたいに言わないでよ。年上なら誰でも良いってわけじゃないし、私にも選ぶ権利がある」と妙な方向に話が逸れてしまったのを機に、なんだかひどく馬鹿げたことをやってるような気がしてきた。「今日はもう撤収」と言ってくるりと図書室に背を向ける。が、もう一度すぐにくると振り返り、扉を静かに引いて室内に足を踏み入れる。

本棚の上に畳んで置かれていた膝掛けを手に取り、眠る円成寺に近づく。投げ出された太ももの上に、膝掛けを広げかけてやった。

ふとその時、ソファの前、丸いローテーブルに置かれた手帳が目に入った。単行本サイズの厚手の手帳で、開かれたページの上に万年筆が転がっている。

そこには乱れた筆跡で一言だけ、「書かねば」とあった。

円成寺追跡ミッションをなし崩しに終え、図書室からエントランスまで歩きながら「帰るの？」と悠木に訊かれた。休みの日に職場にいたところでやることもないので、ショッピンモールで買い物して帰る、と告げると「一緒に行こうかな」と言ってきた。騒ぎになると面倒だから付いてくるな、と釘を刺しておく。

エントランスに出る。ホールに置かれた中央のソファに、見覚えのある人影があった。細身で背の高い、ショートカットの女。ポリエステル製の大きなショルダーバッグを斜めがけにし

ている。隣に立つ悠木の顔を確認すると、見る間に顔が強張りくるりと後ろを向いた。

「あなたの客でしょ」という帆波の声に、女——悠木の元マネージャー・日置凜香が気付き、こちらを見る。

「俺は呼んでない」

「放っておく気？」

呼びかけを無視し、悠木は今来た道を足早に戻って行く。凜香がソファから立ち上がる。軽く頭を下げると向こうも下げ、「あの、悠木は」と言いながら近づいてきた。

短めのショートカットに小さな顔立ち、すらりと長い手脚を持つ長身の凜香の立ち姿は、遠くから見ると青年のように思えた。近づくと、長い睫毛に縁取られた切れ長の瞳と厚めの唇が妙に艶めかしい。年は悠木よりも少し上、アラサーといったところだろうか。それでも背中をぴっと伸ばした若々しい姿は、浅葱色のVネックTシャツと黒の綿パンというござっぱりした服装と相まって、美少年と美女の間、という印象を帆波に与えた。

「あの、悠木はどこへ」再び訊かれ「何か用を思い出したみたいで」と頭を下げる。なぜ私の方が頭を下げなきゃいけないんだ、というもつともな疑問が頭を過るが、凜香の暗い表情を見ているとつい「ごめんさいね」と謝ってしまう。

「あの」と、二人同時に声が上がった。

帆波が笑顔で促すと、凜香は「あの、悠木はここではどんな様子でしょうか」と尋ねてきた。どう答えれば良いものかとしぼしの間、考える。そうしてる内に、がやがやと大きな話し声に思考を遮られた。

「花植えるなんてお母ちゃんにやらされて以来だったなあ」庭仕事を終え戻ってきた瀬川のお爺ちゃんとその仲間達である。青いゴム手袋や服のあちこちに土汚れが付いていて、歩く度に床が汚れていく。後で拭き掃除せねば、と帆波。

「あれえ帆波ちゃん。今日は制服着てないんかあ」話し掛けられた。

「お休みなんですけど、ミッシュョ——所用があつたんで、ちよつと寄ってみました」

帆波の答えに「ほうけ、ほうけ」と日焼けした顔をくしゃくしゃにして笑う。その頬にまで土が付いているのに気づき、まるで子供だな、と思わず微笑んでしまう。

瀬川達が行ってしまった後、所在なさげにしている凜香に気づき「ここは人目があるので、悠木の話ならどこか外へ行きませんか」誘うと、黙って頷いた。

二人で近所の商店街にあるコーヒESHOPPに入った。帆波はアイスコーヒを頼んだ。一方の凜香の目の前には、カップから生クリームと赤いソースのはみ出た甘そうな飲み物が置かれている。痩せている人間ほど高カロリーなものを食べているような気がするのは何故だ？と不思議に思う。帆波などは、気をつけていないとすぐに体重が増えてしまうのに。世の不条理を感じる。

「甘いものに目がなくて。美味しいスイーツの情報を集めるのが趣味でして、食べたことの無いものを目にすると、つい頼んでしまうんです」帆波の視線に気づいたのか、凜香は照れながら言った。それから改めて背筋を伸ばし、

「悠木がご迷惑をおかけしてるんじゃないかと、心配しております」

手を膝の上に置いた凜香が頭を下げる。

「いえ、そんな。迷惑なんて全然かかってないです」

「本当ですか？」探るような目を向けられ「ごめんなさい、嘘です」。「ですよ」と凜香が溜息をつく。

シオルダーバッグから、ぶーぶーと振動音が鳴った。凜香のスマホのようだ。「すみません」と断りを入れバッグを探る。「あれ、どこいったかな」言いながら中をぐるぐると掻き回し、そのうち「ない」と呟いてから中身をテーブルに並べ始めた。

文庫本、ウェットティッシュ、数枚のレシート、手帳、財布、ポケットティッシュ、どこぞのポイントカード、キャンディ×2、セロハンテープ、小瓶に入った砂、小さなハリネズミの人形、ポケットティッシュ、神社のお守り、なぜかネジ……などなど、次々と並べられる不要不急のガラクタに帆波は目を丸くする。四次元ポケットか？ と、帆波。

「あった」ようやくスマホを発見した凜香は画面を確認した後、折り返すことなくテーブルの上に置いた。並べられたガラクタを再びバッグに仕舞いながら「私、整理整頓が下手で」と恥ずかしそうに笑う。この有様だと、芸能マネージャーのような管理仕事をこなすには相当苦勞しているんじゃないだろうか、と他人事ながら帆波は心配になる。

「悠木があんな風になってしまったのは、私の責任なんです」

ガラクタを仕舞い終えた凜香が、目の前の生クリームをスプーンで突きながら話をはじめた。

「昔はまともだったんですか？」驚き、尋ねると、

「いえ、八割方は元々完成されていたのですが。残りの二割の部分がごく最近、先鋭化してきましたと申しますか」と、分からないようによく分かる答えが返ってきた。

「ちょっと期待をかけ過ぎてしまって。私自身の夢を彼に託してしまっていたところがあったので、それが煩わしくなったのかもしれない」

「凜香さんの夢ですか？」

「はい。私も昔、役者を目指してたんです。舞台の方ですが」

「ああ、お綺麗ですもんね」素直な感想が出た。

「いえいえ」と、照れて頭を掻く様子も可愛らしい。帆波は凜香にすっかり好意を抱いた。少なくとも悠木の百万倍は感じが良い。

「芸能界なんてのは華やかに見えますが、なかなか大変な場所です。大きなお金が動く分、色んな人の思惑が交差しています。そんな中で成功するには見た目が良いというだけでは、なかなか」凜香が自分事のように語る。

「でもアレは……悠木は違います。華もある、度胸も据っている。そして何より人を喜ばせるのが好きなんだと思います。本人にその自覚があるかどうかは分かりませんが。私はエンターテイメントに従事する人間には自己表現力よりなにより、その点が重要だと思っています。人を楽しませたいという欲求です。それは他者への優しさなのだと思います——あの、大丈夫ですか？」言葉を切り、凜香が不思議そうな顔をしている。その目線の先にいる帆波は驚きのあまり固まっていた。顎が床に落ちるかと思った。それほどに口がぽかんと開いていた。

凜香は悠木のことを「優しい」と評していたが、この数ヶ月の間に、あの男がそのような片鱗を見せたことがあったろうか。皆無である。あの悠木をこんな風に褒める人間がいるとは、世界は広い。

「ごめんなさい、見解の相違に少々困惑しております」

「いえ私の方こそ、つい一方的に喋ってしまって」と恥ずかしそうに笑う。ふと、「痘痕（あばた）も醫（えくぼ）」という言葉が脳裏に浮かんだ。

「幸いなことに、今でも悠木のファンは多くいます。あんなことを仕出かしたというのに不思議なものです。きっとそれも彼の才能の一つなのでしょう。だからどうしても、私は悠木を復帰させたいと思っています。そのためには例えどんなことをしてでも——」そこで凜香は話を止めた。なにか考え込むように眉根を寄せ、瞳が迷うように揺れている。

「……お好きなんですね」と帆波。

「え」

「悠木のことか」

凜香は口の端を少しだけ上げて見せた。その儂げな笑みに「泣いてるみたいに笑う人だ」と帆波は思う。

「なに怒ってんだか知らないけど、ちゃんと会って話した方がいい」

帆波が日置凜香と会った翌日。昼食の配膳を一通り終え「やすらぎ庵」の厨房で待機していると悠木がやって来た。調理台の上に並ぶクロワッサンを泥棒しようとしている。調理スタッフに「残り少ないので、つまみ食いは」と止められ、手を引っ込める。

「日置が話したいって言ったのか」と悠木。

「そうじゃないけど、あんたに悪いことしたって落ち込んでたわよ。可哀想に」

「悪いことってなに」

「まあ……プレッシャーかけすぎた、とかそんな感じ」

帆波の言葉に悠木はムッとした表情を作り、もう一度クロワッサンに手を伸ばす。調理スタッフがその手をお玉で払い除ける。

「俺はそんなつままないことで怒らない。第一、怒ってもいない」と膨れっ面である。

「怒ってるじゃん」

「怒ってないっ」言い捨て、悠木はさっさと厨房を出て「やすらぎ庵」を後にした。

入れ替わりに奥川智美が姿を見せた。最近ではますます足が不自由になり、杖を突きながらふらふらと心許ない。カウンター越しにその姿を見つけた帆波はすぐに駆け寄り、身体を支えようと手を伸ばすが、「大丈夫よ」と断られた。よろよろと歩き続ける智美を、テーブル席にたどり着くまで傍らで見守る。

「今ね、頑張つてリハビリをしているのよ」言いながら、席につく。

「本当は薄々気付いていたのだけれどね。日本一周旅行なんて無理なんじゃないかって」その言葉に、先日の悠木との一件を思い出し胸が傷んだ。

「だけど、ああもハッキリ言われちゃうと。逆に、負けてたまるか！ っと思うようになって。だから今、必死にリハビリ中なの。いつか本当に日本一周して見返してやるんだから」智美は悠木の消えた方を見ながらにっこりと笑った。

「お手伝いします。手が必要な時はいつでも言ってください」

いつか本当に、智美が旅立てる日は来るのだろうか。人生の日暮れにありながら、それでもなお前を向く彼女に、新しい旅立ちの時が。

厨房に戻ると、調理台にはクロワッサンが一つだけ残っていた。

帆波は悠木について考えている。

3

まずはここ半年間の慶一郎のスケジュールを確認した。

公務のほか、会食や面会の相手も洗えるだけ洗う。慶一郎の秘書の中で一番若い榊（さかさき）にも協力を頼んだ。出馬していれば、議員となった後に宇佐美の秘書として働くはずだった男だ。年が近いせいもあり懇意にしており、榊がこぼす慶一郎の愚痴なども苦笑まじりに聞くことがあった。

集まった情報から気になった点を拾い集めていく。米国の大手インターネット関連会社のCTO、T大学院工学学科教授、国内のスタートアップ企業CEO、春日誠司——依子の父親、そして円成寺 勝徳。彼らとの複数回にわたる面会記録。このメンバーに加え、厚生労働省幹部、自進党議員、さらに広告代理店も参加し、慶一郎が中心となって以前より定期的に行っている「新命創生会」という名の会合。集めた点を繋げる線はどこか。それはおそらく、ここ（・・・）にある。

「君は役者だったな」

宇佐美の言葉に肩を竦める悠木は、いつものように執務室のソファで寛いでいる。

「歌はマズいが芝居はそれほど酷くない」

「どうせ子供向けのお遊戯会だよ」と返事をし、ふんつと鼻を鳴らす。

「褒めたのだが」

「そりやどうも」不貞腐れたように、ふいと横を向いてしまった。

「名優の君を見込んで頼みがあるんだが……話を聞いてくれるか？」

悠木の顔がこちらを向き、宇佐美をじっと見上げる。

4

「お捜しの物に、心当たりが」

そう耳打ちすると、円成寺はさっと顔色を変えた。

「捜し物とは——」

濃紺のスウェットを上下に着込んだ円成寺が、傍らに立つ帆波をおずおずと見上げる。ここは円成寺の住居である。最上階にある3LDKの部屋で、住人用の個室としてはベストコートの中で最も広い。

「何のことだ」

こちらの真意を探っているのか、円成寺は話をはぐらかした。寝起きのせいか頭髪はぼさぼさで、いつもはすつとハの字に整えられた口髭の先端も、右が上に左が下にと乱れに乱れている。しかし先日的情感的な姿と比べると、今日は比較的、落ち着いているように思えた。

「青い葉のことです」

目が大きく見開かれる。唇はわずかに震え、明らかに動揺しているのが見て取れた。

「どうして……君が、あの葉のことを」

「取り返したいですか？」

問いかけに、ゆっくりと頷く。

「付いて来てください」

帆波の言葉に操り人形のように立ち上がった円成寺が、ふらふらと歩き出す。

帆波は円成寺を三階にある屋上テラスに連れてきた。薄い雲が流れる青空の下、まだ高い太陽が照らす住宅街を背に、金属製の手すりに凭れ掛かる人影が一つ。悠木がこちらを見ている。

「よお爺さん、なんか捜し物？」不敵に笑う悠木に「やっぱり……お前だったのかっ!？」と円成寺が足早に近づいて行く。

「それ以上こっち来んな。放り投げるぞ」

悠木は手にしていたジッパー付きビニール袋を手すりの向こうに掲げる。風に吹かれ揺れる

透明な袋の中には、あの日拾ったのと同じように青い葉が二錠入っていた。

「返せっ！」

取り乱した円成寺が大声で叫ぶと、周りの建物に反響し声が返ってきた。はっとした円成寺が自らの口元を手で抑える。見ると、額には大粒の汗が浮かんでいた。

「随分大事な物みたいだね。ねえ、これ何の葉？」

「お前には関係ないものだ。さあ、早く渡してくれ」

悠木に向かって哀れみを乞うように両手を差し出す。今にも跪かんばかりのその様子は、やはりただ事ではないように思えた。

「必死だね、そんなに良いものなんだ。もしかして若返り薬？」

「そんなものではない！」

「じゃあなに。教えてくれたら返すよ」

「教えるものにも、大したものではない」

流れ落ちた汗が円成寺の首元を濡らし、スウェットに染みを作っている。その円成寺を見て「大したもんじゃないって顔してないけど」と、笑う。

悠木が袋の口を開き、中の錠剤を一つ取り出した。右手の人差し指と親指で摘み上げ、鼻の先に持ってくる。

「飲めば何の葉か分かるのかな」

「よせ、それは危険な——」

「危険って？」

「……………」

答えようとしないう円成寺を煽るように笑ってから、悠木は錠剤を口の中に放り込んだ。

「バカモノっ!!」

円成寺が駆け出し、悠木の胸倉を掴み上げる。

「吐けっ、今すぐ吐き出せっ!!」

「もう飲んじゃった」舌をべろっと出して見せる悠木。

「ああ……なんということだ、今すぐ出さないと……」

真っ青な顔で、掴み上げた悠木の胸元をぐいぐいと引っ張っている。

「痛っ、ちよっと、痛いっっーのっ」

「誰か、今すぐこいつを病院に連れて行けっ!!」

背の低い円成寺が長身の悠木を懸命に引っ張っている。

「このままでは死んでしまうっ!!」

「先生、それは毒なのですか」

「そうだ毒だ！ 早くしないと、こいつの脳は機能しなくなるっ!!」

「どうして毒などお持ちなのですか？」

いつの間にか傍にいた宇佐美の存在に気付き、円成寺は驚いて手を離れた。

「悠木、大丈夫？」 帆波が駆け寄る。

「痛ってえ。爺のくせに怪力」 乱れた襟元を直しながらぼやく。

「事情を説明してください」

「壮吾くん、何故、君がここに……」

円成寺は呆然としたまま、宇佐美を見上げた。

「悠木が飲んだのは単なるサプリメントです。本物の葉は、こちらに」

宇佐美がスーツの懐からジッパー付きのビニール袋を取り出した。中には青い二つの錠剤がある。

「騙して申し訳ない。確証が得られなかったので、彼らに一芝居打ってもらいました」

悠木が「主演女優賞」と言って帆波を指差す。「少しは空気読んで黙ってなさいよ」とは、

帆波。

宇佐美の持つ葉を見て緊張が一気に解けたのか、円成寺はへなへなと座り込んでしまった。

「全て話してください、先生」

宇佐美がしゃがみ込み、その肩に手を置く。

円成寺はただ力なく項垂れていた。

5

「しかし、どうしてこんな場所を選んだんだ。もう少し人目に付かない所はなかったのか」

「犯人を追い詰めるったら、やっぱ崖っぷちか屋上だろ」

「火サスね」

「なにそれ？」

「あんた役者のくせに火サスも知らないの？ 火曜サスペンス劇場よ、略して火サス」

「昭和のことはさっぱり」

「平成に入ってからもやってたでしょ」

「……君達、少し静かに」と嗜めると、2人はようやく口を噤んだ。どうにも緊張感に欠けるな、と宇佐美は首を傾げる。

「円成寺先生」

声を掛けてもベンチに座り込んだまま微動だにしない。考え込むように険しい表情で眺める先には、青い空が広がっている。

「これは父から渡されたもの間違いありませんね」

錠剤の入った袋を見せると掠れ声で「そうだ」という返事。

「新命創生会に何度か顔を出されていますね」

「しんめいそうせい——なにそれ、漢方薬？」

「新命創生会（しんめいそうせいかい）。おそらく、父が中心となって進めているプロジェクトの会合だ」

「趣味の悪い名前ね」とは帆波。宇佐美も同意し頷く。

「父って、ウサちゃんの親父だよな。あのTVでよく見る性格の悪い」顔を歪める悠木に、「人の父親の悪口言うもんじゃないわよ」と、ついさつき「趣味が悪い」呼ばわりしたことを棚に上げ帆波が注意する。しかし宇佐美は「気にするな、私もあまり好きではない」と涼しい顔で言い切る。

「あの会合の目的が、政府主導で国民の脳のデジタル化を推し進めること、という所まで調べ上げました。加えて、それに伴う脳の冷凍保存と安楽死薬剤の承認の実現を目指している。そしてその被験者として白羽の矢が立ったのが、先生だと」

宇佐美の言葉に円成寺が「……君の言う通りだ」と答える。その声には、苦渋の色が濃く滲んでいた。

「話が見えない」

「私にも、全く」とは、悠木と帆波。

「……僕の父のことは知っているようだから紹介は省くが、その父が今、秘密裏にある研究（……）を進めているんだよ。それが、脳のデジタル化による人類の不老不死化」

「不老不死い？」二人揃って声上がる。

「不老不死なんて馬鹿げて聞こえるかもしれないが、理論上はすでに可能と言われているんだ。クラウドへの意識のアップロードと脳を機械へ置き換えることでね」

ぽかんと口を開いていた二人だったが、帆波には思い当たるところがあったようで、「ああ」と小さく声を上げた。

「それ、なんかで聞いたことある。たしか脳みその中身を全部パソコンに記録して死んだ後も意識を残しましょうって話よね。どっかの有名企業が研究費に巨額を費やしてらって。でもそれ、脳みそを複製するって話でしょう？ 不老不死とは、ちょっと違うわよね」

「おい、置いてくくなよ。俺、まだよく分かってないんだけど」悠木が、帆波と宇佐美の顔を交互に見る。

「分かりやすく説明すると……そうだな。例えば君は、夜眠るよな」

「うん、寝る。十時間くらい」

「うわっ、寝すぎ」

「働いてた頃に削ってた睡眠、取り戻してんだよ」

「夜に寝て、朝、目を覚ます。人は毎日この繰り返しだ。しかし眠ると一度意識が途切れるだろ」

「まあそうだね。夢は見るけど」

「では尋ねるが、朝の君と前夜の君が、本当に同じ君だという自信はあるかい？」

「俺は俺だけだ」

「君がそう思い込んでいるだけで、もしかすると君は悠木 泉の記憶を持って朝に生まれたばかりの別の人間かもしれないということだよ。これが意識の複製。要は同じ記憶を所有しているだけの別物というわけだ」

「あー、あれか。アンパンマンのやつだな」

「アンパンマン？」

「ほら、アンパンマンって顔が濡れたり汚れたりして駄目になったら頭ごと取り替えるだろ？そんな時、アンパンマンは実は死んで、記憶を引き継いだ別のアンパンマンに生まれ変わってらっっていうやつ。ネットの二次創作で見た」

「なにそれ、怖っ!!」

「まあ同じようなものかな。ただし、そのアンパンマンの頭の中身……意識を司る餡が機械化されていたら、どうなると思う？」

「食べれなくなる」ツッコミは入れずに、続ける。

「餡はいつまでも腐らずに残る。おまけにこの機械化した餡ならクラウドへ接続し記憶の出し入れも自由自在だ。アンパンマンは頭を変える度に一々死ぬことなく、同じ意識を保ちながら永遠に悪と戦い続ける」

「えーつと……つまりどういうこと？」悠木が首を傾げる。

「脳を複製するのではなく、今ある自分の脳をそのまま機械化するということだな。ただし、その技術が実現するのは、早くとも今から二十年以上先と見られている。これが第一の問題」

うーんと唸り、悠木と帆波がベンチで小さくなっている円成寺を見下ろす。

「それ、この爺さんと何の関係が？」

「円成寺先生は、この不老不死化計画の被験者になる予定だった。そうですね？」宇佐美が尋ねると、黙って頷く。

「でも脳みそを機械化できるので、二十年以上先のことなんだろ」

「そう。だから二十年前まで生きていられない人間が機械化を望む場合、技術が確立するまでの間、脳を冷凍保存しておく必要がある。そのサービスはすでに実現しているんだ。例えば、現代の医学では治すことのできない病気を抱えた人が、治療法が確立されるまでの延命措置としてこの方法を選択している」

「なんだか、ますます信じられないんですけど」帆波が訝しむと、「あずきバーだな」と悠木。

「あんこの話じゃなくて、脳みそよ」

「じゃあ蟹味噌シャーベット」

二人の呑気なやりとり小さく溜息をついてから、宇佐美が話を続ける。

「ところがここで、第二の問題が発生。冷凍保存するには脳が生きている状態で取り出さな

きやいけないんだよ。しかし日本の法律上、安楽死は認められていない」

うんうん、と頷く帆波と悠木。

「そこでここからは鶏が先か卵が先か……という話になるのだが。ならこの不老不死化計画を日本で可能にするためにはどうすれば良いかと。まずは実例を作って世間に認めさせれば良いと悪い大人は考えた。そのために注目度の高い人物に被験者になってもらおうと。そこで名前が挙がったのが円成寺先生だ。先生に将来の機械化を前提とした脳の冷凍保存サービスを受けてもらい、世間には、あの大作家が参画した不老不死化計画として認知してもらおう」

「でもさ、生きてるうちに脳みそ取り出すのってアリなの？」

「なし。現行法の元では施術した医師は自殺幫助で殺人罪になる。そこでこの薬の出版」
宇佐美が手にしていたビニール袋を見せる。

「安楽死薬ってこと？」 帆波が尋ねると、宇佐美が頷く。

「そう。しかも脳の冷凍保存に最適の。この薬を飲むと脳の機能が一時的に停止し脳死状態になる。心臓は動いているが自発呼吸は次第になくなり人工呼吸器で生かされる状態になる」

「それって生きてるの？ 死んでるの？」

「法律上は、脳死は人の死ってことになってるのよ。だから本人の意思表示があれば、脳死の段階で臓器提供もできるでしょ」

「ああ、そういう何か書いたな。免許の裏に」

「この薬を飲めばその脳死状態を意図的に作ることができるんだ。おまけに、後に脳を取り出し然るべき処置を行えば脳を再生できる。放っておけばそのまま身体ごと死ぬがね。だから被験者が事前に、死亡後は脳の冷凍保存サービスを受けると意思表示しておき、こっそりこの薬を飲めば、脳死判定を受けた後に脳を取り出し、冷凍保存に回すことができるんだ。合法的にね」

「嘘死薬（しんだふりぐすり）ってわけか」

「ロミオとジュリエットみたいね」

「そんなロマンチックなもんでもねえだろ。てか、なんでそんなヤバイ薬があんのよ」

「この計画のために、今は非合法で製造して被験者達に持たせてるんだろう。識別コードまで入れているのは、既存薬との混同を恐れてのことかもしれない。被験者には覚悟が決まったら飲め、とでも言い含めているんじゃないかな。違いますか？」

宇佐美が尋ねると、円成寺は黙ったまま頷いた。

「うーん、まあなんとなく分かった。要は、性格の悪いウサちゃんの親父は、その計画を世間に広めるためにヤバイ薬を使ってでも爺の脳みそを凍らせたことだろ。だけど、そもそもさ。二十年も先の出来るか出来ないかよく分かんない技術を当てにして、なんでそんな計画進めたがってんのよ。ロボスターに憧れてんの？」

「……あなたは本当によく話を本筋から逸らすわね」

「だって小難しい話がだらだら続いても面白くないだろ。知ってる？ ロブスターって老化しない上に脱皮する時に内蔵も新しくなるから寿命が無いらしいよ。まあでも人間に食われて死んじゃったりするんだけど」

「不要な弱者に死の選択肢を与える」

悠木の言葉尻に被せるように宇佐美が声を上げた。悠木が「は？」とその顔を見る。宇佐美は深刻な表情で続けた。

「新たな生という言葉でその意味を曖昧にしながら、国にとって必要のない弱者に死の選択肢を与える。それが新命創生会の真の目的だ、と父は言っていた」

6

「新命創生会のお聞かせいただきたい」

三日前、宇佐美は実家で父を待ち伏せていた。父・慶一郎が帰宅したのは深夜近くになってのことだ。帰宅するや否や、スーツ姿の慶一郎を玄関で捕まえて問いかけると自室へ通された。

「先生から話があったか」

「いえ。自分で調べました」

「なるほど」俯き、笑う。部屋着である藍白色のガウンに着替えた慶一郎は、重たそうな木製棚のガラス扉を開け、並んでいたスコッチウイスキーの瓶とクリスタルグラスを取り出す。

「お前も呑むか？」と訊かれ、断る。

「この国はもう、生産性の無い弱者を養っていくだけの力を持たん」

プレジデントデスクにグラスと瓶を置き、黒々とした本革のチェアに身を深く沈める。

「この国では若者が自分達の将来を犠牲にし、死を待つばかりの年寄りの面倒を見ている。この先、団塊ジュニアが被介護者となる頃にはさらに多くの若者が犠牲になるだろう。何も生まない者達を、なぜそこまでして生かしてやる必要がある？ こんなことを続けていれば国の力は衰えるばかりだ」言葉を切った慶一郎が、スコッチを舐める。

「だから不老不死という釣り餌でおびき寄せ、不要な者を殺していこうというわけですか」

「殺しなどと言うな、人聞きの悪い。あくまで、新しい生の形（・・・）を自発的に選んでもらうということだよ」薄く笑いながら、慶一郎が続ける。

「脳の冷凍保存に、実はそれほどコストはかからない。場所もとらないしな。生産力の無い人間を生かしておくよりよっぽど効率が良い。ただし、リミットは設けられるだろう。例えば円成寺先生の場合は三十年間、それ以上の冷凍保存はできないという契約になっている。三十年後に本当に脳のアップロード技術が確立しているかどうかという点はさておきな」

三十年後、もしアップロード技術が確立されていなければ脳は破棄されるということだ。そ

もそも冷凍保存された後に、研究がしつかりと進めれるという保証など、どこにもありはしない。

「……そう簡単に、脳の保存などというSFじみた話に乗る人間が多くいるとは思えません」

「そんなことはないだろう。他国ならいざ知らずここは日本だ、右に倣えの国だからな。目立つ実例を並べ続けていけば、やがて一般市民の中からも必ず希望者が増えてくる。この国を覆う絶望が、それを後押ししてくれるだろうよ」

慶一郎の言葉に、宇佐美は戦慄した。父は国のために「弱者が自殺できる仕組み」を整えようとしている。おそらくは「新しい生を前提とする場合にのみ許可される安楽死の容認」を盛り込んだ新法の成立まで目論んでいるはずだ。さらに言えば、この新法と円成寺に持たせた薬の承認までをセットに考えているのかもしれない。薬の製造を行っているのは、おそらく依子の父、春日が経営する春日製薬。利権と理想との合致。

「なあ壮吾、死は瞬間ではなくプロセスだという話を知っているか？ 否定し、怒り、縋り、絶望し、そして受け入れる。これが心のプロセス。身体の方も、心臓が停止した後には数分生きていそうさ。だとすると、死はある特定の瞬間を指すのではなく、時間の経過により完成されるものだ」デスクに肘をつき、グラスを目の高さまで持ち上げ中を覗く。

「だとすると、この国の人間はもうずっと前から緩やかな自殺を繰り返しているようなものだ。自分で自分の首を絞めるのが好きなのさ。なら、そのスピードを少し速くしてやることの、何がいけない？」

ちらと視線を上げ、口元に歪んだ笑みを浮かべた父と目が合った。

宇佐見は思う。

お父さん。

僕もまた、あなたの言う不要で弱い人間の一人です、と。

7

「なんだそれ!? そこまで言われて、なんでわざわざ実験台なんかになろうとすんだよ!!」

話を聞き終えた悠木が、怒りの声を上げベンチの円成寺を見下ろす。

「……私は、認知症を患っている」円成寺は絞り出すように声を上げた。帆波が驚き、小さく息を飲む。

「認知症？ ボケってこと？」悠木の問いかけに、「そうだ」という答え。

盗難への被害妄想、怒りっぱさ、昼夜逆転の睡眠。今振り返ると、その傾向は確かにあった。「人生を書くことだけに費やしてきた……染み一つ見当たらない至高の作品を目指し書き続け

てきた。だが、未だ満足できるものを生み出したとは言えない。書くために学び、学んでは書き、その繰り返しだった。私の財産はこの頭にしかない。なのに——」言葉を詰まらせる。顔を上げ、空を見上げる。

「知識は、誰にも奪われることはない。そう信じていた。例え身ぐるみを剥がされたとして、頭の中を奪われることは決してないと。なのに日々衰えていくこの脳ときたら、どうだ？ 五十年かけて学び得たものが、次々と頭の中から消えていく。昨日覚えていたことが今日には思い出すことができない。忘れてしまったということすら忘れる。私はこの先、私の形を保つことすらできなくなるのだ」円成寺の両目からは涙が溢れていた。

「だから私は御父上の話に乗った。たとえ彼の言う新しい生とやらが嘘っぽちだったとしても、継らずにはいられなかった」円成寺の声は震えていた。最後の方は聞き取ることができないほど小さく、掠れ。

「知識も自我も崩壊させ無様な姿を晒し人に迷惑をかけるくらいなら、私は今すぐ死にたい。しかしその勇気がない。ならせめて、未来で生き返れるかもしれないという希望を胸に眠りにつきたいんだ」

「なんだよ、それ」怒りを滲ませた悠木の声。

「あんた結局、怖いから逃げ出したってだけじゃん。人任せにしてさ」

「悠木、先生はご病気なのよ。あまりキツイことは——」

「病気だろうが病気じゃなからうが関係ない。最後まで諦めんなって俺は言ってるの」

円成寺の眼前に立ちふさがり、腕組みをして見下ろす。

「今まで好き勝手やっというて、ちょっと挫けたぐらいでめそ泣いて逃げてんじゃねーっ。みつともなくても煙たがられても、最後までしっかり生きてくこと俺達に見せてみるよっ！」

悠木の怒声に、円成寺がはっとした表情を浮かべる。一方の悠木は項垂れ、

「……あんた達にそんな勝ち逃げみたいなことされたら、俺達どうすりゃ良いんだよ」力なく呟いた。

円成寺が悠木を見返す。その目は潤んではいたものの、もう涙をこぼしてはいなかった。

「若い人には、おいら達の気持ちなんてわかんねえよ。なあ、先生」

突然、背後から上がった声に振り返ると瀬川のお爺ちゃんが立っていた。まだ昼だというのに、薄い青地のパジャマを着ている。

「瀬川さん、どうしてここに？ それに、その恰好は」呼びかけるがまるで耳に入っていないようで、円成寺の方にふらふらと近づいていく。

「なあ、おいらにもその薬くれよ。金ならあるから。それがあれば楽に死ねるんだろ」

いつからテラスにいたのか、瀬川は宇佐美と円成寺のやり取りを聞いていたようだ。しかし

「本当はよ、ずっと前から死にたかったんだ」

悠木が血の気の引いた顔で瀬川を見る。帆波も驚き、表情を歪める。

「早く死んで、母ちゃんとこ行きたいんだよお」

帆波は思い出す。それは、冬にベストコートで若月妙子を絞殺した訪問介護員の言葉だ。新聞に掲載されていたのを読んだ。

「若月さんは毎日死にたがってらっしゃいました。

だから私が殺して、

楽にして差し上げたんです」

話を終え、テラスを後にした。帆波はぐったりと疲れ果てていた。あまりの事に頭の処理が追い付いていない。ただ一つ言えるのは、これまで働いてきたこのベストコートの光景が、自分の中で様変わりしてしまったということだ。リタイア後のセカンドライフを悠々自適に過ごす老人達は帆波から見ても羨ましいものだった。こんな老後なら楽しそうだなと思っていた。しかしそれは表層に過ぎなかった。

老いへの恐怖、諦観、安らかな死への期待、閉ざされた未来への絶望。暗い雲が、この施設を覆っている。今まで目を背けていただけで、確実にここにあったものが一気に表出し襲い掛かってくるようだった。

「あ、帆波さん」

エントランスでいつものように声を掛けられた。莉人だった。

「瀬川のお爺ちゃん知らない？ 一緒にリバーシやる約束してたんだけど——」

思わず駆け寄り、その身体を両腕でぎゅゅと抱きしめた。学生服からは雑巾のような臭いがした。酷く細く、頼りない体つきだった。

「帆波さん、どしたの？」

「……もうここに来ちゃだめ」

「え」と耳元で声がかかる。

「ここは貴方のいる場所じゃない」身を離し、両手を握って真っ直ぐに顔を向けると戸惑う瞳がこちらをじつと見る。

「もうここには来ないで、ちゃんと学校に行きなさい。そうして——」どうか未来に進んで欲しい。喉の奥が詰まってしまう、その言葉を莉人に伝えることは叶わなかった。

8

正面玄関から外に出ると、青い空には夕陽に染まる朱色の雲が浮いていた。敷地を囲む樺の枝が風に揺さぶられざわざわと音を立てている。頬に当たる空気は湿気を含みぬるい。もうす

ぐ夏が来る。

「ウーサーちゃん」

自動ドアが開き、悠木の声がした。横に立ち並びこちらに向けられた顔が珍しく疲れて見えた。

「呑み行かない？」

いつものように軽い調子で誘われた。

「……行こう」と宇佐美が頷く。

連れて来られたのは、ベストコートのほど近くにある小さな居酒屋だった。檟枝には帰るよ
うに連絡を入れ、二人で並んで歩いて来た。チェーン店ではなく個人経営の店のようだがな
なか広い。個室が十室ほどあり、明るい木目調の壁やテーブルに濃い茶のクッション、揃いの
色の和食器が置かれている。BGMには懐かしいJポップをインストウルメンタル化したもの
が薄く流れていた。

個室自体は大の男が二人向かい合うと膝が触れそうなほど狭かったが、清潔感があり居心地
も悪くない。しかし、この手の店を利用したことがない宇佐美は作法が分からず戸惑っていた。
大満足もりもりプラン、十九時まで限定ハッピープラン（生ビール対象外）、飲み放題（生
ビールなし）、飲み放題（生ビールあり）。ラミネート加工された二つ折りの新聞紙ほどもある
大きなメニュー表を見ながら、宇佐美は苦渋の表情を浮かべている。いったい、何をどう頼む
のが正解なのか。

「ご注文よろしいですか」と、やって来た女の店員にどう答えれば良いのかと固まっていると、
悠木が「生二つ」と答えた。

「ハッピーアワーなのに生ビールを頼めるのか」驚く宇佐美に「単品で頼みゃいいだろ」と悠
木。そう言われてもさっぱり意味が分からなかったので考えるのを止めた。

「意外に気づかれないものだな、有名人なのに」向かいに座る悠木の顔を眺めながら宇佐美が
言う。ベストコートを出てから黒縁の伊達眼鏡と濃紺のサマーニット帽を被りそれなりに変装
しているようだが、よく見れば気づく人間も多そうなのである。

「堂々としてりゃ、意外にね。まあそれでもバレることあるけど」テーブルに置かれた霜だら
けのビールジョッキを持ち上げこちらに差し出す。

「お疲れ」促され、ジョッキを合わせると、ごつつと鈍い音がした。

「今日はまあ、さすがに変な話聞いたから疲れたな」左手で頬杖をつき、ジョッキを口を持っ
て行きながら悠木がこぼす。宇佐美は「お通しです」と店員が置いていった小鉢に入った茶色
い肉の塊のような何かを箸でほぐしている。繊維状にバラバラになったそれを摘み上げ、この
まま口に入れても良いものだろうか、と悩んでいた。

「変な親父がいて苦労してんだな、あんたも」肉の塊を口に放り込んだ悠木を見て宇佐美も真

似をする。しょっぱい……。醤油と砂糖で煮込まれ、遠くの方に生姜とスパイシーな香辛料を感じる。これはおそらく、豚肉。しかし、ぱさぱさと水気がなく脂肪が少ない。もしかすると鹿肉かもしれない。

「豚の角煮、気に入ったの？」じつと肉を眺めていた宇佐美を不思議に思ったのか、悠木が尋ねてきた。やはり豚で正解であったか、と一人頷く。

「……なあ悠木。どうしてあんな事を仕出かしたんだ」角煮のことはさておき、ずっと気になっていた疑問をぶつけてみた。

「あんな事って？」

「多目的トイレの」宇佐美の言葉に、「ああ」と思い出したような声。

「君は、まあ口は悪いしやること成すこと極端ではあるが、人に迷惑のかかることをわざわざするほど愚かではない気がする。あの件、本当はなにか理由があったんだろう」

嫌そうに顔を歪ませ「それなあ、あんま言いたくないんだよ」と溜息。

「じゃあ先にあんたの話、聞かせてよ。その後なら話してもいい」

「僕の話？」

「前にSNSで燃えてたじゃん。男とホテルから手繋いで出てきたとこ撮られたやつ。あれ、彼氏？」無邪気に尋ねてくる悠木に宇佐美は苦笑みを返す。

「恋人なんかじゃない。あの日、始めて会った相手だ」言うのと、悠木は目を丸くした。

「……プロだったってこと？」

「まあそうなるな。信頼できる筋から紹介してもらったんだが、まんまと裏切られた」

「え、じゃあ、あの写真に写ってた相手がSNSにアップしたわけ？」

「そういうこと。僕を脅して金を筆取りたかったらしいのだが、断ると腹いせにばら撒かれた。尻拭いは父がやってくれたので、どんな目にあったのか……想像するだけで肝が冷えるな」自嘲気味に笑って見せる。

「なんで、わざわざそんな危ないことしたんだよ」悠木が呆然と呟く。

「選挙に出るともう身動きが取れなくなると思って焦ってたんだよ。最後に一度だけと思い試してみたんだが、これが大外れだったというわけだ。隠し事が世間にバレて、父にもバレた。だけど本当はどこかホッとしていたんだ。これでもう、自分に嘘をつかなくても良くなると。なのに父は全てを無かったことにした。ゲイの息子なんて最初から存在しなかったかのように状況を整え、僕のセクシュアリティは抹殺された」

一気に話した宇佐美がビールを呷り「これで僕の話は終わり」

「……悪い、聞くべきじゃなかった」

「珍しいな、君が謝るなんて」

「悪い」と再び謝罪してから、しばらくの間、悠木は目を伏せていた。

「今度は君の番だ。話せよ、世間を震撼させた多目的トイレ破廉恥騒動の真相を」

渋々といった表情で「あれなあ」と呟く。「長くなるぞ」という前置きの後、「俺がそもそも芸能界に入ったのって、グレ姉のせいなんだけど——」と始まったが、早速の謎の単語の登場に宇佐美が待ったをかける。

「グレ姉？」

「うちの姉貴のこと。七歳上」

「君のお姉さんは、まさか半グレ集団なのか」

「違うっつの。グレートなお姉様だから略してグレ姉。小学生の時にそう呼べて、グレ姉に言われたんだよ」

「……君を君たらしめた家庭環境の一端を垣間見たような気がする」

「なにぶつぶつ言ってんだか。そういやグレ姉ってすげえ太ってんだよね。顔は俺に似てんだけど、たぶん百キロ以上あんじゃないかな。なのに異様にモテんの。しかも相手は実業家とか頭良さそうない男ばっか。どうなってんだろうね」

宇佐美は百キロ越えの巨体を持つ悠木似の女を思い浮かべようとしたが、まったく想像できず頭が疲れるばかりだった。

「それで、そのグレ姉が——」

9

悠木泉（芸名）が芸能界に入ったのは二十一歳の頃だった。実家から通っていた三流私立大学で大した勉強もせずふらふらしていた頃、グレ姉（愛称）から「あんた、私に似て顔だけは良いんだから活かせる場所に行きなさい」と尻を叩かれた事がきっかけである。顔は姉に似るわけじゃなく両親に似るものではないだろうか、という疑問が過ったが、口の立つグレ姉に反論すると何かと面倒なので黙っておいた。確固たる将来の目標というやつがあったわけではなかったの、それも面白いかも、というごく軽い気持ちで芸能界を目指すこととなった。

「応募はWEBから、簡単楽々」と書かれていたのが目に入り、女性向け月刊誌が主催するコンテストに応募した。友人に撮影を頼んだ顔写真と全身写真を投稿すると、あれよあれよという間に一次審査、二次審査、三次審査と進み、あっさりとグランプリを獲得した。読者による人気投票でも第一位。人生、こんなもので良いんだろうか、という悠木の意外にも真つ当な疑問は置き去りにされ、デビューまで話がとんとん拍子に進んでいった。

数多くのタレント事務所がスカウトに来た中から、「有限会社BEATFAST」という比較的小規模な事務所を選んだことに深い理由はない。強いて挙げるなら、自宅に挨拶に来た社長が手土産に持ってきた菓子が美味かったことが決め手となった。二つ折りになった薄いどら焼きのような皮でこし餡を包んだその和菓子を口にする、想像していた味のイメージとのギャップに驚いた。皮はしっとり柔らかくまるでマッシュマロのように口の中で溶け、後に残る

餡は水羊羹のようにキメが細やか。甘さは控えめで、後味に薄荷のようなすうっとした清涼感を感じさせる。あまりの美味さに感動し、両親と社長が話し合いを続ける中、箱の中から勝手に取り出し立て続けに5個食べ、6個目に手を伸ばした時、横に座っていたグレ姉から「もうやめとけ」と止められ諦めた。それ程に美味かった。

BEATFASTは、警視庁刑事部、捜査第一課の活躍を描いた「刑事家族／ファミリ」という人気ドラマシリーズで主人公の妻役を務める水入紗（みずい あや）が立ち上げた事務所だ。悠木が契約する前には水入のほか4人の所属タレントがいたが、いずれも名前を聞いてもピンとこず、顔写真を見てようやく「ああ、見たことあるかも」と言われる程度の知名度だった。大学と掛け持ちで芸能生活をスタートさせた悠木にとっては、BEATFAST程度の熱量がちょうど良く、水入や他の先輩達が可愛がってくれたこともあり気に入っていた。

日置凜香は悠木にとって二代目のマネージャーである。初代マネージャーだった男が「悠木くんは僕の手之余る」などと言出し胃潰瘍でしばらく現場を離れることになり、その代わりにやって来たのが日置だ。初代のことは好きでも嫌いでもなく、仕事のパートナーとして普通に接してきたつもりだったので「手に余ると」と言われても首を傾げるばかりではあったが、自分に非があるなどとは微塵も思えなかったのも、その後も変わらず仕事に励んだ。

そんな悠木にある日、日置は「もう少し大人になってみてはいかがですか」と言い出した。通販サイトのファッションモデルとして撮影に入ったスタジオの控室でのことだった。コンクリート打ちっぱなしの建物の中にあり、湿度が高い割に妙に寒かったのを覚えている。

「大人って、なに」

「社交辞令、という言葉をご存知ですか」

その日の日置はグレーの襟付きTシャツにブルーのデニムを身に付け、いつものように洒落っ気のない姿だった。壁面にはライト付きの大きな鏡が三つあり、スチール製の丸椅子が置かれている。その丸椅子に座りスマホを弄っていた悠木の目の前に日置が立った。見下ろす目は、怒っているのか呆れているのか悲しんでいるのかよく分からない。

「舐めるな、俺は大学生だぞ。知ってるよ、社交辞令くらい。嘘つくことだろ」

「違います。様々な人間がいるビジネスの場において物事を円滑に進めるための心遣いのことです」

日置の言葉に「だから、知ってるって」と口を尖らせる。

「私は、貴方の正直さは個人的には嫌いではありません。ですがマネージャーとして、そのことで損をしているのを黙って見てはいられません」

「別に損してるなんて思っていないけど」

「その自覚すらないのが損だと言っているのです」

目の前の日置が、がっくりと肩を落とした。日置が言わんとしていることが悠木にも何となくは分かる。撮影後に写真の感想を求められ「俺、もう少し格好良いと思う」と正直な気持ち

を口にとすると、場の空気が凍ったように冷えた。さすがの悠木だって、そのくらいは空気が読める。だからと言って「とても良い写真ですね」だとか「実物より百倍格好良く撮れてる、やあ感動だなあ。あはははは」などと心にもないことを言ったところで、マズい写真が良くないとも思えない。

「あなたはまだ若い。それに新人です。この先、様々な人と仕事をしていくことがあるでしょう。その度に明け透けに本心だけを語って、周りの人達とぶつかってはいけません、いくら実力があつたところで仕事は来ない」

見下ろす目の上、眉がハの字に歪んでいた。「他人のことでこんなに苦労するなんて、マネージャーってのはなかなか大変な仕事だな」とわずかばかり同情する。なのでその日から少し嘘を覚え、周りの人間に合わせるようになった。

するとすぐに、覆面ウォッチャーでのドラマデビューが決まった。後は勝手に人気上がり、あつという間に事務所が一番の稼ぎ頭になった。そうなると思ったことに、それまで可愛がつてくれていた水入や先輩タレントからは距離を置かれるようになった。なんだかな、と悠木は思う。

「ねえ、空蝉ってなに」

実家のリビングでスマホを弄りながらグレ姉に尋ねる。グレ姉はダイニングチェアに腰掛け、本を読んでいた。

「空蝉って、源氏物語の？」

逆に訊かれたがよく分からない。悠木の言う空蝉とは、おそらく悠木ファンであろう人物のTwitterアカウントのことである。そのアカウントを悠木が発見したのは、覆面ウォッチャーの撮影が始まってすぐの頃だった。

空蝉@Utusemi 【悠木泉出演情報】特撮チャンネルでインタビュー動画配信。現在、覆面ウォッチャー新作撮影中。がんばれ

覆面ウォッチャーの主演として発表されたばかりで、ほぼ無名と言ってもいい頃にその書き込みを見つけた。まだ世に出始めて間もなかったから、さすがに世間の評判が気になりエゴサーチしていた時のことである。今はもう、そんな気力はないが。

気になってそのアカウントを遡って見ると、かなり以前からのファンであることが分かった。

空蝉@Utusemi ロンドコンテストでデビューした悠木泉をmochiのWebサイトで発見。この人は売れると思う。がんばれ！

これが最初の書き込み。その後も事細かに悠木の出演情報が並んでいた。悠木自身が忘れていたような細かい仕事まで書かれており、その熱心さに「怖っ」と、やや引いた。それでも空蝉のアカウントのことは忘れることがなく、たまに覗いていた。

空蝉@Utusemi【悠木泉 出演情報】TVブックでエニグマのインタビュー掲載。プロモーション活動のせいか忙しそう。身体に気をつけてがんばってほしい

空蝉@Utusemi【悠木泉 出演情報】いよいよ覆面ウォッチャーエニグマ放送開始！待ってました！長期間のロケは大変だろうな。がんばれ、がんばれ！

「空蝉は光源氏の恋の相手よ」

グレ姉の声を上げる。

「恋？」

「稀代のモテ男だった光源氏の誘惑に靡かず、抜け殻のような衣だけを残り源氏の元を去った女性のこと。糞男の源氏がこっぴどく振られるんだから、空蝉が出てくる帚木は良いわね。雨夜の品定めは最悪だけど。ただ空蝉も心の奥底では源氏に惹かれていて、夫がいるから、とか身分違いだから、とかって、つまらない理由でウジウジして身を引いたんだけどね。だけどそのことが、逆に源氏の心を捉えたのよ。高校で教わらなかった？」

古典なんてどれも「昔の話」という認識でしかなかったので、言われてもまったく思い出すことはできなかった。

スケジュールが厳しく過酷だったがそれなりに楽しくもあった覆面ウォッチャーの撮影が、約一年半かけてようやく終わった。打ち上げはホテルの宴会場を貸し切りにして大々的に行われ、監督や撮影スタッフ、役者仲間やスーパースターなど、関係者が一同に集い華々しいものだった。主演である悠木は当然その中心にいるべきだったが、一通り挨拶を終えると会場の隅の方に身を潜め、人だかりを遠巻きに眺めた。皆、にこにこ笑っていた。疲れ果ててはいたが、悠木も上機嫌だった。

散々吞まされ、酒に濁った頭で二次会会場に向かうため、日置に連れられ駐車場へ向かう。日置もその日はこれまでにない程、嬉しそうで「お疲れ様」と笑顔で迎えてくれた。

ふと、前を歩く日置から良い香りが漂ってくるのに気が付いた。

南国を思わせる瑞々しい果実の向こうに、檜や杉のような緑の香り。ふっと鼻を掠めた途端、すぐに消えてしまいうさそうだった。それはいつもの日置の香りだったが、その日、はじめて意識したように思う。

だから「日置、なんか良い匂いするね」と言ってみた。

「え」振り返らずに、声。

「それなんの香水？ 教えてよ。俺も同じのつけていい？」

尋ねると、日置がようやく振り返った。眉をハの字に歪め、口が開き、驚いているような悲しんでいるような喜んでいるような複雑な表情を浮かべている。頬も、おでこも、耳朶まで真っ赤だった。何も言えなくなってしまった。

その後は二人で黙ったまま廊下を移動した。

空蝉@Utusemi エニグマ、エンタメ大賞で優秀賞受賞。悠木泉も主演俳優部門でノミネート。すごい！

空蝉@Utusemi 【悠木泉出演情報】朝ドラ「春のこい」に主人公の幼馴染役で出演。出番は短いけど、がんばってほしい

空蝉@Utusemi 番宣、バラエティ番組「冒険☆教室」に出演。苦手なトークもよくがんばってた。偉い

空蝉@Utusemi 【悠木泉出演情報】主演ドラマ決定！あの朝霞裕美さんとの共演！10月放送開始「プライベートレッスン」。楽しみ

一クールの初主演ドラマが終わる頃、悠木人気は頂点に達していた。次作への出演や広告へのオファーが後を絶たず、寝る間もないほどに働いた。しかし同時に、「顔だけ綺麗なお飾り俳優」だの「特撮出身のくせに演技派ぶるな」と謂れない中傷が目につくようになり、悠木はSNS自体を止めてしまった。ちなみに中には「歌が下手すぎて公害レベル。彼に歌わせてはいけない」と言った感想も見られたが、これは事実なので厳粛に受け止めている。

日置が新しい仕事の話を持ってきたのは、その頃だ。円成寺勝徳の代表作「棕櫚の庭」の映画化の話だった。国内外で有名な作品ということもあり、悠木を俳優としてステップアップさせるのうってつけの作品だ、と日置は気合を入れていた。言われて原作を読んでもみたが、何を伝えたいのかさっぱり分からず「長い話だな」と途中、何度も読むのを止めようかと思っただ。しかし最後まで読み通した後には何となく作者の気魂のようなものが感じられた。悠木なりに快作だと評価している。

ところがこの映画主演と並行して、事務所の移籍話が持ち上がった。社長は「もうお前レベルのタレントはBEATFASTでは扱えない。これ以上、大きな仕事を持つてくるのは難しい」と言う。代わりに大手芸能事務所の名を出され、そこに移るようにと勧められた。

その日の帰りは、日置の運転する車で都内の自宅まで送ってもらった。まだ昼過ぎで、久しぶりに半日休暇をもらうことができた日のことだった。

平日の昼下がり、高架下の国道はそれほど車が多くない。道を歩いているのはスーツ姿のサラリーマンや学生風の若者。どんよりと曇り、雲が形も見せず空を灰色に覆っていた。後部座席から窓の外を眺めている。斜め前には運転席の日置。左手首に巻かれた腕時計の青いバンドが目に入った。香りはあの日と同じ森の奥、枝にぶら下がり芳香を放つ鮮やかな果実。

「日置は俺が別んとこ行ってもいいの」

信号は赤。停車中の間、返事はない。青く点灯、車が再び走り始める。

「移籍を最初に提案したのは私です」

「なんで」

「人にはそれぞれ器に合った場所というものがああります。貴方はもっと大きなステージに立てる人間です。だから——」

「そんなの、あんたが決めることじゃないだろっ!?!」

思いがけず大きな声が出た。

「私は悠木泉という役者を買っています。おそらく、世界中の誰よりも。だから——」

「役者としての俺だけか」

「……はい」

「他には？」

「他に、なにが」

フロントガラスの向こうを見つめたままの日置の声は、少し震えているように思えた。車が国道を真っ直ぐに進んでいく。曇り空の下、すれ違う二人を乗せて。

「わかったよ」

車を降りる間際、そう一言告げて悠木は移籍に同意した。

新会社への移籍準備が着々と進められる中、先方の役員との会食があるから一緒に来てくれないか、と日置に言われた。どうしても気が進まず「嫌だ」と答える。日置は何か言いたげだったが「そうですか」と小声で答え、引き下がった。その日は日置から会食の場所を教えられ「気が向いたら顔を出してください」と、別れた。

BEAT FASTの事務所でWEBサイトのインタビューを受けながら、日置のことが気になって仕方なかった。心細そうな日置の姿を思い出し、やはり行くべきだろうか、と迷う。インタビューが終わりもう一人のマネージャーから「今日のスケジュールはこれで終わります」と教えられた。時計を見ると十九時半だった。

不意に、会議室の隅に置かれた花束や手紙、ぬいぐるみの山の中に埋もれたブルーの花束が目に入った。悠木宛にファンから届いたものだろう。なぜかその花束が気になり、手に取る。

薄青の六枚の萼が重なり、中心にはより濃い青の小さな花芯がある。アネモネだ。重なる透明フィルムの隙間、二つ折りになった白い紙が挟まっているのに気付いた。取り上げ、開く。

「これからも頑張ってください、応援しています。大好きでした。空蟬」

そのメッセージカードからは、アネモネとは異なる知った芳香が香った。

悠木は夜道を急いだ。店は事務所からごく近い場所にあったので、人目も気にせず、週末で混み合う夜の街を走り抜けた。初夏とは言え、暑い。汗が額を流れ落ち、Tシャツを濡らす。それでも走り続けた。ジャックパーセルの肉厚のソールが悠木の両足を前へと運んでくれた。

店員に「待ち合わせ」と伝え接待相手と日置の名前を告げる。店は和風家屋を改造した平屋の一軒家で、和服を着た女性店員が長い廊下を案内してくれた。やがて突き当たり、左手にある襖の前で店員が膝を付き、「お連れ様がお見えです」と声を上げた。中で、がたつと誰かが動く気配があった後、店員が襖をゆっくりと横に開く。

店員はそのまま下がり、悠木だけが個室に通された。中は八畳ほどの和室。庭に面しており、縁側の向こうの障子が閉ざされていた。右手にある床の間には、掛け軸と紫陽花。部屋の中央にある座卓には徳利とお猪口が二つ、それに小鉢の料理がいくつか、大皿料理が一つ。

中の様子に、悠木は顔を歪めた。

男が座卓の横で胡座をかいて座り「やあ、悠木くん」と上ずった声で挨拶してくる。慌てた様子で股間のファスナーを上げてからカチャカチャと音を立て腰回りのベルトを締め直している。その男のすぐ隣には日置がいる。男と肩が触れ合うほどに密着している。上半身を捻り、悠木から隠れるように顔を背け、手の甲で口元を拭っていた。

「すまないが、急用が。僕は先にお暇します」男はいそいそと立ち上がり、身支度を始めた。その間も、悠木は日置の様子をじっと見ていた。床に片手をつき、項垂れたまま動かない。

男が個室から出て、二人きりになった。

「何してたんだ」

返事はない。

「これが始めてか。それとも、ずっと前からこんなことしてたのか」

やはり、返事はない。喉奥が締め付けられるようで上手く声を出すことができなかった。

「教えて欲しいことが二つある」

悠木の問いかけに、日置がようやく顔を上げた。髪は乱れ、唇はいつもより赤みを帯びている。

「俺のためだな」

日置は答えない。代わりに、黙ったまま俯く。

自分の声がやけに遠くで響いているように感じる。

「あんたが空蟬か」

二つ目の問いに、日置はぐしゃつと表情を変え両手で顔を覆った。泣き続ける日置を、悠木は遠くからただ見守るしかなかった。

あのメッセージカードは今も手元にある。

しかし香りは消え失せた。あの時、捕まえそこねたその香りは閉じ込めておくこともできず、遠い記憶の中、薄れていく。

10

悠木は頬杖をついたまま目を伏せていた。悲しんでいるのだろうか。口元には皮肉っぽい笑みが浮かんでいる。

「そんなことがあったから、新しい事務所には絶対行かないつつってゴネたんだよ。映画の話も断って。そしたら、ある日、知らない女に呼び出された」

「女？」

「日置の件で話があるのかなんとか言うから、MINATOSUNSに行ったんだよ。待ち合わせ場所には見たこともない女がいてさ。俺の腕引っ張ってトイレの中に連れ込んだ。で、あなたハメられたわよ、ここから出たら待ち伏せしてる記者に写真撮られるから、って」

啞然として、口を開く。

「制裁のための罠だったっていうのか!？」

「だろうね」驚いて眉根に深い皺を寄せる宇佐美に対し、悠木は涼しい表情で答えた。

「なんてことだ……じゃあ、トイレで性交したというのも——」

「いや、それはヤツたけど」

「ヤツたのか」

「だって、したいって言うから」

そこはさすがの悠木と言うべきか。

「そのちよつと後から、その女、TVにがんがん出始めたんだよね。顔は全く変わっちゃってたけど。可憐に大変身」

「整形か」

「今じゃ超売れっ子。ほら」と指差した先、個室の外、カウンターの上に設置されたTVがあった。そこに映っていたのは——

「立花サリアっ!？」

またしても驚きの声を上げた宇佐美に「夢のある世界だろ」と悠木が笑う。

「日置が、そろそろ戻って来いって言うてるんだよね」ビールを口に運びながら言う。

「元の事務所に戻るのか？」

「いや、多分、別のところ」

「良いのか？」

宇佐美の問いかけに「良いも悪いもない。俺に選択肢ないもん」と俯く。

「俺は、俺の持ち場でやれる事やるしかないかなって。そんな気もすんだよね。日置もそうして欲しいみたいだし。だから、そろそろ戻ることにする」

「そうか……」呟き、宇佐美もビールを呷る。

「しかしいいのか。彼女と会えなくなるぞ」

「彼女？」

「神帆波」

「あれは……そういうんじゃないだろう」慌てて顔を顰める悠木に、宇佐美は思わず笑い声を上げた。

「良いコンビだと思ったがな」

「あんたが勘ぐるような仲じゃない。それに、向こうは既婚」

「意外だな、気にするタイプだったか」

「俺が気にしなくても向こうは気にしまくりだ。ってか、本当にそんなんじゃない」

思いの外、動揺を見せた悠木を愉快に思い、さらに笑う。

「……そういうや、ウサちゃんの子供の頃の夢ってなんだった」話の矛先を変えようとしている

のか、意外な問いかけに宇佐美は少し驚いた。

「そんなの考えたこともなかったな。幼い頃から父の跡を継いで政治家になると思ってたし」

「ふうん。坊っちゃんってのも、なかなか可哀想なもんだな」

「子供のうちから周りの大人がペコペコと頭を下げてくるんだぞ。お父様にはお世話になっております、と言ってな。そんな環境にありながら、こうも実直で常識的な性格に育ったのは、僕の努力のおかげだ」

「本当に実直で常識的な人って、そうやって威張らないんじゃない？」

「そうだろうか」

「あんたもやっぱ、ちょっと変わってるよ」悠木が笑う。

「俺はね、本当は水族館で働きたかったんだ。シャチの飼育員」

「シャチ？」

「そう、海にいるシャチね。小学生の時に研修旅行で行った地元の水族館で見たんだよ、シャチのショー。イルカなんか比べ物にならないくらいでっかいシャチが、人間の言うこと聞いて

泳いだり飛んだりすんのよ。凄いんだぜ」

イルカのショーくらいは見たことがあったが、シャチまで芸をするとは初耳の宇佐美であつた。

「よく晴れた日でき。海の近くにある屋外プールの水面がキラキラ光つてて。シャチが動く度に、海が動くみたいな大迫力なんだよね。ウェットスーツ着た兄ちゃんがさつと手を上げるとシャチが飛ぶんだよ。水がバシャーって跳ねて、最前列の俺、びっしやびしや。友達も先生もキヤーキヤー騒いでた。その兄ちゃんがシャチと一緒に潜ったかと思つたら、今度はシャチの口先に乗つかつて一緒に飛び出てくんの。ザバーって。すごくない？　なんか見てたらワクワクしちゃつて、俺もやつてみたいなーって。その後、五百円払ったらシャチと一緒に写真撮れるっつーから少ない小遣いから泣く泣く出して記念写真撮つただけど、シャチの野郎、ザバーって水から顔出して俺のほっぺにキスしやがんの。可愛いと思うだろ？　ところが、俺のほっぺ、シャチが食つてたイワシかなんかの残骸でぐちゃぐちゃ。生臭いつたらなかった」懐かしそうに目を細めた悠木が続ける。

「だから本当は芸能人なんかじゃなくて、シャチの飼育員になりたかつたってわけ。でももう無理だろうな。俺はこんなだし」

「無理じゃない。雇つてくれるところがなければ作ればいい」
「作る？」

「君ならいくらでも客を呼べる。水族館を作つてそこで好きなだけ働け。うちが出資してやろう。どこに作る？　神奈川か、北海道でもいい」そう言うと悠木は「いいね、それ最高」と嬉しそうに笑つた。

随分長い時間話し込んでしまった。店員からラストオーダーを訊かれ、最後に二人で水割り頼む。

「親父のあの計画、どうする。放っておくのか？」悠木が打つて変わった重い口調で尋ねる。

「そうだな……真実を知つてしまったところで、僕にできることは少ないような気がする。それに、余りにも荒唐無稽すぎて実現できるのかどうかも疑わしい」

「だよな」悠木が溜息をつき「そんな簡単に、人が死にたがるわけねえもん」と続けた。

宇佐美の元に、高槻莉人の自殺未遂の報せが入つたのは、その翌月のことだ。

レッド

1

執務室に宇佐美と帆波、悠木の三人がいる。帆波と悠木は客用ソファに身を預け力なく項垂れている。

「先週のことだ」デスクの前に立った宇佐美が口を開く。

「うちにも頻繁に通っていたので、事情を訊きたいと警察から連絡があった。自室のドアノブにタオルを引っ掛け首を吊ったそう。発見した母親が救急車を呼んだ。幸いなことにタオルがノブから外れていたようだが、今も意識は戻っていない。藤沢総合病院にいる」

制服姿の帆波が頭を抱え「なんで」と呟く。

「……本当のところは本人にしか分からないが、警察の話によると高槻莉人はネグレクトされていたらしい」

「ネグレクト？」

「育児放棄だよ。部屋もゴミ屋敷のような有様で、酷いものだったらしいぞ。食事も満足に与えられていなかったようだ。学校もほとんど行っていなかったようだし」

ちらと帆波を見る。肩がわずかに震えていた。

「おまけにどうやら障害を抱えていた可能性も」

「障害って、どんな」

「まだ断定はされていないが、聴覚情報処理障害ではないかという話だ。スクールカウンセラーに頻繁に、教師の話が理解できない、と相談していたらしい」

「聴覚情報処理障害……知らない」悠木の言葉に帆波も顔を伏せたまま頭を振る。

「僕もあまり詳しくはないのだが、新しく認知されたばかりの障害らしくてな。聴覚に異常はないが、騒音の中や複数人との会話で話を聞き取ることが難しいそうだ」

「あいつにおかしな所なんてなかった！」悠木が大きな声を上げた。

「そこがこの障害のやっかいな所だな。一対一の会話ではとくに支障がないらしい。だから発見されないまま大人になる人間が大勢いる程で、障害としての認知度も低い。自分がどうしてそんな状態なのか理由が分からず、長い間、苦しむパターンが多いそうだ」

悠木は口を引き結び、白く変色するほど下唇を噛み締めていた。

「そしてもう一つ。このベストコートに高槻莉人の親類縁者はいなかった」

「え」

「小学生の頃、社会科見学でやって来たことがあったそうだが、それ以外に縁はないそうだ。その当時のことを思い出して顔を出したのをきっかけに入り浸るようになったのかもしれない。もしかすると——」この他には、どこにも行き場がなかったのかもしれない、という言葉で宇佐美は飲み込む。

「私のせいだ……私がもう来るなんて言ったから」くぐもった帆波の声。

「それは思い上がりだろ。あいつにだって、色んな事情があったはずだ」悠木は顎を引き、睨み付けるような視線を窓の外に送っている。

「でも——」顔を上げた帆波の頬は涙で濡れていた。

宇佐美はデスクの抽斗を開けて中を見る。こっそりと端の方に置かれていたのは、エニグマのプラモデルだ。莉人が作ったものだ。この執務室に通いコツコツと作り上げたかと思うと、「はい、あげる」と手渡された。よく見ると中古で買ったキットらしく、プラスチックが劣化し色も薄くなっている。

宇佐美はエニグマの両肘についた赤い二つのブレードを、指先でそっと撫でた。

2

藤沢総合病院はベストコートから自転車で二十分ほどの場所にある。仕事を終えた帆波はすぐに病院に向かって自転車を漕ぎ出した。真っ赤に染まった黄昏の雲。まだ湿り気を帯び、熱の引かない空気はまるでサウナのようで、黙っているだけでも汗が吹き出してきた。

小さな商店街の中央に走るタイル貼りの道を、家とは真逆の方向にどんどん進んでいく。弁当屋、携帯ショップ、クリーニング店、コンビニ、花屋。こんなに近くにあったのに、知らなかった道、知らなかった街。

受付で「親戚のお見舞いです」と告げると、意外にもあっさりと病室を知ることができた。五階でエレベータを下り、ナースステーションを横目に503号室を目指す。

莉人は個室のベッドに横たわっていた。夕陽が差し込み朱色に染まった病室で、いつもの学生服ではなく白いガウンを着せられ、血の気の失せた顔はまるで別人のようだった。年寄りに見えた。首に巻かれた包帯が痛々しく、まともに見てはいられなかった。

後ろ手に開き戸を閉め、帆波は俯く。赤い合皮のサンダルの先に、ぱたぱたと水滴が落ちた。情けないと思いつつ、溢れる涙を止めることができなかった。

「ごめん」
掠れた声を絞り出す。しばらくの間そのままの姿勢で、ただ床に増えていく水の跡を眺めていた。

この子の苦しみを、自分はどれほど見逃してきたのだろう。いや、もしかすると見ないふりをしていただけかもしれない。そんな自分がつくづく嫌になる。謝ったところで、落ち着くのは自分の気持ちだけだ。それも分かっているはずなのに、どうしても謝らずにはいられなかった。

「ごめん」

ようやく顔を上げることができるようになり、莉人の姿をもう一度確認する。ふと、ベッドの向こう側、液晶テレビの置かれた狭いテーブルの上に人形が置かれているのが目に入った。帆波でも知っているそれは、仮面ライダーエニグマのフィギュアだった。ただし、肘の部分

のパーツが一つ欠けているようだ。

「……悠木？」

帆波は誰にともなく、声を上げた。

3

『どっかで話せないか』

病院から出ると、悠木から電話がかかってきた。以前、念のためにと教えておいたのだが、始めてかかってきた上に向こうの番号は知らなかったたので、着信時に名前が表示されず戸惑った。それでも電話に出たのは、予感があったからに他ならない。

「商店街のコーヒーショップは？ あのチェーンの」

『できれば人目につかない方がいい。あなたの家に行ってもいいか』と言われ、ぎよつとする。今日は夫の帰宅が遅く、冴香も塾の日だ。二人共しばらくは帰って来ない。しかし突然、家に来ると言われると、焦るはずボラな主婦心。

「散らかってるんだけど」

『気にしない。場所は』

譲りそうにない悠木の物言いに、思わず住所を教えてしまった。

『三十分後に』そう言って、電話は切らえた。

「これはまた……素敵なお宅で」

とは、悠木と一緒にやって来た宇佐美である。玄関に入るなりキョロキョロと中を見回しながら、不思議そうな顔をしている。

「靴、脱いで」

土足で上がり框を跨ごうとしていた宇佐美に注意すると「や、これは失礼」と足を引っ込めた。この男、かなりのお坊ちゃまとは知っていたが、一般人の生活とは相当かけ離れた生活を送っているようだ。そんな宇佐美の後から入ってきた悠木は、顔を合わせても黙り込んだままだった。

十分間で、取りあえず目に付く場所だけをざっと片付けたリビングに二人を通す。

「これはまた……素敵なお部屋？ で」

お坊ちゃまなりの気遣いなのか。心にもない世辞を口にする宇佐美に「そういうの、もういいから」と窘めるとなぜか一人納得したように、うんうんと頷いている。宇佐美が一緒なら役員室で話せば良かったのに、と帆波は少々腑に落ちない。

「性悪親父のロブスターは俺が止める」

ダイニングチェアに座った悠木が、宙を睨みながらそう口にした。なにかしら深刻な決意を口にしたようだが、正直、何を言いたのか分からず目が点だ。

「親父のロブスター」繰り返し返す帆波に「僕の父による不老不死化計画」と、悠木の斜め向かい、壁際の本製ベンチに座る宇佐美が補足を加える。座り心地が悪いのか、先程からしきりにもぞもぞと尻を動かしている。

「阿呆がノリノリで自分を殺すような未来にしてたまるかってんだ」

「父の謀が実現し、多くの市民が脳の冷凍保存処理を受け、儂い未来に希望を託しながらも実際のところは死を選んでいるような世の中にはしたくない、と」

「……悠木語の通訳上手いわね」

「ともかく俺は怒ってるんだ！ これ以上、あいつ（・・・）が死んでくのを見るのはごめんだ！」

宇佐美は訳さなかったが、言おうとしていることは痛いほど分かった。

滝れ立てのコーヒーマシンの香りが漂っている。両手に持っていた炆器製のマグカップを、宇佐美と悠木の目の前にとん、と置く。フレイムオレンジとチェリーのカップの中、琥珀色が揺れた。

「協力する。で、どうするの」

三人が、互いに顔を確認し合う。

「まだ海の物とも山の物ともつかない計画だが、フェーズが進むほど阻止が難しくなるだろう。多くの人間が利権を求めて動き出すからな。止めるなら、今がベストだ」

「始まってもないものを、どう止める気？」

「いけないお菓をばら撒いてやる」

悠木の呟きに宇佐美が頷く。

「今のところ、この計画のネックはやはりあの菓だろう。言ってしまうえば非合法の毒菓だからな。あんなものが製造されているというだけで大問題だ」

「先生の持ってた菓の情報も、どっかで公開するってこと？」

「うん、SNSとマスコミを使おうと思っている。しかしな……錠剤の写真とデータを公開するくらいではインパクトに欠ける。上手く情報を拡散できたとしても、デマとして片付けられる可能性が高い」

「爆破だ、爆破」

「ばくは？」

「菓があるからには、どっかで作ってんだろ、工場とか。その工場見つけて、爆破」

「なんで爆破よ」

「ヒーロー物のクライマックスは大爆発って決まってるの」

「だめ、暴力は反対」

「爆破はともかく、製造現場を押さえるというのは良い案かもしれない。場所を特定し、写真でもあれば説得力が格段に増す」

「場所に心当たりは」

「……ある」答えた宇佐美は、わずかに表情を曇らせた。

「よし、じゃあ決まり。菓の工場行ってこっそり写真撮って情報を拡散する。マスコミの方は、ウサちゃん、伝手あんだろ」

「なくはない」

「SNSは俺のアカウントを使うか。後でパスワード聞き出しとく」

「え、悠木泉のアカウントって、あんたが書き込んでんじゃないの？」

「事務所の誰かだよ。お前はやるなって止められてんだよね、やったって良いんだけど」

実は興味本位からこっそり悠木のインスタグラムをフォローしていた。しかしその内容が美しい観葉植物の写真などと共に「おはようございます、今日も良い一日になりますように！」と大変爽やかかつ好感の持てるものばかりだったので、「これは本当にあの悠木のアカウントなのだろうか」といつも不思議に思っていた。しかし別人が投稿しているのなら納得である。悠木のふりをして投稿しているのは凜香だろうか。同情の念を禁じ得ない。

「では、僕は製造場所の特定を急ぐ」

「場所がわかったら、そこに忍び込むってこと？」

「リスクの低い方法を探すが、場合によってはそうなるかもしれない。施設内を探すのなるべく人手は多い方が良いが……どうする、止めておくか？」

宇佐美の言葉に気の遠くなる思いがした。これで自分も犯罪者の一員になってしまうのだろうか。しかし——

「行く」

帆波の答えに悠木と宇佐美も頷いた。

「また連絡する」と言って立ち上がった悠木が、廊下にくぐくドアに手をかける。その時、玄関の方から、がちやりと音がした。慌てて時計を見ると十九時半を過ぎていた。

出て行くこうとする悠木を「ちょっと待った」と止めようとしたが遅かった。悠木が廊下に顔を出した途端「ええっ!?!」という冴香の声。塾から帰ってきたようだ。

「悠木泉いっ!?!なんで、なんで家にいるのっ!?!」

「おお女子高生。あんたの娘？」呑気に笑う悠木に冴香は「え、やだ、嘘」と驚きとも喜びともつかない声を上げ続ける。帆波が悠木に続き廊下に出ると、ブルーのリボンタイで首元を飾った白いワイシャツに紺のスカート、制服姿の冴香が三和土の上で目を白黒させていた。

「可愛いね。どっか遊び行く？」

「え、まじ!?!行く行くっ!?!」

「冴香、だめ。こんなのと喋ったら口が腐る」

「なんでだよ、褒めたのに」

「女子高生相手に鼻の下伸ばしてんじゃないわよ」

「だって可愛いじゃん、女子高生。だめ？」

「……どうもお邪魔しました」帆波の後ろから姿を現した宇佐美が小声で挨拶する。

その宇佐美を指差し「え、この人も見たことあるっ！なんだっけ、炎上してた、男と手繋ぎデートの」

「やったぜウサちゃん、有名人」という悠木の冷やかに、宇佐美は深い溜息をついた。

悠木達が出ていった後も、冴香は三和土の上から動かず呆然と二人の消えた扉を見つめていた。

「お母さん、あの人達と何してたの？」

「えーっと……日本の未来について議論を少し」

そう答えた母の顔を、娘は訝しげに見上げていた。

4

帆波の家を後にし、悠木と別れた宇佐美は悩んでいた。用心を重ね、槇枝には行き先を告げずに来た。しかし彼女（・・・）には協力を求めるべきか。

タクシーを呼ぶために表通りまでの道を歩く。住宅街の狭い道路で、右手に小さな公園があった。微温い風が吹く。公園の真ん中に枝ぶりの良い黒松があるのが目に入った。凜とした佇まいのその松が、ざわざわと枝を鳴らしている。

宇佐美は胸ポケットからスマホを取り出し、交換したはずの電話番号を探した。

5

宇佐美が指定した日時は、その翌週の土曜日、夕方だった。ベストコートで落ち合い、車で向かう手筈になっている。目指す場所は意外なことに同じ神奈川県内にあり、高速を使って一時間ほどの街中だという。

季節は変わり、気がつけば七月の終わりになっていた。悠木や宇佐美と出会ってから約三ヶ月経ったことになる。昨夜、激しく降っていた雨はからりと晴れ、昼間は日差しが痛いほどだった。バックパックにスマホと財布だけを放り込み、キッチンの棚に飾ってあるトトの写真に手を合わせてから外に出る。

クーラーの風ですっかり冷え切っていた身体に、外の熱気が気持ちよかった。黄金色の太陽

がまだ沈まず東の空に見える。帆波は夕陽を眺めながら、その方向にある海を思い描く。冴香が小学生の時を最後に、家族揃って行くことはなくなったが、海は変わらぬ姿でそこにある。

「お母さん」

身を屈めて自転車の鍵を外していると、後ろから声を掛けられた。冴香だった。今日はクラスメイトとカラオケに行くと言っていたが、早めに戻ったようだ。

「ご飯あるからチンして食べて、冷蔵庫に入れてある。今日はお父さんのリクエストで茶碗蒸しも作っちゃったよ。さっき見たらまだ二階で寝てたから、もう少ししたら起こしてあげて」

「……今夜勤じゃないよね。シフト表見た。どこ行くの」

驚いて振り返ると、見下ろす娘の曇り顔があった。不安気に揺れるその瞳に、不意に懐かしさを覚える。

あれは、初めての参観日で教室を覗いた時のことだったか。小学一年生の冴香は席に座り、何度も後ろを振り返りながらまだ来ない母親を必死に探していた。今の冴香はその時と同じ目をしている。可哀想に思いつつも、自分を必死に探すその姿が愛おしすぎて、少しの間、廊下から様子を観察していた。やがて母の顔を発見した冴香が丸い顔をぱっと輝かせ、かと思うとすぐに膨れっ面になった。笑顔を必死で引っ込めながら、不器用な怒り顔を作って見せる。「お・そ・い・よ」声には出さず大きく口を開けて伝えてきた。

「お母さん、最近なんかおかしいよ……職場で何やってんの？」

立ち上がって向かい合う。視線はほとんど同じ高さだが、もう帆波より2cmも背が高くなっていた。

「……冴香」

何をどう伝えれば良いものか、迷う。

「トトが死んだ時、一緒に悲しんであげられなくてごめんね」

「え」と顔を突き出し、眉根に皺。その仕草は父親にそっくりだった。

「お母さん、トトが死んだ時、本当言うとすごくホッとした。長い間、苦しんでるのを見てたし介護も大変だったからね。そのことで冴香が怒ってたのも知ってたよ。でも仕方ないことだし、トトも楽になって良かったって自分に言い聞かせてた。だけど——」

黙り込んだ冴香が帆波を見る。

「だけど……ああ、なんて言えば良いかわかんないな」と俯く。上手く思いを伝えることができない自分が不甲斐なさすぎて、思わず笑ってしまった。

もう一度、娘に向き直り「冴香」と呼びかける。戸惑う二つの瞳が帆波を見ている。

「必ず帰ってくるから待ってて」

背中に両手を回し、抱きしめた。肩も腕も背中も、もう自分のものより随分たくましい。けれどまだどこか頼りないその身体を、帆波は強く抱きしめる。

「あんたを誰よりも一番に愛してる。お父さんには内緒よ」
冴香を抱きしめながら、帆波は堀内の声を聞いたような気がした。

目を閉じ 穏やかな夜に身を任せるな
老いてなお 日暮れ時にあつてこそ
激しくその身を燃やせ

怒れ
怒れ

死にゆく太陽を睨み
怒りの声を上げ続けろ

6

「来ないかと思った」という声がコンクリート壁を跳ね短く返る。

自転車を置き、徒歩でスロープを下りて地下駐車場に到着すると、すぐに悠木の姿が目に入った。広い駐車場の右手側、ベストコート内へと続くエレベータホールの前で壁に凭れ掛かり腕組みしている。

悠木の目の前まで歩いて行き「来た」と返事する。

「本当に良いのか」珍しく真剣な表情だった。

「大丈夫、絶対に家に帰るから」

「そうか」悠木は少しだけ目を閉じ、俯いた。

ポーンと明るいデジタル音が聞こえた後、エレベータホールに繋がる硝子のドアが開く。中から宇佐美が現れた。

「すまない、遅くなった」

「よし、全員集合。行くか」という悠木の掛け声の後、宇佐美の車を目指し三人揃って進む。

歩きながら宇佐美が「人数が足りないのではないか」

「もう少し人手が欲しかった？」

「いやそうじゃなく、チーム戦のヒーローだと通常は五人いるのが当たり前なんだろう。赤と青と黄……」

「なにそれ、冗談？」笑みが溢れた。

「安心しろ、俺のはバディものだ。あ、よく知ってつか」ニヤニヤ笑いながら悠木が「よろしく、相棒」と肩に腕を回すと宇佐美は嫌そうな表情を作って見せた。

悠木の顔がふっと横を向き、今度は帆波に視線が注がれる。

「……ヒロイン不在？」

「うるせえ」

三人が、黒いフーガの前に到着する。

「お帰りなら、お送りしますよ」

突然、背後からドスの利いた低い声が飛んできた。素早く振り返った宇佐美が「槇枝」と声を上げる。駐車場の入り口あたりに黒いスーツに黒いネクタイ、黒いサングラスをかけた敵ついで大男が立っていた。その風体の怪しさに驚き、隣に立つ悠木に小声で「誰あれ。プロレスラー？ それともヤクザのボディガード？」と尋ねると、「宇佐美坊ちゃんの運転手」という答えが返ってきてさらに驚く。正直、筋者にしか見えない。

「先に帰っていて欲しいと伝えただけだが」

「今日は大人しく帰ってください、坊っちゃん」

「父の指示か？」

宇佐美の問いかけに、槇枝は黙ったままだった。代わりに、ゆっくりした足取りでこちらに近づいてくる。

「うーわ、殺し屋みたい」という悠木の呟きに顔を引き攣らせた帆波も思わず頷く。

「悠木」

「なに」

「運転できるか」

「まあ」

「車を出せ」

宇佐美が運転席のドアを開くのを見て、悠木が中に飛び込んだ。宇佐美はそのまま後部座席のドアを開け自身も中に滑り込む。「早くっ」と促され、帆波も慌てて乗り込んだ。ドアを締めガラス窓の向こうを確認すると、槇枝がこちらに突進して来る姿が見えた。

「出してっ！」後ろから運転席に飛びつき声を上げる。

「えーっと……ブレーキ踏んで。どれ押ししゃいいんだっけ」

「そこっ、その丸いボタン」

「あ、これな。よし」

ぐうん、と車全体が振動しエンジンがかかる。「おっしゃ、出発」という呑気なかけ声の後、悠木がペダルを一気に踏み込む。が、微動だにしない。

「それはブレーキではないだろうか」

「おお」

などと悠木と宇佐美がやり取りしているうちに、槇枝が間近まで迫ってきた。ばんつと音が

して、帆波の座る後部座席の窓にグローブのように無骨な二つの掌が押し付けられる。

「ぎゃあっ！ 悠木、早くっ」帆波の叫びと同時にタイヤがぎゅるぎゅると音を立て、勢いよく車体が滑り出した。そのままのスピードでスロープに正面から突っ込むと、ブレーキも踏まらずに地上に飛び出し、右にハンドルが切られる。遠心力でドアに押し付けられ、宇佐美の身体が押し掛かってきた。

「宇佐美っ、重いっ」長身とドアに挟まれ苦痛の声を上げる帆波に「すまない」と謝り宇佐美が体勢を立て直すため助手席の肩を掴む。

「ねえ、この赤いランプなに」

ハンドルを握る悠木が声を上げる。直線の道に入り、ようやく座り直してから前を見ると、メーターパネルで「！」の文字が赤く点灯していた。

「サイドブレーキ引きっぱなしじゃない！ あんた本当に免許持ってるの？」

「持ってるよ。運転すんのは、これで二回目だけど」

「え」、帆波と宇佐美。

「エニグマのオーディションの時に免許いるかなーと思って取っただけだけど、撮影中は俺が運転する必要なんかなくてさ。その後、実家の車、運転してみたんだけど、車庫から出した途端に目の前の電柱にぶつかって。それ以来運転してないんだよね」

隣で青褪める宇佐美に「運転できる？」と尋ねると、かぶりを振る。

「脇に停めて。運転代わる、私の方がまだまし」

「大丈夫だって。ちゃんと運転できてるだろ」

「そもそも、あんた免許証持って来てんの!？」

「あ、ない」

免許不携帯に気付いた悠木は勢いよく車を左に寄せ急ブレーキをかけた。隣に座っていた宇佐美が助手席のヘッドレストに顔を打ち付け「眼鏡が、」とうめき声を上げる。

悠木が脚を上げ、センターコンソールを跨ぎ助手席に移動する。帆波は急いで車を下り、代わりに運転席に飛び乗る。五年ぶりから二年ぶりの運転手へと選手交代である。

「サイドブレーキ、どこ……ああ踏むタイプ」

「おい、後ろっ」

悠木の声にバックミラーを確認すると、赤い軽ワゴン車がものすごいスピードで迫っていた。運転席には窮屈そうに身を屈めハンドルを握る巨体の男。

「槓枝だ。しまったな、車を持ってきていたのか」

「なんでヤクザが赤のN—BOXなんかに乗ってるのよっ!？」叫び、慌てて車を発進させる。少しペダルを踏むだけで車体がぐっと前に進んだ。家の車よりアクセルが軽い。

「ヤクザではない、うちの運転手だ」

「って言われてもな。ありゃカタギには見えない」

「……悪かったな、僕の初恋相手だ」

宇佐美の言葉に、帆波と悠木は口を噤んだ。突然の静寂に低いエンジン音が耳につく。

N―BOXを振り返った悠木が感心したように、「ああいうのが好みか」と呟く。

前方、100m先の信号が黄色に変わった。

「突っ込めっ」悠木の掛け声に続き、ペダルを踏み込む。赤に変わった数秒後、信号機の下をくぐり抜け抜けると、交差する道に並んだ車から盛大にクラクションが鳴らされた。

「振り切ったか？」

「いや、まだ」

遠ざかるクラクション、バックミラーに写る赤い車体が、赤信号を無視し強引に進む。

「ああもう無理っ、追いつかれるっ！」

「インターチェンジまで突っ走って高速に乗るか」

「いや、その前になんとか振り切りたい。次を右に曲がって海沿いの道に出ろ」

スマホを見ながら道案内する宇佐美の指示に従う。公園の横を過ぎ、目の前に海が見える突き当りでハンドルを右。助手席の向こうにオレンジ色に染まる空と、その空の色を映す太平洋が広がっていた。

「わお、海。いいね、バーベキュしたい」悠木が窓の外に目をやる。

「少しスピードを落として」と、後ろから宇佐美の声。

「追いつかれるけどっ!？」

「大丈夫、考えがある」

アクセルペダルを少しだけ緩めると、槇枝のN―BOXがバックミラーの中、ぐんぐんと大きくなる。

「右車線をそのままのスピードで、真っ直ぐ」

言われるままアクセルを緩め走っていると、すぐに追いつかれた。フーガとN―BOXが海沿いの二車線道路を並走する。ちらと横目で見ると、ハンドルを握る槇枝がこちらを睨んでいるのがわかり、ぞっと身震いする。

「ぶっけろ」

「ええっ!？」

「槇枝の車にぶっけろっ!」

「だめっ、危ないっ!!」

ハンドルを握る手はガチガチに固まり、どうしても動かすことができない。すると突然、助手席から悠木の手が伸びてきて、ハンドルを一気に左に回転させた。どんっという強い衝撃。頭が左右に揺れる。

「馬鹿、怪我したらどうすんのよっ!？」

「喋んな、舌噛むぞっ! しっかりハンドル握っとけっ!!」

悠木の手がハンドルを回す。ごんっ、ごんっ、ごんっ、と車同士がぶつかる大きな音。左車線を走るN―BOXは大きく揺さぶられ、ガードレールに車体を何度も打ち付けている。運転席では榎枝が横倒しにならないようハンドルをがっちり握りしめ首を縮めている。やがて道の先に、3mほどガードレールの隙間が空いている場所が見えた。

「そこだ」

宇佐美の掛け声に合わせて、悠木と帆波が大きくハンドルを左に切った。どんっ、というこれまでで一番大きな衝撃の後、N―BOXはガードレールを越え、横転した。

波音が聞こえる。砂浜に横たわる榎枝の巨体の傍ら、しゃがみ込んだ宇佐美が心配そうに顔を覗き込んでいる。

「大丈夫か、榎枝」

「……坊っちゃん」

顔を打ったのか、榎枝の鼻からは血が溢れ出し口元まで赤く濡れていた。

「怪我、大丈夫かな」宇佐美と榎枝の姿を遠くから眺めている帆波が、隣に立つ悠木に尋ねる。

「丈夫そうだから死にやしないんじゃないかな、たぶん」と悠木。背後では横倒しになったN―BOXが、ちりちりと小さな音を立てている。

「なぜ追ってきた」片膝を付いた宇佐美が榎枝に尋ねる。砂浜には灰と黒、スーツ姿の男の影が二つ。

「お父様は気付いておられます、坊っちゃんがお父様の計画を阻止しようとしていることに」榎枝の言葉に、宇佐美が顔を顰める。

「あの方は、敵に回すには危険すぎる。とくに貴方にとっては。だからどうしても貴方を……坊っちゃんを行かせたくなかった。危険な目に合わせたくなかった」

「榎枝」と、目を見開く宇佐美。

「なのに、この様じゃしょうがねえ。もう俺に貴方を引き止める力は無い」

小さなうめき声を上げ顔を歪める。傷が痛むのだろうか。

「もう喋るな」

「ああ坊っちゃん……あの小さかった坊っちゃんが、本当に大きくなられて」ゆっくりと伸ばされた手が宇佐美の頬に触れる。見上げる榎枝の瞳は潤んでいた。

波音が聞こえる。沈みゆく赤金の太陽が空と水平線を染め、海に光の道を作っている。

「俺たちは何を見せられてるんだ」と、悠木の耳打ち。

「任侠B.Lね」とは、帆波。

「どうかお気をつけて。榎枝はいつも貴方の味方、で……す」宇佐美の頬に添えられていた手がぱたりと砂浜に倒れ、榎枝の目が閉じられた。

「榎枝——っ!!」

呼びかけも虚しく、槇枝は目を覚まさなかつた。ギイヨと鳴くカモメの悲しげな声が聞こえる。

「死んだ？」とは、悠木と帆波。

眉根に皺を寄せた宇佐美は槇枝の胸元に顔を近づけ心臓の音を確かめる。うん、と一つ頷いてから立ち上がり、スラックスについた砂をぱんぱんと払うと、こちらにやって来た。真顔である。

「気を失っているだけだ、行こう」

砂の上に横たわる槇枝を放置し、宇佐美は歩き出す。

「あの人、放つといていいの？」という悠木の疑問に「救急車を呼んでおくから大丈夫だろう」と言い捨て、宇佐美はフーガへと急いだ。

「意外に切り替え早いわね、坊っちゃん」とは、帆波。

その後はとくに何も起きず、目的の厚木に着いた。

7

春日製菓の医薬品工場は、厚木市と相模原市の境、街の中心部から山に向かって車で二十分ほどの場所にあった。大きな四角い病院のような白い建物がいくつか並んでいる。1kmほどのその一角だけが幅広の道路に囲われ、その外側はぎつしりと戸建てが並ぶ住宅街だった。広い敷地にぼつんぼつんと箱のような建築物が建ち並び、綺麗に刈り込まれた低木が建物に沿って植えられている。つい先程まで車が走っていた日常の景色とはまるで異なる整然とした空気に、ハンドルを握る手に力が入る。

「その前に付けて」と宇佐美が指差したのは、四階建ての建物。周りをぐるりと鉄製のネットフェンスが囲んでいて物々しい雰囲気だった。その一部が途切れて出入り口になっており、今は鉄製の門扉で閉ざされている。すぐ横には建物と同じように白いタイル貼りの詰め所があり、前方と真横に開いた二つのガラス窓から、中に警備員が待機しているのが見えた。宇佐美の指した場所、施設の真正面を横切る道路に車を停める。すでに日は落ちていたが、空はまだ青く光を残していた。蛍光灯の下、詰め所の警備員が訝しげにこちらを見ている。

「ここであの葉を作ってるの？」

「そうだ」

「正面に車つけるなんて大胆だな。どうやって忍び込む。やっぱ爆破か」

「あんたの発想って完全に悪役よね」

「少し待っている。助っ人が来た」

宇佐美が後部座席のドアを開き外に出た。

「助っ人って？」尋ねると、助手席の悠木も首を傾げる。

宇佐美に続き、帆波と悠木も外に出ると、後方からヘッドライトが近づいて来るのが分かった。騒々しい排気音を従え、フーガの後ろに並んだのは真紅のポリシェダ。

「何者」という問いに、悠木が再び首を傾げる。

運転席からスーツ姿の若く背の高い男が姿を現した。反対側の後部座席のドア前まで歩き、ドアハンドルに手を伸ばす。ゆっくりと開かれたドアから黒のピンヒールが二つ。男の手を取り立ち上がったのは、小柄な若い女だった。真っ直ぐで艶やかな黒髪を背中まで伸ばし、車体と同じ真紅のワンピースを着ている。袖はなく、剥き出しの肌が夜目にも白い。幅広のベルトが巻かれたウエストは、眼前に立つ宇佐美の太腿と同じに思えるほど細かった。

「依子さん」声を掛けられ、女はじつと宇佐美を見上げる。

「ウサちゃん、誰？」と隣に立つ悠木が尋ねると、宇佐美に代わって依子と呼ばれた女が「壮吾さんの婚約者です」と答えた。その瞳が悠木と帆波を見定めるように動く。

「ご協力いただき感謝します。そして、最初に謝っておかなければなりません。僕はあなたにご迷惑をかけることになる」

「承知しております。その上で参りました」依子が宇佐美に向き直る。

「壮吾さんがこれから何をなさろうとしているのか詳しくは存じ上げません。しかし、壮吾さんはこの国の良き未来を目指し行動なさっている、と。私にはそう思えてならないのです。だからこそ、貴方は私が支えるにたる人間であると確信しております。ですからどうぞ、お気持ちのままに行動なさってください。私のことは自分でなんとか致します」

依子の言葉に驚き、宇佐美は目を剥いていた。婚約者とは言え、これほどの信頼をどうして抱けるのか、と帆波は不思議に思う。しかしそれは宇佐美にとっても同様なのかもしれない。「これを」と、依子は牛革のハンドバッグからICチップのついたカードを二枚取り出した。受け取った宇佐美が「これは？」と尋ねると、「このラボのカードキーです」

「このキーを使えば、施設内のあらゆる部屋に入ることができると聞いております」

依子の言葉に宇佐美は息を呑み「どうして、そこまで」と呟く。

依子はただじつと宇佐美を見上げている。その横顔、潤んだ瞳にふと「恋は盲目」という言葉が過ぎり、なんとなく腑に落ちる。

宇佐美の問いには答えず「さ、参りましょう」、依子が詰め所へと歩き出した。宇佐美がその後ろに続いていく。

「なんか迫力のある娘ね」と、依子に対する感想を漏らす。

「もし結婚なんかしたら尻に敷かれっぱなしだな、ウサちゃん」二人の背中を見ながら悠木も呟いた。

依子が警備係に「婚約者とそのお連れの方が見学に」と伝えると、話が進んでいたようにすぐに中に入ることができた。非合法薬を秘密裏に製造している施設にしては脇が甘い、と思いつつも、実際のところ、この施設内でこっそり行われている犯罪行為など、一部の人間以外は知る由もないのかもしれない。

建物の一・二階はフロアいっぱいには薬剤の製造工場が広がっていた。三・四階がラボと呼ばれるエリアで、宇佐美ら四人はエレベーターに乗り込み三階に上がる。

エレベーターホールの先は長い廊下が続いている。壁も床も白く、見える限りでは三つほど扉が並んでおり、その横には中を覗き込める大きなガラス窓がある。その窓の向こうには白衣を着た研究員が数人いて、顕微鏡を覗き込んだりパソコンを使うなど作業している。

「どこにあの薬があんだ？」と言う悠木に「当たりをつけてある」と宇佐美。スマホを取り出し、悠木と帆波に画像データを送信した。帆波は黒いバックパックから、悠木は尻ポケットからスマホを出し、画面に視線を落とす。

「ラボの見取り図だ。三階と四階のラボエリアの中に、ガラス窓のない部屋が五つだけある。三階に三部屋、四階に二部屋。赤い丸のついた場所だ」

画面に目を落としたままの二人が揃ってうんうんと頷く。

「この窓のない部屋で例の薬剤を作っている可能性が高いと思う。大っぴらにはできないだろうからな。手分けして探そう。二人は四階に、僕と依子さんは三階に」呼ばれた依子はわずかに頬を赤らめ頷いた。

「カードキーで鍵開けられるのは良いけどさ。中に人がいたらどうすりゃいいの？」悠木がキーを見ながら疑問を口にする。

「そこはなんとか切り抜ける、名優」

宇佐美の言葉に悠木は帆波の顔を見て「だってよ、名女優」、帆波が肩を竦めて見せる。

「薬の識別コードは覚えているか？ IG722だ。できればそのコードが写り込んだ状態で、薬剤の製造現場だと分かる写真を押さえろ」

悠木達と別れ、宇佐美と依子は三階の廊下を進んだ。まずは突き当たり右手側の部屋。扉に耳を近づけ中の様子を窺う。音はしない。依子と顔を見合わせる。スーツの胸ポケットからカードキーを取り出し、扉の右横にあるカードリーダーに手を伸ばす。が、エレベーターホールからバタバタと物音が聞こえてきたので、すぐに手を引っ込める。見ると、制帽にブルーの制服、防刃チョッキを着込んだ五人の男の姿があった。警備員ではない。

「ああ、そちらにいらっしゃいましたか」

集団の先頭に立った男が宇佐美と依子の姿を見つけ、手にしていた警棒をさっと下ろす。それを見た後ろに続く四人の男のうちの一人が腰から下がった革ベルトに手にしていた黒い物体をしまった。まさか、拳銃？ んんとして目を凝らす、ここからではよく見えない。

「春日依子さん、それに宇佐美壮吾さんですね。警察です、避難してください。この施設に不審者が侵入したという通報がありました」

依子の顔を見下ろす。青褪めた顔で首を何度も横に振っている。依子が裏切ったわけではないのか。とすると、まさか慶一郎が手を回したのか――

「友人が二人、四階にいます」伝えるが警察を名乗る男はかぶりを振り「保護対象は貴方達二名だけだと聞いております」

その言葉に、宇佐美は顔をこわばらせる。エレベータホールでは、制服姿の男が無線機に向かい「対象は四階に、二名」。手前に立つ男の両手が再びホルスターに伸びる。

「まさか発砲許可が？」宇佐美の疑問に傍らの男は答えない。

次の瞬間、勢い良く飛び出し男の脇をすり抜け駆け出したが、すぐに後ろから羽交い締めになされ止められた。非難の声を上げようとするが、警棒で喉元を圧迫されぐつと息が詰まる。

「壮吾さんっ!!」背後で、依子の叫びが上がる。拘束された宇佐美が、エレベータで上階に移動しようとする男達を上目で睨み、

――危険だ……逃げろ、悠木っ!!

9

「スパイ大作戦」

エレベータホールの壁に背を張り付かせ、曲り角から首を伸ばし、廊下を覗きながら悠木が呟く。

「その動き怪しすぎるから止めなさいよ。監視カメラに見られてる」

帆波が注意するとホールの天井からこちらを見るカメラに目をやり、ひらひらと手を振る。

「ファンサービス」

「だから止めなさいって」

スマホ片手に見取り図を確認しながら赤丸のついた部屋を目指す。一つ目は、大きなガラス窓のある部屋の手前、中を窺うことができない閉ざされた小部屋だ。幸いなことにホールにはあった監視カメラが廊下には無いようだ。記録に残すにはマズいものを製造しているせいだろうか。

ドアの前に立った悠木がカードリーダーに手を伸ばす。かと思えば、その腕がぴたっと止まり帆波を振り返った。

「中に人がいたらなんて言い訳する？ 設定決めとくか」

「設定い？」

悠木が帆波を指差し「ヤクルトレディ」

「私服ですが」

自身を指差し「ガス漏れの連絡を受けて来たガス会社の調査員」

「ガスなんて使ってないんじゃない？ あと、私服だし」

今度は帆波と自分を指差し「セックスできそうな場所を探してるオフィスラブ中の不倫カプル」

「お断り」

またまた自分を指差し「爆破予告を受けて出動した爆弾処理班」

「どっちかって言うのと爆弾魔の方でしょ、私服だし。もういいから、すみません間違いましたって言いなさい」

悠木は首を傾げながら「じゃあ不倫カプルかな」と言い、カードリーダーにカードキーを差し込んだ。ピツという電子音の後、かちゃっと鍵の開く音。悠木がレバー式のノブに手をかけ、扉をゆっくりと押す。

「……誰もいないみたいだぞ」

中は真っ暗だった。悠木が室内に足を踏み入れると、パツパツと天井に並ぶ白い照明が自動で点灯した。部屋は横長で小さな会議室ほどの広さがあり、壁一面に天井まで高さのあるスチール製の白い収納棚が並んでいる。

「ラボっていうより倉庫みたいだね」

悠木が棚に近づき次々と扉をスライドさせていくが、ファイルが並んでいるばかりで薬品の類は見つからなかった。

「外れだな」

棚の扉を戻し、連れ立って再び廊下に出る。しばらくすると、遠くからエレベーターの到着する音と共に人が降りてくる気配を感じた。悠木が眉を顰めて帆波の顔を見る。人差し指を唇の前に立て合図を送る。帆波も黙って頷き返す。

静かに、ゆっくりと廊下の先へと進んでいく。すると、

「そっちを見てこい」という男の太い声が出て、足音が近づいてきた。バタバタと騒々しく、複数人いるように思える。悠木が黙ったまますぐ隣にあるガラス張りのラボを指差す。中は暗く、人がいないようだ。素早くカードキーを差し込み二人で室内に滑り込むと、自動で照明が灯りぎくりとする。悠木が廊下側、ガラス窓に面して設置されている横長のデスクの下を指差す。キャスター付きの椅子をどけ、二人でその下に潜り込む。目だけを動かし天井をざっと見渡す。この部屋にも監視カメラは無いようだ。

耳を澄ませていると、足音がゆっくりと近づいて来るのがわかった。デスクの下で体育座りをし、身を小さくする。すぐ隣に座る悠木も膝を抱え、外の様子に耳を傾けている。じっとしているうちに足音は通り過ぎ、少しずつ遠ざかっていった。

帆波がほっと胸を撫で下ろし溜息をついた時、パツと室内の照明が消えた。人感センサーに反応が無くなったせいだろう。足音が止まる。そしてまた、近づいて来る。カードリーダーの

ピツという音、室内に人が入ってきた。照明が再び灯る。

帆波は無意識のうちに口元を両掌で抑えていた。身をさらに小さくすると、右隣に座る悠木と肩が触れる。その悠木は口を結び、出入り口の方に目線を動かし男の様子を確認している。

灰色のタイルカーペットの上に、ゆっくりと踏み出される黒い革靴。濃いブルーのパンツ、革ベルトからはくるくるとカールする黒い吊り紐、その先に繋がるのは、両手で掴んだ拳銃

その黒光りする物体が目に入り、帆波は思わず悲鳴を上げそうになった。両掌で口を塞いでいたおかげで、間近に迫る脚の主に存在を気づかれることはなかった。今は、まだ。

拳銃の先が床を向いたまま、獲物を探すサーチライトのように、右に、左にと動く。心臓の音が大きく鳴り男に聞えてしまうんじゃないかと心配だった。目だけを動かし、悠木の顔を確認すると眉根に深い皺を寄せ、足の動きを凝視していた。

「おい、いたか」

再びがちやりと扉が開き、別の男の声がした。呼びかけられた脚の主は立ち止まり「いえ、こちらには」と答える。そのままくると引き返し外に出ていった。悠木と帆波は男達が出て行ってからもしばらくの間、デスクの下で硬直していた。やがて、照明がふっと消え、ほっと小さく息をつく。

「あれ、モデルガンかな」耳元に口を近づけ囁くような声で尋ねると、悠木は「いや」と短く返した。

廊下にはまだ人の気配がある。ぼそぼそと遠くから聞こえてくる話し声から、先程より人数が増えている気がした。このフロアに三人か、少なくとも四人。この先、まだ増えるのだろうか。

「警備員？」

「銃持ってたから警官かな」言いながら悠木は、スマホを操作していた。送信ボタンに触れた後、「起きててくれよ……」と険しい表情で呟く。「誰に」と尋ねたが答えは返ってこなかった。デスクの下に隠れてから、ずいぶんと時間が過ぎた。

廊下にまだ人の気配がある中で、少しでも動くと照明が灯りそうに動けなかった。壁を背に、右隣にいる悠木の身体に凭れ掛かり、その肩に頭を預けている。悠木も帆波に寄り添い、首を横に倒し帆波の頭上に乗せている。とにかく疲れていた。

「ねえ」

「なに」

ほとんど囁きに近い小声で悠木が話しかけてきた。

「手、繋いでもいい？」

驚いて、ちらと見上げる。こちらを見た顔がニヤリと歪み、

「怖くて」と続けた。

帆波は床に放り出されていた悠木の手の甲に右手を重ねた。その手が返り、強く握り返される。触れた掌はひんやりと冷たく感じられた。

「あなたの手は冷たい」

「心が温かいもので」

思わず、噴き出しそうになる。

「帰ろう、絶対に」、帆波が言う。

「うん」

悠木の声が珍しく心細げに聞こえ、帆波は繋いだ手に力を込める。

「……あなたがいてくれて良かった」、消え入りそうな悠木の声。

その言葉に、帆波は小さく頷いた。

廊下から人の気配が消えてから、しばらく時間が過ぎた。

「出てみる？」 帆波が尋ねると頭上の悠木が「ちよい待って」と言い、スマホの画面にフロアの見取り図を表示させる。「たぶん、ここに非常口がある」 指差した先、赤丸で囲われた小部屋の手す横、外壁にドアのマークが描かれていた。

「エレベーターは危ない。ここまで走って外に出る」

「葉は、写真はどうするの」

「諦める」

「でも」

「武装おまわりに射殺されたらどうすんだよ。あいつら多分、ウサちゃんの親父の手回しだろ。捕まったらまじで爆弾魔にされるぞ」

悠木の言葉に、ゾッと背筋が凍る。「ただの主婦ですが」と心の中で泣く。

「また出直しゃいいよ、生きてりゃチャンスはある」

「わかった」 顔を見合わせ、頷いた。

廊下に出る。人はいない。悠木に続き足音を立てないよう、それでも足早に移動する。途中、左に曲がると廊下と廊下を繋ぐ通路にトイレがあった。人の気配はやはりない。次の廊下の向こうに、さらに並行する廊下がある。手前の廊下を横切り、一気に走り抜ける。現れた廊下をまた右に。突き当りの壁には白い扉。飛びついた悠木がカードリーダーにキーを差し込む。鉄製の扉が開く。

「早く」

促され、扉を通り抜ける。そこはもう屋外で、鉄製の非常階段の踊り場になっていた。帆波が先に進もうとすると、足元で金属の軋む音が響く。ぎくりとして足を止め、振り返る。驚いたことに悠木はまだ扉の向こう側にいた。

「早く来てっ」 小声で呼ぶが、悠木は動かない。

「葉を探してから行く」

「なら、私も——」

「あんたは娘のところに戻ってやれ」

その言葉と笑みを残し、悠木は扉を閉じた。帆波は飛びついてノブを回したが、すでに内側から鍵がかかっけていて動かない。

10

帆波を避難させてから、悠木は赤丸のついた最後の部屋に入った。その部屋は先程の倉庫よりずっと狭く、自宅のトイレを三つ横に並べたほどの広さだった。窓はなく、照明も点かないせいで扉を閉めると真っ暗になった。悠木はスマホをライトモードに切り替え、室内を照らす。照明のスイッチがなぜか見当たらない。仕方なくスマホの灯りだけを頼りに室内を見回すが、正面の壁に先程のより小さな白い棚があるのみだった。重箱の箱ほどの大きさの抽斗が並んでいる。「いっじゃない」と舌打ちする。

それでも念のためと思い、目の高さにある最上段の抽斗を引っ張り出す。すると中には、ぎつしりとアルミ製の包装シートが並んでいた。驚き、シートを一枚抜き取ってライトを当てる。透明プラスチックとアルミに挟まれた錠剤が六つ並んでいる。刻印はIG72。

「おお、ラッキー」思わず声が出た。スマホ片手に抽斗の中、手にした包装シートを角度を変えて数枚撮影する。画像データを確認すると、しっかりと識別コードも撮れている。しかし単なる葉の保管棚といった感じで、これが世間を動かすような大きなインパクトを与える写真とは到底思えなかった。

これ以上、ここにおいても仕方なく感じ、抽斗から包装シートを三枚ほど抜き取り、ポケットに入れる。ドアを内側にゆっくりと引く。廊下からわずかに、人の気配。素早く飛び出て非常階段へと続くドアに飛びつく。

「おい、お前っ！」

後ろから追いかけてきた野太い声は無視して、鍵を外して白い扉から外に出る。踊り場、階段の隙間から地上を確認する。警官が三人、いずれも警棒と銃を携帯している。帆波の姿はない。一瞬、ほっと胸を撫で下ろす。上を向く。急いで階段を昇るとゴン、ゴンと金属音が響いた。地上の警官から「いたぞっ！」の声。振り返らず二段飛ばしで階段を登っていく、踊り場に出る、また登る、また踊り場。息が切れてきた頃、突き当りにまたも金属製の白い扉。カードリーダーは無くシリンドラーがあるのみ。開くか——

祈るような気持ちでノブを回し押すと、抵抗なくドアは開いた。視界に飛び込んできた空は黒、屋上だった。

肩で息をしながら、ドアノブについたつまみを倒し、前を向く。暗い空の下、ネットフェン

スの向こうには街が広がっている。一つ一つの家に明かりが灯り、まるで水面のようにキラキラと光り輝いていた。ふらつく足取りでネットフェンスに近づいていく。なぜか警官は追って来ないようで、不思議に思う。

突然、「悠木く——んっ！」という女の叫び声が夜の街の静けさを切り裂いた。続けて、「泉くんっ！」「悠木——っ!!」という黄色い声援。女の声が多く、たまに男声が響く。声のした方を見下ろすと、正門の前、フェンスのすぐ側に人だかりが出来ていた。悠木の姿を見つけ、きやあっ！と大きな歓声上がる。

「莉人……」

帆波とラボに隠れていた時、悠木は莉人にメッセージを送っていた。「厚木の春日製薬工場。エニグマのファンサイトに、俺がいるって書き込んで」莉人がそのメッセージを読んでくれるという確証はなかったが希望を託した。莉人は、目を覚ましていた。

よく見ると敷地の周りにはバンが数台停まっており、マスコミも集まっているようだ。正門の近く、詰め所の横には宇佐美と依子、それに帆波の姿も見える。警察に捕まっているようだが人の目が集まっている以上、無闇に手出しはできないはずだ。

「……どうすつかな」

悠木は呟き、屋上から街を見下ろす。

若い女、若い男、年をとった女、年をとった男、警官、マスコミ、野次馬、通りすがりの人、金持ち、貧乏人、ただの主婦、政治家の息子。

——ああ、ぐちゃぐちゃだ。

なぜか笑いが込み上げてきた。

悠木は目の前のフェンスによじ登りはじめた。きゃ——っ！という複数の叫びがビルに反響する。フェンスを乗り越え、建物の壁際まで30cmほどある狭い足場に立つ。

地上からカメラクルーの撮影用ライトがこちらに向けられた。わずかに届いた明かりが全身を照らす。

尻ポケットから薬の包装シートを取り出し、見せつけるようにひらひらと動かす。中から二錠、アルミを破って錠剤を押し出し掌に握り込む。地上では、宇佐美と帆波が心配そうにこちらを見上げてるのが分かった。

まっすぐ前に向き直り、遠い先を見つめる。

街を灯す暖色の明かりの中、赤いテールランプがちらちらと揺れている。綺麗だな、と思う。見下ろすと爪先には二つの笑顔、ジャックパーセル。

悠木は上を向いて大袈裟な仕草で薬を飲み込むと、目の前の空間にひらりと身を投げた。

「悠木——っ!!」

宇佐美の叫びが聞こえた。

違う。

あれはきつと、シャチの呼び声。

11

春日製菓の工場から悠木 泉が飛び降りた事件は世間を多いに騒がせた。休養中だった人気俳優の身投げ。しかしその行動には謎が多く、人々はこの事件に釘付けとなった。なぜ悠木が製菓会社の工場などにいたのか。飛び降りる前にカメラに見せつけ、そして飲み込んだあの薬は何なのか。SNSでは憶測が後を立たなかった。

そのおかげで、悠木の持っていた包装シートと口内にあったIG722は徹底的に調べ上げられ、衆目に晒されることとなった。その効果が人を死に追いやる毒物であることが分かると、春日製菓は追い詰められた。現在、その製造目的を巡って取り調べが継続されている。その調査の手が宇佐美の父・慶一郎の元まで伸びるかどうかはまだ分からないが、これで慶一郎のロブスター計画が頓挫することは間違いない。と、宇佐美は踏んでいる。今のところは、だが。

その後、すぐに病院に運び込まれた悠木は一命を取りとめた。植木の上に足から着地したのと、飲み込んでいたはずの菓が落下の衝撃で喉を逆流し口内に戻っていたことで死を免れた。緊急病院を出た後は宇佐美の系列病院で入院生活を送っていたが、ある日、忽然と姿を消し、消息を絶った。

悠木が姿を消してから、もう半年が経った。激しく流行が移り変わる中、世間はすぐに悠木の不在に慣れ、次第にその名を聞く機会は減っていった。

季節は冬。宇佐美は一人、千葉の海岸にいる。

灰色の海が風に煽られ高波を作っている。風が冷たい。砂浜にぽつんと座る小さな影を発見し、近づいていく。

「見つけた」

記憶の中よりずいぶんと後ろ髪が伸びたその背中に呼びかけると、すぐに振り返り、目が合った。口元は白いマスクで隠されているが、その目は確かに悠木泉のものだった。

「うわ、パーカー似合わねえな」

グレーのパーカーを着た宇佐美を見るなり、声が上がった。

「半年ぶりの会話がそれか」マスクの下で苦笑に口を歪めながら、宇佐美が悠木の隣に座る。

「潔く散ったのかと思ったぞ」

「人間がそんな簡単に散るかよ。桜じゃあるまいし」

不貞腐れたようなその声を、宇佐美は懐かしく思う。

「坊っちゃん、スーツは？」

「父に縁を切られた。今は無職だ」

「ああ」と悠木。

「そっちはどうしていた」

「最悪だよ、相変わらず」

横顔を覗き込むが、悠木は海に目を向けたままだった。しかしマスクの上の目は細められ、笑っているように見えた。

「あれから彼女には会ったのか」

「誰」

「神帆波」

「いや……」

「振られたか」

「あれは、そういうんじゃないだろ」悠木が俯く。

しばしの沈黙。ざざあ、と波音が耳につく。

「これからどうするつもりだ」

「そうだな……水族館作ってくれるはずだった友達も太い実家と縁が切れちゃったみたいだから」

友達という言葉に驚き再び顔を向けると、視線を躲すように悠木が立ち上がった。

「どうすっかな」

ぱん、ぱん、と尻についた砂を払い、こちらを見下ろし手を差し出す。

「一緒に行く？」

向けられた掌を見ながら宇佐美はわずかの間、考える。

やがてその手を取り、「行こう」と答えた。

どうせもう、帰る場所などないのだから。

（了）

〈終〉